

NHK「ハングル講座」の成立過程にかんする研究ノート

——日本人の韓国・朝鮮語学習にかんする歴史的研究（その2）——

南 相瓊（ナム サンニョン）

目次

はじめに——課題の設定

1. 先行研究について

- (1) 先行研究とその特徴
- (2) 先行研究の論旨
- (3) 先行研究で使われた資料
- (4) 先行研究についての私の関心

2. 講座開設を求める市民運動とその背景について——1974～76年——

- (1) 高淳日による『朝日新聞』への投書とその背景
- (2) NHKの回答とNHK内部での「研究」の歴史
- (3) 永井道雄文部大臣の“朝鮮語教育の必要性”発言——環境整備（その1）
- (4) 久野収・金達寿対談「相互理解のための提案」と市民の支持——環境整備（その2）
- (5) 「NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会」の発足——環境整備（その3）

3. NHKにおける講座開設決定にいたる経過（その1）——1976～77年——

- (1) 「NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会」の署名運動と文化講座
- (2) NHKへの講座開設要請とNHKの公式回答
- (3) 「NHKに韓国語講座を求める会」の要請とNHKの対応

4. NHKにおける講座開設決定にいたる経過（その2）——1977～84年——

- (1) 韓国・朝鮮語学習へのアプローチの見直しと
NHK文化センター主催の「日本語と朝鮮語」「朝鮮語の世界」講座
- (2) 「朝鮮語講座」名称での講座開設の決定と
NHK社会教育部による韓国・朝鮮語講座に関する会合

(3) 再燃した名称問題

- (4) 「안녕하십니까? ~ハングル講座~」としての開設決定と準備

5. 「안녕하십니까? ~ハングル講座~」出発——内容と反響

- (1) 第1年度の「ハングル講座」の内容
 - (2) 社会的反響と視聴者たちの声
6. NHK「ハングル講座」開設の歴史的立場づけについて
- (1) 三つの先行研究における歴史的立場づけについての二つの論点
 - (2) 第三の論点としての「歴史の転換」の局面の変化
 - (3) 『「ハングル講座」の10年——問題局面解決にむけた歩みの検討』の課題

はじめに

本稿は、1984年4月にスタートしたNHKの『안녕하십니까? ~ハングル講座~』(以下、「ハングル講座」とする)の成立過程にかんする研究ノートである。

近代日本における韓国・朝鮮語学習⁽¹⁾は、1870-90年代のおよそ30年間にその性格の基礎が決定づけられた。近代日本の韓国・朝鮮語学習は、江戸時代における「交隣」=対等平等の交際・相互理解のための朝鮮語学習の教材を利用しつつ出発した。しかしそれは、次第に朝鮮支配の手段へとその目的を変化させ、教材もまたそれに沿うものへと転換した。そして、朝鮮における1907年の日本語の公用語化1911年の「国語」化から1945年までの時期には、≪①朝鮮人に対する日本語強制 ②一般の日本人による朝鮮語無視・蔑視 ③警察官・看守・教員などによる支配のための朝鮮語学習≫という三位一体構造が存在した(南相璽「日本人の韓国語学習——朝鮮植民地化過程に焦点をあてて——」⁽²⁾参照)。

この植民地支配の時代における日本人の韓国・朝鮮語学習の構造は、なおさまざまな課題をかかえつつも、今日、次のような新たな三位一体構造へと基本的には転換したと言える。すなわち、≪①朝鮮半島および日本における韓国・朝鮮語学習の自由 ②一般の日本人の間での韓国・朝鮮語学習のひろがり ③相互理解・協力のための学習の展開≫という構造である。

この構造的転換は、基本的には1945年8月以後に始まったが、その過程は、そう単純なものではなかった。なぜなら、日本国内において、次のような問題が戦後しばらく、少なくとも1970年代初頭まで見られたからである。①1948年に日本政府によって出された民族学校閉鎖令による在日韓国・朝鮮人への母語教育の抑圧。⁽³⁾②多くの一般の日本人の間での韓国・朝鮮語に対する無視・偏見の継続。③天理大学の朝鮮学科が、日本における韓国・朝鮮語教育のノウハウを維持し蓄積してきたという実績を持ちながらも、警察庁・法務省の委託生⁽⁴⁾を受け入れたことに象徴される在日韓国・朝鮮人管理のための韓国・朝鮮語学習。

こうした単純ではない1945年以後の日本において、NHKによる市民むけの「ハングル講座」の開設は、さまざまな課題を残しつつも、上述の構造的転換を実現するうえで決定的な意味をもったと言える。

この講座の開設によってまず、①日本における韓国・朝鮮語学習へのアクセスがきわめて容易になった。これ以後、韓国・朝鮮語は、英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語・スペイン語について、テレビやラジオのスイッチを入れると朝の食卓や夜の茶の間に流れてくる言葉となり、学習機会が身近なところにある言語になった。

②また、この講座の開設は、在日韓国・朝鮮人にとって、民族の言葉の学習機会の拡大をも意味した。日本政府の民族学校への抑圧政策もあって、在日韓国・朝鮮人の2世3世には自分たちの民族言語を使えない人がふえていたが、講座開設は彼らにその学習機会を提供する意味をもった。

③さらにこれによって、韓国・朝鮮語を軽視・蔑視する傾向に変化が生まれた。予算・決算が国会の管理下にある公共放送としてのNHKがこの講座開設の主体だということは、韓国・朝鮮語学習の価値を、日本政府も含む日本社会が認知したことを意味したからである。

④日本の大学においてもこれ以後、朝鮮語（あるいは、韓国語、コリア語）科目の開設が増加し、1981年の国公立・私立あわせて50から、1988年国公立21私立43計64、1993年国公立40私立75計115と急速にふえた。

⑤そして、日本人と在日韓国・朝鮮人が協力した市民運動に講座開設の直接的きっかけがあったこともあり、この講座では内容の構成において日本人と韓国人・朝鮮人との相互理解が重視されてきた。これは、80年代後半以後に増加・開設をみた大学や公民館などでの韓国・朝鮮語教育の内容にも影響を与えたと考えられる。

⑥加えて、この講座は、その蓄積のうえにたって「『ハングル』能力検定」に見られるような、中級・上級コース開設の土台を作った。

以上のように言えるとすれば、この「ハングル講座」の開設過程を調査検討することが、上記の構造の転換の具体的な姿をとらえることにつながる。

このような視点から私は、明治期における日本人の韓国・朝鮮語学習についての論文執筆以後、「ハングル講座」の開設過程にかんする調査検討を当事者の方々からの聞き取り作業を含めて学習内容を重視しつつ行ってきた。そのさい、焦点をあてようとしたのは以下の諸点であった。それは、①先行研究の調査・検討 ②講座開設を求める市民運動の背景と経過 ③NHKにおける講座開設決定にいたる経過 ④講座開設決定後のNHKでの準備 ⑤1984年度の講座の内容と視聴者の反応 ⑥第2年度以後の展開を視野に入れた上での歴史的な位置づけ、である。そして、①～⑤については概ね事実経過について知ることができた。しかし、講座の成立過程を考える上で不可欠な、講座開設以前の日本人や在日韓国・朝鮮人の韓国・朝鮮語学習で使われていたテキストとの比較作業は、まだ未着手にちかいかい状態にあり、そのこともあって、講座の内容検討もきわめて不十分である。そこで、本格的な内容検討の作業に進めるために、今回は事実経過を中心としながら部分的に内容

検討を行う形で「研究ノート」として印刷し、諸先達のご教示を請いたいと考えた。そして、これを第1ステップとして、内容分析を中心とする「ハングル講座」の成立過程についての論文を作成したい。

註

- (1)私は1959年に韓国に生まれ、朴正熙政権の「維新体制」=思想統制下の韓国教育を受けたので、日本に来てからも「朝鮮」「朝鮮人」「朝鮮語」という呼称には抵抗があった。そのことは、私が『教育学研究』第58巻第2号(1991年6月)に書いた論文のタイトル「日本人の韓国語学習」にも表れている。しかし、日本に住んでいる朝鮮籍や一部韓国籍の人々、中国東北部「吉林省延边朝鮮族自治州」に住んでいる「中国朝鮮族」の間で話されている言語が、「朝鮮語」と呼ばれている事実があることを知った。そして、これをも「韓国語」という名称で包括することには無理があると考えようになった。したがって、ここでは「韓国・朝鮮語」という言葉を用いた。この名称については、私自身の課題として今後も検討して行きたい。ただし、植民地時代のものについては「朝鮮語」とする。なお、引用文については、原文に従う。
- (2)日本教育学会『教育学研究』第58巻第2号 1991年6月
- (3)小沢有作『在日朝鮮人教育論 歴史篇』亜紀書房 1973年 221-270ページ
- (4)1954年4月、当時の警察庁堀越教養部長の依頼によって、天理大学に修業期間1年の選科制度がおかれた。これにさきだつ1952年4月、委託生の制度がおかれ、朝鮮語に警察庁の委託生10人が入学した。同年同月28日、日本在住の韓国・朝鮮人はサンフランシスコ条約の効力によって日本国籍を失い、法務省によって外国人登録法が公布、即日実施された。天理大学は、また、1957年からは法務省公安調査庁から、1964年からは入国管理局から委託生を受け入れた。この選科には、中国語も1954年開設されている。選科制度が廃止される1970年までの修了生は、朝鮮語441名、中国語311名であった。この時期、天理大学で行われた韓国・朝鮮語教育は、教材内容をも含めてどのようなものであったのか、今後の検討課題としたい。

1. 先行研究について

(1) 先行研究とその特徴

私が現在知る限りにおいて、NHK「ハングル講座」の成立過程にかんする先行研究は、次の3点である。

- ①矢作勝美「『NHKに朝鮮語講座を』運動の八年」(『季刊三千里』第38号1984年5月)
- ②大野 力「『ハングル講座』の曲折を踏まえて」(『思想の科学』第387号1984年7月)
- ③大村益夫「NHK『ハングル講座』が始まるまで」

(『早稲田大学語学教育研究所三十周年記念論文集』1992年)

3人の執筆者のうち矢作と大村は、1976年3月に作られた「NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会」(以下、「要望する会」とする)の署名運動などに直接かかわった人である。大野は運動に役員などとして直接かかわった人ではないが、彼の論文が「要望する会」の市民運動の視点からのものだという点では、矢作・大村と共通していると言える。つまり、これまでの先行研究はいずれも「要望する会」の視点からのものであり、NHK内部や文部省側からのものはまだ存在していないように見られる。

(2) 先行研究の論旨

① 矢作論文

「要望する会」の事務局長を勤めた矢作勝美の論文は、「要望する会」の結成以来8年間の市民運動を経て1984年4月、「안녕하십니까? ハングル講座」のタイトルとして韓国・朝鮮語講座が開設する直前に書かれその直後に発表された。その主眼は、「『要望する会』の活動をふりかえながら、その経過をまとめておく」ことにあった。

矢作論文は、三つの先行研究の基調をなすものなので、その論旨を少し詳しく見ておきたい。

(a)「要望する会」発足のきっかけは、『季刊三千里』誌上(第4号1975年11月発行)での哲学者久野収と作家金達寿の対談「相互理解のための提案」であった。そこで久野は、NHKに「スペイン語があって朝鮮語がないとは、これは全然いけません」と述べ、朝鮮語講座の開設を要望する署名運動を提案した。

(b)この背景には、この時期、日本人の間で朝鮮語認識が高まり朝鮮語を学ぼうとする日本人がふえたことがある。また、当時の永井道雄文相も講演で、「世界の変化にあわせて日本人が国際化するためには、英語は中学から勉強するのに、隣国の言葉である朝鮮語は大阪外語大と天理大でしか教えていないといった矛盾を克服せねばならない」と述べていた。

(c)久野・金の対談を受けた矢作は、『季刊三千里』第5号(1976年2月発行)に「NHKに朝鮮語講座を」書き、久野や中野好夫らと相談して署名運動のアピール文や「NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会」という会の名称などを決めた。

(d)1976年4月、署名運動が開始され各新聞社にも協力を求めた。日本人の問題として自主的に提起した「要望する会」の市民運動は、個人カンパとボランティアの活動によって行われた。また、署名運動と並行して朝鮮語にかんする文化講座を開いた。

(e)1977年4月4日、38,478名分の署名をもってNHKに朝鮮語講座の開設を要請。NHKは、①新しい語学番組設置のさいには朝鮮語講座を優先する ②NHKの内部的条件には問題がないが、外部的条件が予想されるので、それを解消してから講座を開設したい ③早急に担当者をおき外部的条件の解消に努めたい、と回答した。

(f) その数日後、在日本大韓民国居留民団（以下、「民団」とする）中央本部が「＜韓国語講座＞開設要望書」をNHKに提出。また、民団によって「NHKに韓国語講座を求める会」（以下、「求める会」とする）が作られ、13万人余の署名をもって「韓国語講座」の早期開設を求めた。

(g) 1981年7月1日、NHKは1982年度から「朝鮮語講座」の開設を決定したが、これが韓国に伝わり、民団・駐日韓国大使館・韓国文化院・韓国放送公社などが一斉に反発。これに対して、朝鮮語は「古来からの半島に生活し歴史を創造してきた民の言語をさす」ものであり、「日本社会においては朝鮮語ということばは、歴史的・文化的・学術的に使用が慣用化されて」いるという意見が出、矢作もこれに同感であった。しかし、名称問題での妥協点を探ろうと、「韓国・朝鮮語」「コリア語」などの提案やそれをめぐる討論が、『朝日新聞』などを舞台に行われた。そして結局、1983年9月21日NHKは、「アンニョンハシムニカ？」のタイトルによる、84年4月からの講座開設を発表した。

(h) これに対して、「NHKの主体性放棄」という批判が出されたが、これに矢作も同感である。すなわち、NHKが「外部の圧力に屈して左右されるということはきわめて危険」で、それは「公共放送としての自らの使命を放棄し、言論の自由を踏みにじるもの」である。そして矢作論文は、それは「番組を維持していく上でも同じである」と、論文をしめくくっている。つまり、番組自体も主体的なものになることは困難であろう、と結論している。

②大野論文

矢作のやや否定的な結論に対して、その2カ月後に発表された大野力の論文は、矢作論文をふまえて呼称問題を前提としながら、「ハングル講座」開設の歴史的な意義を強調した。そして、「講座活用運動」の可能性の追求と、そのための「現状の『ハングル講座』が抱えている問題状況を知ること」の必要性を提起した。

(a) 大野は矢作と基本的には同様の事実認識にたちながらも、矢作が述べた日本人の間での朝鮮語認識の高まりに一步立ち入って、久野・金対談前年の1974年11月26日の高淳日による『朝日新聞』への投書「NHKは朝鮮語講座を開設して」に注目。この高投書が、矢作も言及している金大中キムデジュン拉致事件をきっかけとする日本人の韓国・朝鮮および朝鮮語学習への関心の高まりを背景としてしつづつ次のように述べている。すなわち、高投書に対する同年12月5日のNHK通信教育番組班部長による“国連用語を中心”の考えと、時間確保の困難を理由とする「拒否回答」に対して、批判の投書がNHKに寄せられた。また、グループとしていち早くNHKに朝鮮語講座を求めたのは、早稲田奉仕園内に設けられた「NHKに『朝鮮語講座』の開設を要望する会」であったが、NHKの回答は高の時と変わらなかった。

(b) そうしたなかで、久野・金対談をきっかけとする76年4月24日からの「要望する会」の

署名運動が、NHKの「講座」開設に大きな役割をはたした。

(c)そして、大野は、朝鮮半島の人々に日本語強制・朝鮮語禁止をした歴史をもつ日本において、公共放送機関であるNHKが朝鮮語を日本人に普及しようと「講座」を開設したことは、日本における一つの「歴史の転回」であると強調。

(d)その上で、市民運動としての「講座」開設の要望は「学習運動」「講座活用運動」を想定していたのだから、今後、「講座活用運動」によって「講座」を発展させることが重要だとしている。

③大村論文

大村益夫は「要望する会」のアピールに名を連ねた40人の学者・文化人のひとりである。「要望する会」の署名運動から16年後、「講座」発足から8年後の時点で書かれた大村論文は、そのねらいを、開設に至るまでの経緯とその過程における問題点を「客観的に記録し、整理」することにより、「なかば資料集と資料解説のような性格」をもつものとしている。後掲のように、大村論文では72点の資料が使われているが、うち45点が矢作論文・大野論文では使われていなかったものである。このように資料的な価値も高い大村論文は、矢作・大野を引き継ぎながら、次の点でより踏み込んだ論述を行っている。

(a)1965年の日韓条約前後には2・3人の応募者しかなかった「朝鮮語講習会」もあったが、75年ころには「会場が狭くて受講希望者をことわるケースもあられ」るほどだったこと。

(b)永井文相の構想に基く東京外国語大学での朝鮮語科復活(1977年)や富山大学での朝鮮語・朝鮮文学科の新設(1977年)⁽⁴⁾など、大学における朝鮮語講座開設も徐々に活発になっていたこと。

(c)また講座の呼称問題について、1950年韓国政府が「朝鮮」の用語使用を禁止する通達を出すことによって韓国社会から「朝鮮」という用語が追放されたが、ソウル大学言語学科教授でのちにソウル大学語学研究所長になる^{イヒョングク}李炫馥のように、韓国にも「朝鮮語」に賛意を示す学者もいたこと。

(d)NHK社会教育部長が、1981年7月1日、NHK放送センターに梅田博之・大江孝男・梶井陟・塚本勲・大村益夫を呼び寄せ、「朝鮮語講座に関する研究会」を開き、82年4月から「朝鮮語」という名称で開設することを決めたので、それへの協力を願いたいという「宣言と依頼」を行ったこと。

(e)それにもかかわらず、82年4月開講の断念とその後の講座名変更は、NHKの主体性放棄ではないか、と大村は批判している。

(f)しかし、そのような複雑な経過で開設にいたった「ハングル講座」ではあるが、「朝鮮語学習が日本の変革にかすかにでも連なりうるのではないか」という期待に私は賭けたい」と結んでいる。

(3) 先行研究で使われた資料

先行研究で使われた資料は、次の四つに大別される。(a)市民運動の当事者としての体験および見聞 (b)当時の日本と韓国での新聞記事・論説・社説 (c)『季刊三千里』等の雑誌の記事 (d)『要望する会ニュース』その他、である。このうち (b) - (d) の文字資料の数は78点にのぼる。それは以下のとおりである。資料末尾の①②③の数字は、それぞれ、矢作論文 (①)、大野論文 (②)、大村論文 (③) で使われた資料であることを示している。

〈新聞〉

A. 日本発行の新聞

(1) 『朝日新聞』

- | | | |
|----------------------------|-------------|-----|
| 1. 高 淳日：NHKは朝鮮語講座を開設して | 1974年11月26日 | ②③ |
| 2. 寺脇信夫：朝鮮語講座でお答え | 同年12月 5日 | ② |
| 3. NHKに朝鮮語講座を 文化人ら署名運動 | 1976年 4月28日 | ①②③ |
| 4. 中野好夫：まず言葉から――NHKに朝鮮語講座を | 同年 5月24日 | ① ③ |
| 5. 天声人語 | 同年 5月26日 | ③ |
| 6. 「朝鮮語」に韓国反発 | 1981年 7月 7日 | ③ |
| 7. 朝鮮語講座は見送り NHK 4月の番組改編 | 1982年 1月22日 | ③ |
| 8. 徐 龍達：「韓国・朝鮮語」を統一用語に | 1983年 3月15日 | ① ③ |
| 9. 大村益夫：呼称「朝鮮語」に正当性 | 同年 3月25日 | ① ③ |
| 10. 李 度珩：「朝鮮」を拒否し「韓」を名乗る | 同年 4月 4日 | ① ③ |
| 11. 宇田川浩：「韓国・朝鮮語」で講座を | 同年 4月 8日 | ① ③ |
| 12. 李 聖雄：「コリア語」を呼称に | 同年 4月 9日 | ① ③ |
| 13. 「韓国」「朝鮮」を使わず | 同年 4月21日 | ① ③ |

(2) 『東京新聞』及び『東京タイムズ』

- | | | | |
|-------------------|----------|-------------|-----|
| 1. 永井道雄：教育の流れは変わる | 『東京新聞』 | 1975年 5月27日 | ①②③ |
| 2. 井手孫六：語学 | 同 | 1976年 5月 4日 | ①②③ |
| 3. 米山俊直：語学番組 | 同 | 同年 6月11日 | ③ |
| 4. NHKと朝鮮語講座 | 『東京タイムズ』 | 同年 6月10日 | ③ |

(3) 『毎日新聞』

- | | | |
|-------------------------------------|-------------|-----|
| 1. 長谷川隆子：朝鮮語の講座開設を望む―編集者への手紙 | 1976年 7月 8日 | ③ |
| 2. 梶井陟：「朝鮮語講座」はなぜ必要か ⁽²⁾ | 1977年 9月 1日 | ① ③ |
| 3. 国際化の中で 朝鮮語か韓国語か | 同年12月20日 | ③ |
| 4. 小野 実：朝鮮を全体としてとらえること (上) | 1978年 4月 6日 | ③ |
| 5. NHK講座名論争やっとなり決着 | 1983年 9月22日 | ③ |

(4) 『読売新聞』

- | | | |
|---------------------|-------------|---|
| 1. NHKの24時 朝鮮語か韓国語か | 1981年 4月11日 | ③ |
| 2. 朝鮮語講座に韓国強く反発 | 同年 7月 7日 | ③ |
| 3. NHK語学講座の名称に韓国は反発 | 同年 7月10日 | ③ |
| 4. 「ハングル語講座」来春開講へ | 1983年 9月22日 | ③ |

(5) 『神奈川新聞』などその他の新聞

- | | | |
|------------------------------------|----------------------|---|
| 1. 旗田巍：政治の次元を超えて実現を ⁽³⁾ | 『神奈川新聞』 1977年 9月25日 | |
| | および『京都新聞』 同年10月 5日① | ③ |
| 2. 大村益夫：朝鮮語学習の必要性 | 『北海道新聞』 1981年 8月11日① | ③ |

(6) 『統一日報』

- | | | |
|--------------------------------|-------------|---|
| 1. 韓国語講座, NHK会長が前向き回答 | 1977年 4月 7日 | ③ |
| 2. 「韓国語講座」開設を早期に | 同年 4月12日 | ③ |
| 3. 韓国語講座 早期開設に全力を民団中央, NHKに要望書 | 同年 4月13日① | ③ |
| 4. 「韓国語」開設へ署名運動 | 同年 4月14日① | ③ |
| 5. 青年会が街頭署名運動 | 同年 4月26日① | |
| 6. 40万人をめざす | 同年 5月 5日 | ③ |
| 7. 署名活動で侮辱されたこと | 同年 5月12日 | ③ |
| 8. NHK韓国語講座署名運動 | 同年 5月21日 | ③ |
| 9. 10万人突破も目前 | 同年 6月 3日 | ③ |
| 10. 来週中にも15万突破 | 同年 6月11日 | ③ |
| 11. NHKに韓国語講座署名10万人を超える | 同年 6月15日① | ③ |
| 12. 日本国会図書館職員も大量署名 | 同年 6月18日 | ③ |
| 13. NHK会長に「署名伝達」 | 同年 7月 2日 | ③ |
| 14. 民団全国団長会議開く NHKあくまで「韓国語」で | 1981年 7月 8日 | ③ |
| 15. 韓国語講座開設を・民団愛知, NHKに要望 | 1983年 3月26日 | ③ |
| 16. 韓国語講座来年4月に開講 NHK名称は検討中 | 同年 4月22日 | ③ |
| 17. 来年開講にホットする思い NHK韓国語講座 | 同年 4月28日 | ③ |
| 18. NHK韓国語講座の名称「アンニョンハシムニカ」に | 同年 9月23日 | ③ |
| 19. 金考一：NHK講座で韓国語を学ぶ | 1984年 1月13日 | ③ |
| 20. テレビでもウリマル学習 4月から週1回 | 同年 1月21日 | ③ |

B. 韓国発行の新聞

(1) 『東亜日報』

1. NHK講座建議을契機로 본 日本에서의 韓国語講座

- (NHK講座建議を契機として見た日本における韓国語講座) 1976年 5月 4日 ②③
- (2) 『朝鮮日報』
1. 「韓国語강좌」를 「朝鮮語강좌」로
 「韓国語講座」を「朝鮮語講座」に) 1981年 7月 4日 ③
 2. 李度珩: 「서울표준말」이 왜 「朝鮮語」냐
 (ソウルの標準語がなぜ「朝鮮語」か) 同年 7月 7日 ③
 3. 排日感情의自招——日 NHK의 講座호칭을 駁한다——
 (排日感情の自招/日本のNHKの講座名称を駁す) 同年 7月 8日 ③
 4. 日 NHK프로 韓国語講座 명칭 「韓日友好참작 결정」
 (日本のNHKプロ韓国語講座名称「韓日友好参酌して決定」) 同年 7月10日 ③
- 〈雑誌〉
- A. 日本発行の雑誌
- (1) 『季刊三千里』
1. 久野収・金達寿対談: 「相互理解のための提案」 第 4号 1975年11月① ③
 2. 矢作勝美: NHKに朝鮮語講座を 第 5号 1976年 2月①②③
 3. 今田好彦: あらたな日朝文化交流 第10号 1977年 5月① ③
 4. 矢作勝美: 六年ごしの要望 第29号 1982年 2月① ③
 5. 小長谷博: もっと認識を深めなくては 第30号 同年 5月 ③
 6. 矢作勝美: 「NHKに朝鮮語講座を」運動の八年
 (2) 『ちゃんそり』 第38号 1984年 5月①②
1. 「NHKに朝鮮語講座を絶対つくらせない会」を 第1巻第1号 1979年 9月 ③
 2. 「NHKに朝鮮語……」への反論 第1巻第2号 同年12月 ③
- (3) 『ばらむ (바람)』
1. 片桐晃: 逆からの第一報 第66号 1981年 9月 ③
 2. 大村益夫: NHKへの手紙 第94号 1984年 1月① ③
- (4) その他の日本発行の雑誌
1. 徐 龍達: NHK講座は「韓国・朝鮮語」で 『文芸春秋』 1982年3月 ③
 2. 佐久間英明: NHKの朝鮮語講座放送中止について
 『むくげ通信』 第71号同年3月 ③
 3. 徐 龍達: 平和統一への一步はまず用語から 『朝日ジャーナル』 同年7月23日 ③
 4. 大村益夫: 「韓国・朝鮮語」は妥当か 同 同年8月13・20合併号 ③
 5. 徐 龍達: 「韓国・朝鮮語」を統一用語に 『朝鮮研究』 1983年1月 ③
 6. 大原照久: 韓国のこころ(3) 『アジア公論』 同年 ③
 7. 村山俊夫: NHK朝鮮語講座開設について 『그날 (その日まで)』 2号1981年秋 ③

B. 韓国発行の雑誌

1. 李 炫靨：한국어와 조선어의 서글픈 싸움 (韓国語と朝鮮語の悲しい戦い)
『한글새소식』109号 한글학회 1981年9月5日 ③

〈『要望する会ニュース』その他〉

A. 『要望する会ニュース』

- | | |
|--------|----------------|
| 1. 第1号 | 1976年 8月 1日①②③ |
| 2. 第2号 | 同年 9月15日①②③ |
| 3. 第3号 | 同年10月15日①②③ |
| 4. 第4号 | 同年11月15日①② |
| 5. 第5号 | 1977年 1月20日 ② |
| 6. 第6号 | 同年 4月25日 ② |

B. その他

1. 大村益夫：朝鮮と韓国の呼称 講談社『朝鮮・モンゴル』所収 1983年12月 ③

(4) 先行研究についての私の関心

3つの先行研究について、日本人の韓国・朝鮮語学習の歴史的研究という私の視点からは、次の諸点を明確にしたい。

①市民運動とその背景にかんして

(a) 1975年の高淳日投書背景となったとされる、「朝鮮語学習熱」の実際の状況はどんなものだったのか。とくに、どんな人々が、どんな教材を使い、どんな方法で学んでいたのか。NHKにおける講座開設にどんなことを期待していたのか。

(b) 高の投書に対するNHKの回答のなかに「ご希望の講座につきましては現在いろいろ研究をはじめておりますが」とあるが、NHK内部での「研究」とはどんなものであったのか。

(c) 「要望する会」のアピールでも援用されており、3つの論文いずれにおいても論及されている、1975年の聖心女子大学における永井文相講演と永井構想に基づく東京外国語大学や富山大学での朝鮮語科等の設置の背景はどんなものであるのか。

②NHKでの講座開設にいたる過程について

(a) 「要望する会」が署名運動と並行して行った「文化講座」の内容はどんなものであり、それは講座開設にどんな影響を与えたのか。

(b) 「求める会」の署名運動の背景にも、「要望する会」のような「韓国語」学習熱があったのか。あったとすれば、学習者・教材・方法などの点で、どんなものだったのか。

(c) 1981年7月までに「朝鮮語講座」としての開設を決める過程で、NHK内部ではどのよ

うな努力がされていたのか。「朝鮮語講座」の名称によって「求める会」側の実質的な要望をどのようにクリアできると考えていたのか。

(d) 『朝鮮日報』などでの呼称問題にかんするキャンペーンでは、呼称だけが問題となっていたのか、それとも内容上の問題も含まれていたのか。

(e) 「안녕하십니까? ~ハングル講座~」の名称による84年4月開講決定と、その準備過程における講師選定等はどのようになされたのか。また、テキストの準備はどのようになされたのか。

③ 「ハングル講座」の内容と視聴者の反応について

(a) 第1年度のテキストの内容は、どんなものだったか。

(b) 呼称問題にかんする論争の決着の仕方から内容上にどのような制約が生じたのか、生じなかったのか。

(c) 視聴者の反応はどんなものだったのか。

④ 歴史的位置づけにかんして

(a) 開設後の10年間に、「ハングル講座」が実際に与えてきた影響はどのようなものか。

(b) またこの間に、どのような内容・方法上の工夫・改善がなされてきたのか。

(c) 現在直面している課題、あるいは今後に残されている課題はどんなものか。

(d) 「ハングル講座」開設の歴史的意義については、3つの先行研究の間で微妙に評価が分かれているが、以上をふまえたときに、歴史的意義についてどのように考えることができるだろうか。またそれは、大学や公民館などで行われている韓国・朝鮮語の学習・教育に、どのような示唆をしているのか。

⑤ 資料について

開設要望運動の当事者であった3つの先行研究の筆者たちにとっては、実際に使われていたテキストなどは自明だからだろうか。これらの先行研究では、市民運動の経過と呼称問題についての論争に資料が集中している。しかし、私は韓国生まれであり、世代的にもこの「ハングル講座」の成立過程を「歴史」として追体験する以外に学ぶ方法をもたない。そこで、「ハングル講座」成立以前の日本における、一般市民たちの韓国・朝鮮語学習の具体的な様子を、教材・方法を含めて知ることができるための資料に、できるだけ接したい。

註

(1) 私の調べでは、1978年である。

(2) 『季刊三千里』第12号 1977年11月に再録

(3) 同上

2. 講座開設を求める市民運動とその背景について——1974～76年——

(1) 高淳日による『朝日新聞』への投書とその背景

①高淳日による『朝日新聞』への投書「NHKは朝鮮語講座を開設して」

大野論文・大村論文にあるように、NHKに朝鮮語講座の開設を公けに求めた最初の人
は、在日朝鮮人の高淳日であった。すなわち、1974年11月26日付『朝日新聞』に、高の投
書「NHKは朝鮮語講座を開設して」が掲載された。全文は次のとおりである。

「NHKは朝鮮語

講座を開設して

東京都 高淳日

(会社役員 46歳)

朝鮮と日本は一衣帯水の間柄である。だが日本人は『朝鮮』についてどれほど知って
いるのか。

明治以降、日本人の目は西欧に向いても隣国朝鮮については侵略の目でしか見なかつ
た。今日でも南朝鮮への経済的侵略には熱心だが、朝鮮文化を理解する点では全く熱意
がないといっても過言ではなかろう。日本の大学に朝鮮語の講座のあるのは虫めがねで
さがさねばならないほどである。そこで私はNHKに『朝鮮語』講座の開設を提言した
い。

最近の朝鮮語を学ぼうとする機運の高まりをNHKはご存知ないわけではなかろう
が、西欧語に比べて番組構成の面でアジア語の講座にはウエートがかかっているのは
明らかだ。戦後のNHKの歩みの中でみると、『中国語』さえもが、ごく最近講座が開
かれたにすぎない。日本人が『アジアの中の日本』を考えるためにも今こそ最も近い隣
国の言葉『朝鮮語』の学習普及に力を入れるべきではないか。韓日問題の複雑な様相の
中で右往左往の思考をくり返す前にもっと『朝鮮』を研究してほしい。日本には六十万
以上の在日『朝鮮・韓国人』のいる事実も考えるべきだと思う。」

②高投書の論点

この高投書の論点は自明とも言えるが、あえて整理すれば、次のように言えるだろう。

(a) 明治以降の日本の朝鮮への関心は、軍事・経済面などに偏り、文化理解の点で弱かつ
た。

(b) 文化理解への不熱心さは、朝鮮への侵略的見方を助長した。

(c) 最近日本では朝鮮語を学ぶ機運が高まっている。

(d) しかし、日本の公共放送であるNHKの語学番組では、西欧語偏重・アジア語軽視
が続いている。

(e) 「アジアの中の日本」を自覚し、そのあり方を考えていくためには、隣国である朝
鮮にかんする研究とその言葉である朝鮮語の学習が重要であり、そのための場をNHK

が提供すべきである。

(f)それはまた、日本に住む60万人以上の朝鮮人の朝鮮語学習にも積極的な意義を持つ。

ここには、近代日本における朝鮮文化怪視、およびそれと侵略的見方との関係、70年代日本での韓国・朝鮮語学習の機運のたかまり、「アジアの中の日本」の自覚にとって重要な韓国・朝鮮研究や韓国・朝鮮語学習との関係、在日韓国・朝鮮人の韓国・朝鮮語学習とNHK講座との関係など、「ハングル講座」成立過程を考えるうえでの基本問題がほぼ出そろっていると思われる。

③高淳日にそくした投書の背景

高の投書の背景を知るために、高自身について述べておきたい。⁽⁴⁾

1928年、済州島に生まれた高淳日は、1930年3才のときに母に連れられて、先に大阪に来ていた父のもとで青少年期を送った。

大阪での小学校・旧制中学校時代(1934-45年)に受けた教育は、言うまでもなく日本語による日本の教育であり、学校で朝鮮語を学ぶことはなかった。中学校での漢文の授業の時に「漢文の本は家にもある」ことを思い出し、家に帰って朝鮮語の『千字文』を探し出した。家では両親や親戚たちが朝鮮語で話すのを聞いていたので、耳には慣れていたが読み書きはできなかった。したがって、ハングルのルビが入った『千字文』は読むことができなかった。その頃、漢文の素養のある叔父から「朝鮮語を勉強しなければならない」と言われたことが、今も心に強く残っていると言う。

戦後の1952年24才で東京に出たが、上京してからも朝鮮語を学ぶ機会には恵まれなかった。在日朝鮮人の多くがそうであったように、朝鮮語学習の必要性は感じながらも生活に追われていたからである。

一方、戦後の日本社会において、朝鮮や朝鮮人にたいする理解は依然として乏しかった。政治的問題や日本企業の韓国への進出問題などに、日本人の関心は限られていた。そんななかで、1972年、NHKの渋谷移転を把え、渋谷に焼肉中心の朝鮮料理店「くじゃく亭」を開いた。店には、NHKの幹部やディレクターたちも再々訪れるようになり、NHKの関係者に会うたびに、高はNHKの朝鮮語講座の必要性を説いた。

こういう状況の中で、1973年ごろ、「くじゃく亭」で「朝鮮語講習会」を開くことになった。当時、NHK国際局アジア語部の朝鮮語班で朝鮮語放送を担当しており、後に「ハングル講座」の開設時にゲストとなる^{キムユホ}金裕鴻が、講師を勤めた。講習会は毎週日曜日、半年間続けられた。参加者は、日本人と在日朝鮮人30名程度であった。そのなかには、当時NHKに勤務しており、後に「ハングル講座」開設時にディレクターとなった永沢昭道もいた。また、古代史に関心を持つ作家豊田有恒や画家戸井昌造、労働組合の幹部たち、在日朝鮮人が参加した。学習者の間で好評だったこの「朝鮮語講習会」は、次第にNHKの幹部やディレクターの間でも意識されるようになった。

高自身によれば、この「くじゃく亭」主催の「朝鮮語講習会」の経験が、74年の高の『朝日新聞』への投書につながったと言う。その後、1976年からほぼ毎月高はミニコミ誌『くじゃく亭通信』を発行し、日本人に朝鮮文化などを紹介した。『くじゃく亭通信』は多くの読者から「有益でおもしろい。続けて発行して送ってほしい」と言われ、店の顧客を中心に最盛期一千部を発行した。このような「くじゃく亭」での「朝鮮語講習会」や、第48号まで続けられた『くじゃく亭通信』による朝鮮文化普及が、のちの署名運動にリンクして行った。

④1974年前後の韓国・朝鮮語学習サークルの隆盛

「最近の朝鮮語を学ぼうとする機運の高まりをNHKはご存知ないわけではなかろうが」という高の投書の一節は、「くじゃく亭」での「朝鮮語講習会」を強く意識したものであった。しかし同時に、この他にも多くの韓国・朝鮮語学習サークルのあることが、高の視野には入っていた。

NHKに「講座」開設を求める署名運動がはじまる74年までに発足した韓国・朝鮮語学習サークルは、『季刊三千里』誌上などの紹介によれば、次のようなものがあつた。

(a)日朝協会東京都連合会：1962年はじめて開講。当時の講師は、在日朝鮮人であつた。⁽²⁾

(b)東洋文庫ユネスコ東アジア文化研究センター：1963年(8月5日-9月5日)と1970年(7月20日-8月29日)の2回にわたって講習会を開いている。講師は、63年に河野六郎・梅田博之・大江孝男・末長貞子・朴昌根、70年に大谷森繁・李喜敬・李賢起であつた。⁽³⁾

(c)朝鮮語市民講座：1963年開講。大阪外国語大学の朝鮮語学科の設立時、同大学に就任した塚本勲によって始められた。⁽⁴⁾

(d)日本朝鮮研究所：1963年開講。初級は週2回、中級は週1回。講師は、在日朝鮮人・梶村秀樹・大村益夫・梶井陟・菅野裕臣らであつた。⁽⁵⁾

(e)日韓親和会：1967年開講。講師は、後のNHK「ハングル講座」開設時のテレビゲストとなる金東俊であつた。翌68年、中級講座が開講され、初級を金裕鴻が、中級を金東俊が担当した。⁽⁶⁾

(f)現代語学塾：1970年10月、金嬉老公判対策委員会が開講した。講師は、大村益夫が担当した。⁽⁷⁾

(g)むくげの会：神戸にある日本人の朝鮮研究グループ「差別抑圧研究会」が発展的に解消して作られた同会は、1971年、朝鮮語講座を開講した。⁽⁸⁾

(h)東村山朝鮮問題研究会：1973年、朝鮮語講座を開講。⁽⁹⁾

(i)早稲田卒任内アジア語学講座：1973年、朝鮮語講座開講。⁽¹⁰⁾

(j)神奈川大学「自主講座朝鮮論」：大学内の民主化闘争のなかで作られた「自主講座朝鮮論」が、1974年、朝鮮語講座を開講した。⁽¹¹⁾

(k) 日本と朝鮮を考えていく会：1974年、信州大学内に「朝鮮映画を見る会」が作られ、朝鮮語講座も開講した。週2回。⁽¹²⁾

(1) 朝日カルチャーセンター：1974年「朝鮮語講座」開講。週2回。開講時の講師は、金裕鴻・菅野裕臣であった。⁽¹³⁾

こうした市民レベルでの自主的な韓国・朝鮮語学習の実態について、そこでの講師・学習者・教材・学習方法などを含む詳細な調査検討については、今後の課題としたい。

(2) NHKの回答とNHK内部での「研究」の歴史

①NHK寺脇信夫通信教育番組班部長の回答

高の投書から9日後の12月5日、『朝日新聞』に通信教育番組班部長・寺脇信夫の「朝鮮語講座でお答え」が掲載された。

「朝鮮語講座でお答え

NHK通信教育番組班部長

寺脇 信夫

十一月二十六日付の本欄『NHKは朝鮮語講座を開設して』についてお答えします。

NHKは現在、テレビ・ラジオ合わせて週五十時間余りを語学番組にあて、国連公用語を中心に実施しております。

語学番組については、それぞれのお立場から数多くの外国語についての放送希望をいただいておりますが、限られた放送時間でこれ以上増やすことは大変困難な状況にあります。ご希望の講座につきましては現在いろいろ研究を始めておりますが、まだ実施についての確実な見通しはございません。

申すまでもなく私どもは、国際理解と平和実現のために語学番組がより一層役立つようにと絶えず努力を続けておりますので、今後ともご理解あるご支援をお願い申し上げます。」

NHKを代表したこの寺脇の回答について、大野論文は「拒否回答」と述べているが、必ずしもそう言い切れないのではないだろうか。寺脇回答の論旨を整理すれば、次のようになる。

- (a) NHKの語学番組編成の基本は国連公用語中心である。
- (b) 放送時間の総枠との関係で一般的に言えば、これ以上の増加は困難である。
- (c) 朝鮮語講座については、「現在いろいろ研究を始めて」いるが、「実施の確実な見通し」はまだない。
- (d) 「国際理解と平和実現」の方向で「努力を続けて」いるので、「ご理解あるご支援」を頼む。

結論だけを見れば、もちろん大野論文の言うように「実施についての確実な見通しはま

「だごさいません」=開設は決定できない=「拒否」とも言える。しかし、「現在いろいろ研究を始めております」とは、どんなことを意味していたのか？そして「実施についての確実な見通し」が立たないという理由は何だったのだろうか？その理由がクリアできれば、「実施についての確実な見通し」が立つので「今後ともご理解あるご支援」をたのむと読むことも可能ではないだろうか？これらの点についての検討が必要と思われる。

②NHK内部での韓国・朝鮮語講座開設にかんする検討の経緯

寺脇回答が言う「現在いろいろ研究を始めてい」ることにかんして、これを含めると少なくとも過去3回の検討がNHK内部でなされていたと考えられる。

(a) 1964年の時期

1981年7月15日付『統一日報』「『韓国語』か『朝鮮語』か」によれば、「このNHK韓国語講座開設問題は、一九六四年から『韓国語』か『朝鮮語』か、決定のないまま今日までのびのびになってきた」としている。また、同月24日付の同新聞「講座名称『朝鮮語』でなく」にも、「NHKの韓国語講座開設の動きは一九六四年以来のことであるが、この間『韓国語』にするか、『朝鮮語』にするかという名称問題でNHK内でも意見が対立、統一見解が図られないまま、十六年もの間開設がのびのびになってきた」と述べられている。これについての詳しいことは、いまのところわからない。しかし、NHK国際局ラジオジャパンでは1960年4月から海外むけの朝鮮語放送をはじめており、後にくじやく亭での「朝鮮語講習会」の講師や「ハングル講座」開設時のゲストとなる金裕鴻も1963年4月からそれを担当していた。また、1961年からはその朝鮮語放送で塚本勲を講師に「日本語の手びき」という日本語講座を開設した。そのノウハウを基礎に、日本国内むけ放送での朝鮮語講座開設も検討されていたのではないと思われる。しかしそれが実現しなかった理由は「朝鮮語」にしたいというNHKの意向と、「韓国語」にすべきだという民団などの要求との不一致であったことが示唆されている。

(b) 1970年の時期

もう一つは1970年である。『季刊三千里』第10号（1977年5月）に載った今田好彦「あらたな日朝文化交流」によると、1970年当時のNHK会長・古垣鉄郎は、次のような考えをもっていた。

「これまでの日本人の語学にかんする感覚は、先進国からものを学ぶための手段としての語学である。ことばというものはそういうものではない。相互理解を促進するものであろう。そうすれば、これまでの語学講座というものは考え直さなければならない。」⁽¹⁴⁾
そして、そのような観点に立つならばまず朝鮮半島の言葉が取り上げられるべきだとし、その時の坂本朝一放送総局長と堀四志男教育局長らが「朝鮮語講座」開設を検討した。しかし、NHKの「内部の障害」と「外部の障害」にぶつかり断念したという。⁽¹⁵⁾

(c) 1974年

そして、第3回目が1974年である。1984年4月の「ハングル講座」開設時にディレクターであった永沢昭道によれば、「1974年からNHK内部で講座開設を検討した」という。この永沢の証言の「1974年」は、高の投書に対する寺協の回答の時期と同じ時期である。

③「朝鮮語講座」開設における「外部の障害」と「内部の障害」

それでは、1970年の講座開設断念の理由となった「外部の障害」と「内部の障害」とは何であろうか。

「外部の障害」とは、呼称問題であったと考えてようだろう。上記の『統一日報』記事や永沢も、講座開設を検討しながら出来なかったのは、「名称問題」が解決できなかったからだと述べている。また、今田は「あらたな日朝文化交流」で、NHKの言う外部の障害とは「朝鮮をめぐる日本の状況ということだと、私は理解した」⁽¹⁶⁾と、述べている。

一方、「内部の障害」とは、講座開設にふみきった場合の受講者数にかんする不安・危惧ではないかと思われる。それは、次のような高の証言から推測される。

高によれば、74年12月の寺協回答に対して、多くの批判がNHKに寄せられた。そして、それに驚いた寺協が何回か高を訪れた。そのさい、寺協は、「NHKに朝鮮語講座を開設するのはそれほどむずかしいことではないが、開設された場合にテキストがどのくらい売れるかそれが心配だ」と言ったという。

④寺協回答の含蓄

高の投書以前、二度以上にわたるNHK内部での「朝鮮語講座」開設の努力とその断念、そして断念の理由が「外部の障害」=呼称問題と「内部の障害」=受講者数への不安にあったと言えるならば、寺協回答について次のように言えるのではないだろうか。

(a) 講座の呼称問題と受講者数の問題が解決されれば、NHKとしてはいつでも「朝鮮語講座」を開設する意志がある。

(b) しかし74年末現在、その二つの「障害」解決の見通しが立っていないので、いつから開設するという答はできない。

(c) この難問を解決するための、世論の高揚を含めた環境づくりの支援がほしい。

即時開設にかんする寺協回答の結論は、たしかに「拒否回答」ではある。しかし、その「拒否回答」には、このような含蓄があったとも言えるのではないだろうか。

(3) 永井道雄文部大臣の“朝鮮語教育の必要性”発言——環境整備（その1）

①永井講演とその報道

“NHKは講座開設の意志をもっている。講座開設にふみきれる環境整備、援護射撃をしてほしい”。寺協回答の真意を、このように読むことができるとすれば、その環境整備の一つが、現職文部大臣永井道雄の“朝鮮語教育の必要性”にかんする発言とその報道であった。高と寺協との『朝日新聞』でのやりとりから半年後の75年5月27日、『読売新聞』は次

のように伝えた。

『『教育の流れは変わる…』永井文相，聖心女子大で講演

永井文相は二十六日，東京・広尾の聖心女子大で『教育の流れは変わる』と題して講演。人口増大，資源ナショナリズム，食糧生産の停滞，環境破壊などの中で地球全体の価値観が変わろうとしている時，教育は変わるし，変わらねばならないと“予言”した。…永井さんは『教育が独走して変わるものではなく，まず経済が変わり，政治が変わり，文化現象全体に広がる。教育もその中で変わる』と，石油ショックなどを例に，いまが転換期であることを強調。

世界の変化にあわせて日本人が国際化するためには，英語は中学から勉強するのに，隣国の言葉である朝鮮語は大阪外語大と天理大でしか教えていないといった矛盾を克服せねばならないと語った…。」

②永井文相と「文明問題懇談会」での韓国・朝鮮語，韓国・朝鮮文化重視の討論

この永井文相による隣国語＝韓国・朝鮮語重視の発言には，永井道雄個人の考えとともに，永井を文部大臣にした当時の日本の状況も反映していると考えられる。

1974年11月26日，日中国交回復を実現する一方，強引な手法で「日本列島改造」をすすめた田中角栄首相が「金脈」問題で辞意を表明。12月9日，「クリーン」「ハト派」を看板に，歴代自民党政権とは異なるイメージで三木武夫内閣が発足した。その三木内閣の一つの「目玉」が，「京都大学教授」「朝日新聞論説委員」の経歴をもつ「民間人」永井道雄の文部大臣への登用であった。

高投片と寺脇回答が『朝日新聞』に載った74年11月26日と12月5日には，その『朝日新聞』の論説委員だった永井は，後に次のように回想している。

「文部大臣をつとめていたとき，心から願っていたことの一つは，隣国に住む朝鮮半島の人々と，子々孫々の時代まで，対等に，また平和的に協力することを日本人に教える教育を確立することであった。」⁽¹⁷⁾

彼は文相就任2カ月後の1975年2月24日，文部大臣の諮問機関として「文明問題懇談会」を組織・発足させた。自らも出席して同年4月から翌76年4月まで毎月行われたこの「懇談会」の第1回会合には三木首相も出席して，次のようにあいさつした。

「永井文部大臣が，教育・文化を考えるに当たっては，基本にさかのぼって文明というものを考えてみる必要がある，そういう基本的に腰を落ち着けて教育問題を考えて見ようという態度をとられていることに私も敬意を表するものでございます。」⁽¹⁸⁾

永井も，「私は次の時代の日本が，すぐれた文明をもつことを祈っています。日本と日本人は世界に貢献する貴重なメンバーとならなければなりません。…本懇談会から，その先見性が生まれることを信じております」⁽¹⁹⁾と，懇談会への期待をあいさつで述べた。

「懇談会」の委員には，桑原武夫会長をはじめ，梅原猛・貝塚茂樹・林屋辰三郎・松田

道雄ら永井の京都大学時代の人脈と見られる人々や、都留重人・市井三郎などのリベラルな市民社会研究者が多く就任した。そして、永井によれば、「そこで、とりあげられたことの一つが、日本人は、これまでのように、西洋の学術、教育、文化に関心をもつだけでなく、アジアのそれについても、関心をもち、これについて学ぶことが必要である」⁽²⁰⁾ということであった。

すなわち、75年9月20日の第6回「懇談会」のテーマに「アジアと日本」が設定された。そこでは、日本人のアジア認識の乏しさや近隣アジア諸国を無視してきたことの問題が指摘され、これからはもっとアジア諸国の人々との交流が重視されるべきとの意見が出た。そのなかで、貝塚は、「日本人の明治以前のアジアの観念があるとすると唐・天竺でしょ。つまり中国とインド。それ以外はほとんど全部抜けているんじゃないでしょうかね」⁽²¹⁾と発言。それに関連して、アメリカ・コロンビア大学教授で「懇談会」の専門委員のドナルド・キーンが、「日本全国に、一番近い外国の研究ができる大学は二つしかありません」⁽²²⁾と5月の永井発言と同趣旨の批判をしつつ、「朝鮮語とか朝鮮文化等、朝鮮のすべてのことがアジアのなかにどうしても入らなければならない」⁽²³⁾と、韓国・朝鮮語や韓国・朝鮮文化等の研究の必要性を強調した。

③永井文相による大学における韓国・朝鮮語講座設置の推進

このキーン発言に関連して、私立大学における朝鮮語講座等への助成を始めたこと、永井文相は次のように述べた。すなわち、75年7月11日に成立した私学振興助成法によって設置された私学振興財団の審議会を通じて、文部省の指導による私学への助成金援助が始まった。そしてそこでは、「大学で朝鮮語その他国立大学で今まであまりやっていたもの」を私立大学でやるとそこに助成金を出すことになった。⁽²⁴⁾

永井の韓国・朝鮮語重視政策は、私立大学にとどまらなかったようである。大村論文によれば、永井の在任中、文部省が東京外国語大学に「学科新設の申請書を速やかに提出するよう指示」⁽²⁵⁾したとされている。76年2月に「朝鮮語科設置準備委員会」が東京外国語大学に設置され、5月26日には同大学の教授会において朝鮮語科を新設するための概算要求が決まった。⁽²⁶⁾そして77年4月、東京外国語大学に朝鮮語科が設置された。それは、1927年の東京外国語学校朝鮮語科廃止から50年後のことであった。また、その翌年の78年4月には、富山大学に「朝鮮語・朝鮮文学コース」が新設された。

永井は、後に次のように回想している。

「私が文部大臣に就任した当初は、日本の国立大学約八〇のうち、朝鮮半島の言語の講座を開いていたのは、大阪外国語大学だけであった。私立の大学で教えているところも少なかった。

日本人として恥かしいだけではなく、将来、一層、朝鮮半島の人々との協力が必要になってゆくとき、その言語と文化を理解する日本人が少ないことは、日本の国益にも反

する。この言語を教える大学には、国立、公立、私立の別を問わず文部省の力を貸すべきであると私は述べた。幸いに、国立の東京外国語大学や富山大学でも教えるようになり、また、私立で教えるところも、いまや二十数校に達した。⁽²⁷⁾

1977年の東京外国語大学朝鮮語科新設については、もちろん永井文相の「朝鮮語講座」促進発言だけによるものではなかったであろう。当時の坂本是忠学長や同大学アジアフリカ言語文化研究所（以下、「東京外語大AA研」とする）の朝鮮語担当教官梅田博之・大江孝男らの積極的な役割も大きかったと考えられる。この点については、開設前年の2月に設置された「朝鮮語科設置準備委員会」での検討経過も含めて、今後の課題としたい。

（4）久野収・金達寿対談「相互理解のための提案」と市民の支持——環境整備（その2）

永井文相の発言の半年後、『季刊三千里』第4号（1975年11月）に、哲学者久野収と在日朝鮮人作家金達寿の対談「相互理解のための提案」が載った。そこで久野は、「朝鮮人のみなさんと協力して、NHKに朝鮮語講座をおくよう運動を起こしましょう」⁽²⁸⁾と提案した。

①『季刊三千里』における金達寿との対談の企画とその意図

対談の舞台となった『季刊三千里』は、1975年2月に金達寿・朴慶植・李進熙らの在日韓国・朝鮮人文化人によって、次の目的のために創刊された。

「まだ『近くて遠い国』の関係にある…朝鮮と日本との…間の理解と連帯とをはかるための一つの橋を…実現するために、在日同胞の文学者や研究者たちとの輪をひろげ…日本の多くの文学者や研究者とのきずなをつよめて行きたい。」⁽²⁹⁾

そして、日本の文学者・研究者とのきずなをつよめる具体的な企画の一つが、金達寿と日本人文化人との対談であった。金は、1970年1月から雑誌『思想の科学』に「朝鮮遺跡の旅」を連載し、朝鮮文化と日本文化との関係を日本各地の神社などにそくして提起していた。その連載は同年から『日本の中の朝鮮文化』として次々と刊行され、「世界文化史的視点」「東アジア文化史的視点」をもったものとして「画期的に新しい」と評価されていた。⁽³⁰⁾ そのことが、金対談シリーズの企画につながったと考えられる。

創刊号以来、都合7回行われた対談は、次のとおりであった。

- | | | | | |
|-----|---------|----------|---------------|-------------------|
| 創刊号 | 1975年2月 | 対談者・鶴見俊輔 | 「激動が生みだすもの」 | 特集：金芝河 |
| 第2号 | 同年5月 | 中野 好夫 | 「ナショナリズムについて」 | 特集：朝鮮と『昭和五十年』 |
| 第3号 | 同年8月 | 司馬遼太郎 | 「反省の歴史と文化」 | 特集：江華島事件百年 |
| 第4号 | 同年11月 | 久野 収 | 「相互理解のための提案」 | 特集：日本人にとっての
朝鮮 |
| 第5号 | 1976年2月 | 野間 宏 | 「朝鮮文学の可能性」 | 特集：現代の朝鮮文学 |
| 第6号 | 同年5月 | 日高 六郎 | 「体制と市民運動」 | 特集：今日の日本と韓国 |

第7号 同年8月 和歌森太郎「日朝関係史の見直し」 特集：古代日本と朝鮮

この一連の対談における関心事のひとつは、韓国の民主化運動であった。鶴見俊輔は韓国の民主化闘争で捕えられた詩人「金芝河らをたすける会」発起人の一人であり、日高六郎は「金芝河らをたすける国際委員会代表団」団長として、世界各国から集めた1万7千人の署名をもって韓国に行き、朴正熙大統領に釈放の公開片簡を送っていた。⁽³¹⁾韓国の民主化運動とその象徴的存在であった金芝河らの政治犯釈放への関心を切り口として、市民社会づくりをめざした市民レベルでの日本と韓国・朝鮮との理解協力を進めたいという願いが、対談の基調にあったと察せられる。

また、「ナショナリズムについて」「反省の歴史と文化」「日朝関係史の見直し」に見られるように、歴史のとらえ直しがもう一つの関心であった。

そして、「相互理解のための提案」と「朝鮮文学の可能性」は、民衆の日常生活のレベルでの相互理解の可能性を探るものであったと言えよう。

②「民衆の間での連帯」と朝鮮料理の普及および韓国・朝鮮語学習の必要性

(a)「民衆の間での連帯」と朝鮮料理の普及

久野と金は、対談のなかでまず、日本での朝鮮料理の普及に韓国・朝鮮人と日本人の民衆の間で、日常生活レベルにおける相互理解の可能性が育まれていると述べている。

久野 …日本で朝鮮料理を食べてみておいしいと思っているのは、朝鮮の諸君だけじゃなしに、日本人の数も相当多いのと違いますか。

金 ええ、それは戦後の一つの革命的なことなんだと僕は思うんですが、朝鮮料理店というのがこんなに普及するとは思わなかったんです…。

久野 そういう点にね、たいへん希望が持てるような気がするんです…。

……

…林家三平が、焼肉の東海苑とかいってやっているでしょう、テレビで。「皆さんいらっしやい、焼肉の東海苑、おいしいですよ」とかいつている。こりゃいいことだなあと思ひましてね。以前とはずいぶんちがってきましたね。

金 …地方を歩いて小さな町に行ってもあるんですよ。ドライブインなんかでも「焼肉」という看板をかけているのがあるんですよ。

久野 革命的变化だなあ、これは。こういうところから、僕はね、民衆の間の連帯というか、ナショナリズムを越えうるなにかが出てくるんだと思うんですよ…。

ここで、政治的なレベルでの交流と言うよりも、日常生活に根ざしたいわば「胃袋のレベルでの民衆同士の連帯」に、「ナショナリズムを越えうる」「民衆の間の連帯」への発展の可能性があると述べていることが特徴的である。

(b)「民衆の間の連帯」のための韓国・朝鮮語学習

そのうえで、久野は、「民衆の間の連帯」の可能性を現実化するために言葉の重要性を指

摘した。そして、「言葉が少しでも通じるようになると、相手の国と人々に深い親近感がうまれます」と述べつつ、「朝鮮人のみなさんと協力して、NHKに朝鮮語講座をおくよう運動を起こしましょう」と、講座開設運動を提起した。

これに、「大賛成です」「若い人たちの間では朝鮮語を学ぶ人が近年ふえています」と、金が応じた。そして久野が、「若い人たちが朝鮮料理をたべ、朝鮮語をしゃべるといふこと、これは画期的ですね」と評価しつつ、「ぜひともやりましょう」と、再度その運動への意欲を示した。

韓国・朝鮮語学習の必要性については、中野・金対談のなかで、「最近も『東亜日報』をとってるのですが、残念ながらよくわからない」⁽³²⁾「私などはしゃべれなくとも、せめて読むことができたと思う」⁽³³⁾と、中野が述べていたが、久野・金対談はこれを受けつつそこから一歩踏み込んで講座開設運動を提起したと言える。

(c) 日本人の韓国・朝鮮語学習の歴史をふりかえる

この久野と金の合意は、近代とくに植民地時代以後における日本民衆の韓国・朝鮮語学習にたいする無関心の歴史を踏まえたものであった。

すなわち、「戦前権力側が朝鮮を支配するために軍や警察関係者は真剣に学んだ」と金が述べたのにたいして、「権力側がやったことが…戦前に朝鮮語を学ぶことをわれわれから遮断した理由でもあつ」と、久野は応じた。つまり、支配のための朝鮮語学習と民衆の間での朝鮮語への無関心・蔑視が一体であったことが語られた。

また、「戦後でも、自衛隊員のなかには朝鮮語のできるのが…二千くらい」と金は指摘した。それに他方では、「朝鮮語の辞典が原稿はできているのに出版できない」状況があり、それは「われわれとみなさんとの間の交流関係を非常に疎遠にしている結果」だと久野が述べた。つまり、戦後もその構造が変わりきってはいないという認識が示されたと言える。

そして、「民衆のほうでも自衛隊に負けないくらいやってくると、朝鮮に対する理解がそれだけ深くなる」と、金が述べ、交流・相互理解にとって言葉の学習がもつ意味が再確認された。

③「提案」に対する市民の支持

久野・金対談での提案については、次の対談者の日高との間でも話題となった。すなわち、日高は、東京大学文学部助手時代に朝鮮語・朝鮮文学科とロシア語・ロシア文学科の設置を学部長に提案したが採用されなかった自分の経験を話し、提案への共感を示した。

同時に、読者からも「提案」にたいする強い支持の意見が寄せられた。『季刊三千里』第5号・第6号の「おんどるばん」欄に、次のものが紹介された。

「私も数年前に朝鮮語独習を志しましたが挫折し、その後、新潟市の日朝協会に助けを求めたところ、受講者が集まり次第開講しますという返事をいただいて三年が経過しま

した。それでいまだにハングルなどまったく読めずというありさまです。そんな折、初めは苦しまぎれからどうしてNHKでやらないのだろうかという疑問が生じ、やがて考えれば考えるほど奇妙な現象だと悟りました。両氏の提案が大きな運動になることを祈ります。(新潟県・教員)⁽³⁴⁾

「久野収氏と金達寿氏との対談のなかに、『NHKに朝鮮語講座をおくよう運動を起こしましょうや』という話がありましたが、実は私も二年ほど前から朝鮮語を勉強しています。NHKが放送でやってくれたら大変助かるのにとすることがたびたびあります。

私の周囲にも、朝鮮語の勉強をはじめの人が近年ふえております。大きな運動を起こし、ぜひ放送を実現させたいものです。(神戸市・NHK勤務)⁽³⁵⁾

「『NHKに朝鮮語講座をおくよう運動を起こそう』という久野氏の提案が、大きな反響を呼んでいるという記事を読み、うれしきでいっぱいです。

署名運動を起こすための準備が進められているとのこと、ぜひその実現にわたしも参加させていただきたいと思います。署名用紙ができましたらぜひ送ってください。友人、知人にひろく訴えていきたいと思います。(埼玉県・店員)⁽³⁶⁾

(5) 「NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会」の発足——環境整備(その3)

①矢作勝美論文「NHKに朝鮮語講座を」

読者からの私極的な支持の声の中で、「要望する会」の事務局長をつとめることになる矢作勝美が、署名運動の位置づけと見通しを示す「NHKに朝鮮語講座を」を、『季刊三千里』5号(1976年2月)に載せた。

(a) 日本人の朝鮮語学習史における負の側面を知ること

矢作は、日本人が朝鮮語を学ぼうとするとき、まず次のような日本人の朝鮮語学習の歴史の負の側面を知ることが必要であると述べた。(イ)豊臣秀吉の朝鮮侵略時に、印刷施設を破壊し、朝鮮民族の思想・感情の表現伝達の象徴的存在である活字や刊本を奪い取ってきたこと。(ロ)1880(明治13)年以後、宝迫繁勝『韓語入門』、『日韓善隣語話』などの新たな朝鮮語学習書や江戸時代の雨森芳洲『交隣須知』、『隣語大方』などの改訂版の背景には、征韓論・不平等条約や朝鮮にたいする経済支配の意図があったこと。(ハ)「日韓併合」以後、朝鮮語抹殺政策と並行して最高学府で朝鮮の学術文化を切り捨て蔑視政策をとったこと。(ニ)唯一、天理専門学校にあった朝鮮語講座の学生は、朝鮮統治のための特高警察官がその大部分を占めていたこと。

(b) 互恵平等を前提とする相互理解・文化交流・善隣友好のための朝鮮語学習とその動き

こうしたことを含めて、現在も払拭されていない過ちや朝鮮語への偏見・蔑視を自ら問いただすことの重要性を、矢作は強調した。そのとき、今後の日本人の朝鮮語学習は、「互

恵平等が前提・原則」であり、それが相互理解・文化交流・善隣友好につながると述べた。そして、そのような朝鮮語にたいする関心はすでに活発な動きとなっているとして、次の例をあげた。神奈川大学の「自主講座朝鮮論」や神戸学生・青年センター「朝鮮史セミナー」の朝鮮語講座。大阪市立労働会館の「大阪セミナー」、京都大学楽友会館ホールの「京都セミナー」、東京・朝鮮語を勉強する会の「初級朝鮮語講座」、朝日カルチャーセンター（朝日新聞社）、日朝学院（日朝協会東京都連）、現代語学塾（金婚老公判対策委員会）、日本朝鮮研究所、新日本文学会における朝鮮語講座。

(c) 日本における朝鮮語学習充実の一環としてのNHK朝鮮語講座開設

そして矢作は、高淳日の『朝日新聞』投書に賛意を表しながら、NHKの寺脇信夫の回答の中の「ご理解あるご支援をお願い」と永井文相の「隣国の言葉…朝鮮語は大阪外語大と天理大でしか教えていないといった矛盾を克服せねばならない」発言に論及しつつ、次のように述べた。「東京大学を始めとする国立大学に朝鮮語講座を設け、早急にその矛盾を解消してほしい」。また、すでにNHKの海外放送に朝鮮むけの日本語講座がありそのテキスト内容も優れていると聞くので、「NHKにその気さえあれば」朝鮮語講座はいつでもできる体制になっていると述べた。

つまり、歴史的な反省をふまえた日本全体の朝鮮語学習の構造的な転換・充実をはかる現実的な条件が、学習者の熱意、大学行政の変化、NHK内部でのノウハウの用意の点で成熟していることを、矢作は指摘。それによって、構造転換をはかるうえでの署名運動の意義を示唆したと言えよう。

②「NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会」の発足とアピール

矢作の「NHKに朝鮮語講座を」が発表された同月の28日、久野取・中野好夫・金達寿・矢作勝美らが「アピール、呼びかけ人、会の名称などについて打ち合わせ」を行った。そして、4月、中野好夫・桑原武雄・松本清張など文化人40名の「呼びかけ人」による「NHKに朝鮮語講座の早期開設を要望する」アピール文が、「NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会」として発表された。1974年11月の高淳日の投書から1年5カ月後のことであった。全文は次のとおりである。

「NHKに朝鮮語講座の

早期開設を要望する

現在、NHKの放送番組には、外国語講座があって、英語を始め、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語の六ヶ国語が放送されています。しかし、日本にもっとも近い隣国のコトバである朝鮮語の講座は、まだ開設されていないのが現状です。

民族にとってその言語は密接不可分のものといえます。学術文化の相互交流、真の意味での善隣友好をはかるためには、お互いに言語を尊重し、コトバに通じあうことが先決であると考えられます。

しかし、日本人が広く朝鮮語を学ぼうとしても、これまでその機会は、ほとんど閉ざされてきました。現在においても、朝鮮語の問題に関するかぎりなんら改善されていないのが実情といえます。

最近、朝鮮語に対する認識もようやく高まり、それを学ぼうとする日本人も次第に多くなってきました。永井文部大臣がある講演のなかで『世界の変化にあわせて日本人が国際化するためには、英語は中学から勉強するのに、隣国の言葉である朝鮮語は大阪外語大と天理大でしか教えていないといった矛盾を克服せねばならない』（『東京新聞』一九七五年五月二七日）といっているのも、そのあらわれといえるでしょう。

NHKの放送番組に朝鮮語講座が開設されたなら、朝鮮語の学習が容易になるのはもちろんのこと、相互理解をいっそう深めることができるなど、はかり知れないものがあります。

ここに広く呼びかけ、NHKの放送番組に朝鮮語講座が一刻も早く開設されることを望むものです。

一九七六年三月

〈呼びかけ人〉

荒 正人	石牟礼道子	井上光貞	井上 光晴	上田 正昭
上野 英信	梅原 猛	大野 晋	大村 益夫	岡部伊都子
小田切秀雄	貝塚 茂樹	木下順二	金 達寿	久野 収
桑原 武夫	河野 六郎	佐田稲子	霜多 正次	新村 猛
杉浦 明平	千田 是也	高木健夫	武満 徹	都留 重人
鶴見 俊輔	中野 好夫	野間 宏	旗田 崑	林屋辰三郎
日高 六郎	堀田 善衛	松田道雄	松本 清張	丸山 静
南 博	美濃部亮吉	山本薩夫	和歌森太郎	矢作 勝美

NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会⁽³⁷⁾

呼びかけ人40人の中には、当然のことながら、金達寿・久野収・鶴見俊輔・中野好夫・野間宏・日高六郎・和歌森太郎のような『季刊三千里』誌上での金および彼との対談者が見られる。また、梅原猛・貝塚茂樹・桑原武夫・都留重人・林屋辰三郎・松田道雄など、永井文相の「文明問題懇談会」の会長を含めた人々がいる。さらに、これに先だつ時期の1968年に、文部省の圧力の中で朝鮮大学校認可を行った当時の東京都知事美濃部亮吉と、美濃部の都政を支えてきた松本清張（作家）・木下順二（劇作家）・千田是也（演出家）・山本薩夫（映画監督）なども見られる。朝鮮語学者の河野六郎、朝鮮史研究者の旗田崑、朝鮮文学者の大村益夫、朝鮮を含む活字の歴史研究者である矢作勝美、日本古代史の上田正昭や井上光貞、日本語学者の大野晋などは、韓国・朝鮮語と関連のある領域の専門家であ

る。そして、韓国・朝鮮語講座にとりくんでいる新日本文学会の小田切秀雄、佐多稲子、杉浦民平、丸山静や、文学者の戦争責任問題を追求してきた荒正人なども見られる。しかし、作曲家の武満徹の場合のように、現在の私にはまだ〈呼びかけ人〉参加の理由が見えにくい人もあり、その点は今後の課題である。

以上のような〈呼びかけ人〉の構成やアピール文での永井発言の論及を見ると、この呼びかけ文の発表において、①在日朝鮮人高淳日の『朝日新聞』への投書 ②永井文部大臣発言 ③久野・金対談という、当時日本の韓国・朝鮮語学習環境の充実を求めていた三つの動きが、その韓国・朝鮮語学習観の基本的な共有を含めて、一つの流れに合流したと見ることができよう。それは、過去の歴史を反省しつつ、韓国・朝鮮人と日本人という平等な立場での相互理解協力につながる韓国・朝鮮語学習を、日常生活に根ざしながら進め充実させて行きたい、ということであった。その一環としてNHKに「朝鮮語講座」の開設を求めるといふ動きは、このアピールの発表によって、新しい段階に入ったと言える。

註

- (1) 高淳日・金裕鴻両氏からの聞き取りによる。
- (2) 菅野裕臣氏からの聞き取りによる。講師の名前は今のところ分からない。今後、聞き取り調査などを行いたい。
- (3) 東洋文庫ユネスコ東アジア文化研究センターへの問い合わせによる。
- (4) 鳥居節子「朝鮮語市民講座で」『季刊三千里』第38号1984年5月 112ページ
- (5) 菅野裕臣氏からの聞き取りによる。在日朝鮮人の講師の名前は今のところ分からない。今後、聞き取り調査などを行いたい。
- (6) 金東俊・金裕鴻両氏からの聞き取りによる。
- (7) 『글방(クルパン)――塾報』第6号 現代語学塾 1990年9月 21ページ
- (8) 「<サークル紹介>むくげの会」『季刊三千里』第3号 1975年8月 131ページ
- (9) 京三郎「初級講座の10年」『季刊三千里』第38号1984年5月 109ページ
- (10) 志村由紀子「20周年に寄せて」『글방(クルパン)――塾報』第6号1990年9月6ページ
- (11) 「<サークル紹介>神奈川大自主講座朝鮮論」『季刊三千里』第3号 1975年8月217ページ
- (12) 「<サークル紹介>日本と朝鮮を考えていく会」『季刊三千里』第11号 1977年8月 131ページ。このサークルは、後の「NHKに朝鮮語講座を」の署名運動に「朝鮮文化研究会」と合同で約八百名の署名を集めた。
- (13) 金裕鴻氏からの聞き取りによる。
- (14) 今田好彦「あらたな日朝文化交流」『季刊三千里』第10号 1977年5月 191ページ
- (15) 同上

- (16) 同上
- (17) 永井道雄「NHKのハングル講座」『季刊三千里』第38号1984年5月 23ページ
- (18) 桑原武夫・中根千枝・加藤秀俊編『歴史と文明の探求(上)』中央公論社 1976年 5ページ
- (19) 前掲 桑原武夫・中根千枝・加藤秀俊編『歴史と文明の探求(上)』8ページ
- (20) 前掲 永井道雄「NHKのハングル講座」『季刊三千里』第38号 24ページ
- (21) 前掲 桑原武夫・中根千枝・加藤秀俊編『歴史と文明の探求(上)』226ページ
- (22) 前掲 桑原武夫・中根千枝・加藤秀俊編『歴史と文明の探求(上)』236ページ
- (23) 同上
- (24) 前掲 桑原武夫・中根千枝・加藤秀俊編『歴史と文明の探求(上)』238ページ
- (25) 大村益夫「NHK『ハングル講座』が始まるまで」『早稲田大学語学教育研究所三十年記念論文集』1992年 293ページ
- (26) 「東外大の朝鮮語科新設」『朝日新聞』1976年6月19日
- (27) 前掲 永井道雄「NHKのハングル講座」『季刊三千里』第38号 25ページ
- (28) 久野収・金達寿対談「相互理解のための提案」『季刊三千里』第4号 1975年11月33ページ
- (29) 「創刊のことば」『季刊三千里』第1号 1975年2月 11ページ
- (30) 前掲 久野収・金達寿対談「相互理解のための提案」 35ページ
- (31) 日高六郎「レポート・訪韓報告」『季刊三千里』第1号 1975年2月 62,65ページ
- (32) 中野好夫・金達寿対談「ナショナリズムについて」『季刊三千里』第2号 1975年5月 30-31ページ
- (33) 前掲 中野好夫・金達寿対談「ナショナリズムについて」 31ページ
- (34) 「おんどるばん」『季刊三千里』第5号 1976年2月 220ページ
- (35) 同上
- (36) 「おんどるばん」『季刊三千里』第6号 1976年5月 220ページ
- (37) 「NHKに朝鮮語講座の早期開設を要望する」『季刊三千里』第6号 1976年5月120-121ページ

3. NHKにおける講座開設決定にいたる経過(その1) ——1976~77年——

(1) 「NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会」の署名運動と文化講座

1976年4月に「NHKに朝鮮語講座の早期開設を要望する」アピールを発表した「要望する会」は、4月24日から署名運動をはじめた。同会はまた、署名運動とともに、次のような方針をたて実施した。(a)マスコミに「要望する会」の発足とその趣旨を伝え、日本人に広く運動への参加を呼びかける。(b)新聞や雑誌を利用して、朝鮮語学習の必要性や朝鮮

語にかんする認識を深める機会を提供する (c) 朝鮮語学習普及の一環として文化講座を開設することである。

①マスコミの反応

高淳日の投書以来この動きに注目してきた『朝日新聞』が4月28日、「NHKに朝鮮語講座を／文化人ら署名運動」と題して、次のようにきわめて好意的に報道した。

「NHKに朝鮮語講座の開設を要望しよう——という署名運動が、評論家の日高六郎、作家堀田善衛、朝鮮史研究家の旗田巍の各氏ら学者、文化人四十人の呼びかけで始められる。南北を問わず、朝鮮との学術文化交流、真の善隣友好をはかるためには、相互に言葉を通じあうことが先決だという趣旨。…NHKが朝鮮語講座を設けるか否かは、これまで冷遇されてきた朝鮮語学習が日本で市民権を得るかどうかの一つのバロメーターでもあり、署名の集まり具合とNHK側の対応が注目される…。

NHKでも、相互理解と交流のため、朝鮮語の講座も必要であることを認め、どのような形態でできるか内部で研究中だという…。

呼びかけ人の一人、金達寿氏の話：古代から現代にいたるまでの朝鮮と日本の関係が見直されている時だし、若い日本人の中に朝鮮語に関心をもつ人がふえている。NHKに朝鮮語講座ができれば、在日朝鮮人のためというのではなく、日本人が朝鮮の文化を見直し、朝鮮を外国として認識するよいきっかけとなるだろう。日本と朝鮮の関係が新しい次元に移れると期待している。」

『朝日新聞』はさらに、5月26日の「天声人語」欄でも取り上げた。また、『東京新聞』は井手孫六「語学」（5月4日）、米山俊直「語学番組」（6月11日）、「朝鮮語講座／NHKに直訴へ／大反響、二万人近く署名」（8月30日）、『東京タイムズ』は「NHKと朝鮮語講座」（6月10日）、『毎日新聞』は長谷川隆子「朝鮮語の講座開設を望む」（7月8日）、『いばらぎ新聞』は「NHKに朝鮮語講座を／署名が一万八千人／全国から予想以上の反響」（8月30日）を、それぞれ掲載した。いずれも署名活動に好意的なものであった。たとえば、6月10日付『東京タイムズ』の「NHKと朝鮮語講座」には、次のような内容が載っている。

「…美濃部亮吉、桑原武夫、中野好夫氏ら四十人の知識人が、『NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会』をつくり『現在NHKの放送番組では、英、独、仏など六カ国の外国語講座が設けられているが、これにぜひとも朝鮮語を加えてほしい』という声明を出し、いま同趣旨の署名運動を行っている…。

戦前・戦中は使用を禁じられ、戦後は祖国が分裂し、朝鮮語と朝鮮人の苦悩は続くが、それだけになんとかNHK側も朝鮮語講座の問題に努力してほしいものだ」

②呼びかけ人による新聞等への執筆

呼びかけ人の一人である中野好夫は、5月24日付『朝日新聞』に「まず言葉から——NHKに朝語講座を」を載せ、市民たちに署名運動への参加を呼びかけた。すなわち、彼は1974

年韓国で『東亜日報』への弾圧事件が起こったときに、「支持のつもりもあって定期購読者になったのだが、お恥ずかしいながら実はよく読めぬ…ほんの爪の垢（あか）ほどやってみたわたし自身の勉強でもあのわずか十の母音と十四の子音だけの組み合わせからなる典型的な音標文字（ハングル）は、読むことだけなら実にやさしい」と自分の体験を紹介。そして、「朝鮮半島との正しい相互理解は、その南北を問わず、絶対の緊要事といわねばならぬ。それにはまず言葉からだと確信する」「言語の理解がどれだけこれら隣邦との関係をよくするか、その効果は計り知れぬものがある」と、言葉を学ぶことの意義を強調した。そして、日本の大学での韓国・朝鮮語教育の乏しさにふれながら、自分の主張に賛同する人は「直接NHKへでもよい、わたしたちの事務局へでもよい、反響の声を寄せてもらいたい」と、運動への参加を呼びかけた。

同じく呼びかけ人の一人である大村益夫は、11月29付『朝日新聞』に「朝鮮語を学ぶために／限られる入門書」を投稿。入門テキストの少なさや南北分断との関係でのむずかしさをふまえた朝鮮語学習の必要性を促した。すなわち、朝鮮語を教える大学が少ないなか、市民講座などで学ぶ人たちはふえているが、朝鮮語入門テキストは、梅田博之『朝鮮語の基礎』（1967年）、李崇寧監修・朴成媛著『標準韓国語』（1972年）、河野六郎監修、石原六三・青山秀夫著『朝鮮語四週間』（1963年初版）、梶井陟『わかる朝鮮語』（1971年初版）、梅田博之『韓国語』I II（1976年）など数少なく、教師・辞書不足も深刻だと指摘。また、「南北朝鮮の分断と、その言語への投影」による日本人の朝鮮語学習のむずかしさもあると指摘しつつ、それをこえる朝鮮語学習を模索することの大切さについて、次のように述べた。

「アジアのなかで日本の主体性を確立し世界を正しく理解するためにも、わたしたちは片目で西欧を、片目でアジアをにらまねばならず、朝鮮を把握（はあく）するには、歴史的視野のもとに、一つの目でソウルを、もう一つの目でピョンヤンを見て、総合的に朝鮮観を完成していかなければならない。」⁽¹⁾

そして、『季刊三千里』では、「社告」で「匿名運動へのお願い」や「NHKに朝鮮語講座の早期開設を要望する」のアピールを載せる他、矢作事務局長による中間報告も3回にわたって行われた。また、「大学の朝鮮語講座」（大村）、「朝鮮語を考える」「『ヨボ』は朝鮮語か——朝鮮語を考える」（梶井）を載せた。「大学の朝鮮語講座」では、日本で朝鮮語講座を開設している大学の多くが財政問題を理由に専任教員を置くところが少なく、十分な教育ができない状況にあることが述べられた。⁽²⁾「朝鮮語を考える」では、朝鮮植民地支配下での朝鮮人への言語政策が、朝鮮人に母国語を奪いそのかわりに日本語を押し込んだこと。そして、奪い挙げた朝鮮語を朝鮮人の統治のために日本人が学んだことが、当時多く編まれた学習書に現れていると指摘された。⁽³⁾また、「『ヨボ』は朝鮮語か——朝鮮語を考える」では、韓国・朝鮮で夫婦の間や同年輩などへの呼びかけの言葉である「ヨボ」を、日

本人は朝鮮人への差別用語として使用したと指摘された。⁽⁴⁾

③「要望する会」主催の「朝鮮語を学ぶ文化講座」

「朝鮮語を学ぶ文化講座」は、1976年10月16日から、隔週の土曜日午後6-8時の2時間、合計4回開かれた。これは、NHKに朝鮮語講座が開設されたとき、受講者が少ないことを理由に「イタリア語講座のように、数年にして消されない」⁽⁵⁾ように、日本人に朝鮮語にかんする理解を求め、学習への関心を具体的に高めることを目的としていた。次のような4回の講座には、それぞれ45名前後の参加者があった。

第1回：梶井 陟	「朝鮮語事始め」	10月16日
第2回：尹 学準	「ハングルの成り立ち」	10月30日
第3回：金 達寿	「日本人にとっての朝鮮語」	11月13日
第4回：大村益夫	「ハングルの戦いと朝鮮文学」 ⁽⁶⁾	11月27日

その内容は記録によれば、およそ次のようなものであった。

「朝鮮語事始め」：朝鮮民族学校での梶井自らの教員体験を交えながら、戦前・戦後を通じて行われた日本人の朝鮮語学習の歴史を、朝鮮語学習書の出版数などを挙げながら説明したものであった。⁽⁷⁾

「ハングルの成り立ち」：ハングルは科学的で易しく覚えられる文字であること、文字が発音器官の形をとって作られたことなどが話された。⁽⁸⁾

「日本人にとっての朝鮮語」：新羅系渡来人集団の象徴である「天之日予」と「天日槍」や万葉仮名と吏読文字との表記法の同一性を指摘し、両国の文化の共通基盤を、朝鮮から日本への文化伝達という角度から説明。その上で、日本におけるナショナリズムの形成と日本文化の絶対化の過程で朝鮮と朝鮮語は抹殺され、それが今日まで続いていると述べた。⁽⁹⁾

「ハングルの戦いと朝鮮文学」：日本の植民地朝鮮における同化政策によって朝鮮語が抹殺されようとした時期、日本の手先になり日本の政策を美化する作品を書いた朝鮮人もいた。しかし、金史良などのように、一定の服従を余儀なくされながらも可能な限り抵抗を行い、自らの民族文化を守った人もいたことが話された。⁽¹⁰⁾

この4回の文化講座に対して、多くの人から反響があったようである。「要望する会」はこの講座にかんする感想のアンケートをとり、その一部を『要望する会ニュース』に紹介している。それによれば、「大層時宜を得たすばらしい御企画」「日本の文化と歴史を新な、正しい観点から知る上に有意義」「朝鮮語を考える上で非常におもしろい」⁽¹¹⁾「朝鮮語を学ぼうとする意欲をそそられました」⁽¹²⁾というものが多かった。そして、同時に「NHKの講座開設を待つばかりでなく、新しい企画で朝鮮語講座の開かれることを強く希望します」

「我々の手で朝鮮語の勉強会を作って勉強していく。勉強しながら同志をつのり勉強をすすめていく（ことが大切だと考えますー引用者）」⁽¹³⁾のように、主体的な内容・講座づくり

を署名運動と平行して積極的に行うべきだというものもあった。

④署名運動の経過

こうした日本人の韓国・朝鮮語認識の変化を求める活動とともに行われた「要望する会」の署名運動は、約1年間続けられた。『要望する会ニュース』と矢作事務局長の中間報告を中心にその経過を見ると、次のとおりである。⁽¹⁴⁾

署名運動は、署名用紙を配布して署名を集める方法を中心に行った。当初の計画は、8月20日までの集計をもってNHKへ交渉を行うことにして署名を集めたが、予想より少なく7月14日現在、13,228名であった。より多くの署名を集めるために『季刊三千里』の読者にも呼びかける一方、8月23-24の両日には、渋谷駅ハチ公前で街頭署名を行った。その分を含めて18,333名（署名用紙配布、65,000人分）になったが、25日の事務局会議で検討の結果、「これだけの署名人員では、NHKを動かし、朝鮮語講座を実現させるにはまだ遠い」と判断。「一、今後の署名目標を三万人以上におく／一、活動期間は三万人以上に達するまで」と方針を決めた。

そして、街頭署名運動、「目黒区民の集い」「劇団未踏の『朴達の裁判』公演」などの集いや公演会で署名を集める一方、共同通信によって全国に紹介した結果、10月8日現在で、22,863名となった。また、先の10-11月の「朝鮮語を学ぶ文化講座」によって署名運動に弾みがつき、11月には25,000人、12月7日に3万人を突破した。その後、「要望する会」がNHKと交渉を行った1977年4月4日の前日まで署名活動は続けられ、最終的には38,728人分となった。

署名運動に参加した人の職業別内訳を先着21,529名について見ると、次のとおりであった。学生22.7%、会社員20.2%、教員18.0%、公務員10.2%の他、主婦、団体職員、無職、自営業、自由業、放送出版ジャーナリスト、看護婦・医療職員など、多方面にわたっていた。学生が多いのは、若い世代において、韓国・朝鮮語への認識の変化が顕著だからであったと思われる。

地域的には、北海道から沖縄まで日本全国に広がっていると報告された。

一方、署名運動に直接たずさわった人は、大学生・主婦・実業家・公務員・教員などで、彼らはボランティアとして参加した。また、活動費用も全国から寄せられた83万5千466円のカンパによってまかなわれた。高淳日によれば、「くじゃく亭」の「朝鮮語講習会」で学んだ人々もこの署名活動に参加したという。

1977年4月4日、「要望する会」はNHKへの要望申し入れを行い、4月7日、『季刊三千里』社での事務局の常駐体制を解いた。

(2) NHKへの講座開設要請とNHKの公式回答

①NHKへの要請

1977年4月4日、「要望する会」の桑原武夫、中野好夫、久野収、旗田巍、金達寿、矢作勝美らがNHKに訪れ、38,728名分の署名を手渡ししながら朝鮮語講座の開設を求めた。NHK側からは、1970年のNHK内部で朝鮮語講座を検討したさい放送総局長としてその仕事にたずさわった経験をもつ坂本朝一会長、1970年に教育局長であった時に坂本会長と同じ経験をした堀四志男放送総局長および小池悌三放送総局主幹らが対応した。

「要望する会」側からは、まず矢作事務局長が要望書を読み上げた。そして、久野は、「中野さんも、桑原さんも、私も、どちらかといえば洋学派である。そんな自分たちが、なぜ朝鮮語講座に関心を持つかといえば、それは日本人の朝鮮認識があまりにも不足しているからである。それは、日本人の心の中に、私自身を含めて、NHKもそうですよ、大国主義がありすぎるのだ」「その国を知るには、言葉からはじまるわけだから、公共放送とっておられるNHKに、ぜひ開設をお願いしたい⁽¹⁵⁾と、述べた。また、桑原は「隣組のことばではないか。日本の将来は中国と朝鮮、とくに朝鮮との関係に深くかかわっている。そのことばを学ぶことは、なににもまして重要なことだ⁽¹⁶⁾と、述べた。

これに対してNHK側からは、まず坂本会長が発言。「NHKの放送にご関心をお寄せいただき、この種の要望をいただいた責任者としてありがたいと思います⁽¹⁷⁾と、感謝の意を表明。そして、「私自身も朝鮮語講座に無関心だったわけではございません⁽¹⁸⁾と、1970年の「放送総局長のとき、教育局長だった堀氏らと朝鮮語講座問題に取り組んだこと」があると自らの経験を述べた。したがって、「この席にも、単に要望を聞いて下部に検討を命ずるということだけにしないためにも、局内でもっとも関心を持ち、研究を続けている堀氏と、もし開設したら実務担当の責任者になる小池氏を同席させた」と、NHKとして開設の意志があることを示した。⁽¹⁹⁾

この坂本発言を受けて堀は、「7年前、朝鮮語講座開設を検討したことがあったが、内部障害と外部障害にぶつかり断念したと述べた。そして小池が、「時間とか、ほかに要望のある語学とかの内部条件は、やる気になりさえすればなんとかなる。ただ、外部との対応のため、番組内容の向上にまで手がまわらなかつたりするような事態が予想されるので、現場としては開設に踏み切れない⁽²⁰⁾と述べた。つまり、「外部条件」=名称問題が今も改善されておらず、しかも、それが「番組内容の向上」に支障をきたす恐れがあることを説明した。そして「NHKとしては、どこまでも日本人を対象とした講座である⁽²¹⁾」ので、「外部条件」の呼称問題について日本人の立場から呼称を決めたいと考えている。しかし、「これ一つでももめるほどの裏にあるもの」があると、暗に、NHKが独自に決定しきれない事情、NHK会長よりもさらに上層部の意志が関係する環境を示唆した。

この小池の慎重論にたいして、中野は、「ことばに、国家権力はない。日本のまわりの国

のことばのうち、中国語もロシア語もやりながら、ポカッと穴があいているのは朝鮮語だ。そこから、とび出す勇気を持ちなさい⁽²²⁾と、NHKの意向どおりの「朝鮮語」という名称での講座開設を促した。また、桑原も「行動すれば危険が伴なう。だが、危険を犯すに値する。われわれもバックアップする⁽²³⁾」と、NHKが独自の意志決定を行うよう決意を促した。

この4月4日の直接の対話を通じて、講座開設自体については、NHKと「要望する会」の間に基本的に一致することが、直接確認された。また、NHKが即時開設に踏み切れない原因である「外部的条件」=名称問題については、NHK最高幹部が率直に実状を説明したので、「要望する会」側は独自の決定をするようNHK幹部を励ます形になったようである。そして、最後には、開設した場合のテキスト作成にも話が及んだのであろうか、朝鮮語テキスト変遷上の問題なども話されたと言う。⁽²⁴⁾

②NHKが示した公式回答

「要望する会」との対面終了後、NHK幹部は記者会見を行い、「要望する会」に対する回答を公表した。「要望する会」の要請に同席した矢作事務局長が、『季刊三千里』第10号の「NHKとの交渉を終えて」で述べている「NHKの回答ならびに提案」は、次のようなものであった。

- 「一、NHKが新たに語学番組を設けるときは、まっさきに朝鮮語講座をとりあげ、その後でなければ他の語学番組は放送しない。
- 一、朝鮮語講座の開設をめぐる、これまでいろいろ検討してきたが、放送時間の割りふりその他、NHKの内部的条件にはなんら問題はない。
- 一、朝鮮語講座の放送にあたり、外部的な条件に多少の障害が予想されるので、それを解消したうえで放送にふみきりたい。
- 一、NHKにおいて早急に朝鮮語講座の担当者をおき、外部的条件の解消につとめたい。ついては、『要望する会』の旗田巍、金達寿の両氏にそのための協力を要請したい。」⁽²⁵⁾

これは、NHK内部には朝鮮語講座開設の意志や内部条件の成熟があることおよび障害が「外部的条件」にあることを公式に表明した点で、従来のNHK回答よりもはるかに踏み込んだものであった。また、「NHKに…朝鮮語講座の担当者をおき、外部的条件の解消につとめたい。…『要望する会』の旗田巍、金達寿の両氏にそのための協力を要請したい」という第4項は、市民レベルでの要望を受けとめながら、NHKが朝鮮語の講座開設にむけた実務的な詰めの作業にとりくむことを、公式に表明したものとして注目される。

(3) 「NHKに韓国語講座を求める会」の要請とNHKの対応

① 「NHKに韓国語講座を求める会」の発足

「要望する会」が直接NHKに朝鮮語講座開設の要望を行い、NHKが記者会見でその要望への前向きな回答をした4月4日から5日後の1977年4月9日、「NHKに韓国語講座を求める会」が、東京都港区南麻布1-7-32で発足した。⁽²⁶⁾そして「求める会」は発足3日後の12日から、NHKに「韓国語講座」を求める署名運動をはじめた。その趣旨は、1977年4月14日付『統一日報』によると、以下のとおりである。

「韓国語はすばらしい文化背景の中で生まれた世界的な言語体系であります。日本の中の多くの人たちが、韓日両国の理解を深め、さらに文化の交流を強めるため韓国語を習いたいと思っております。また、多くの商社員、公務員、学生が韓国語を勉強する機会を広く求めています。

さらに、日本に住む多くの在日韓国人一世たちは、その祖国語を正確に学び直したいと考え、二、三世は母国語習得の必要性を痛切に感じております。NHKが約二百万人と見られる韓国語習得希望者のために、そして約六十五万人にのぼる在日韓国人のために、『韓国語講座』を早急に開設することを強く訴えるものであります。」

② 在日本大韓民国居留民団文教局長のNHKへの申し入れ

この呼びかけの文書だけを見ると、「要望する会」と「求める会」とのちがいは単に名称問題のちがいにすぎないようにも見える。しかし、「要望する会」と対面した小池放送総局主幹によれば、名称問題は「番組内容の向上」に影響が出かねない性質のもの、単なる名称問題には留まらないもの、とNHKには認識されていた。

それでは何が問題となっていたのだろうか。「番組内容の向上」に影響が出るとは、どういうことを意味しているのだろうか。それは、「要望する会」のNHKへの申し入れから一週間後の4月11日、在日本大韓民国居留民団(民団)中央本部の釜広昇文教局長、孫赫壽同次長、金日圭青年局次長らによってNHKに提出された「韓国語講座開設に関する要望」(4月6日付)に示唆されているように思われる。NHK会長坂本朝一宛に、曹寧柱民団団長名で提出された「要望」の内容は、次のとおりであった。

「在日本大韓民国居留民団中央本部

韓居中文発第38-80号

1977年4月6日

受信：日本放送協会会長

参照：放送総局長

韓国語講座開設に関する要望

戦後、NHKでは、主要各国の語学講座を開設しておりますが、隣国である韓国は歴

史的・文化的に日本とは最も深い関係にあるにも拘らず、こと韓国語に関しては度外視してきました。

従って、韓日国交も回復し、最近交流が頓に増し、韓国語の重要且つ必要性を認識するに至りました。

よって、在日韓国人は勿論のこと日本の一般の方々や文化人の間にも要望の機運が高まってまいり、茲に改めて、次の事項に基き、韓国語の講座開設を要望いたします。

I. 韓国語と朝鮮語の問題に関して

- (1) 国連においては、大韓民国が唯一の合法政府として認めていること。
- (2) 韓国総人口5,000万人の中南韓に3,500万人北韓に1,500万人の人口比率も圧倒的多数を占めていること。
- (3) 在日韓国人60万名中、韓国系が45万名であり朝総連系15万名であること。
- (4) 朝鮮という語感ば韓国人に対する蔑視の意味に解され、心理的差別感を伴うこと。

II. 開設要望に関して

- (1) 在日韓国人2,3世の日本学校就学生97,000余名と青年約10万余名の母国語学習熱に依ること。
- (2) 在日韓国教育文化センターの韓国語講習所全国51個所の受講生8,900 余名中、日本人受講生が5分の2を占めている現状にあること。
- (3) 戦後、日本の大学において韓国語学科の要望が高まり6校の新設があり、尚、数校の増設予定がみこまれていること。

以上の趣旨と理由を以つて韓国語講座が速かに開設され、韓日両国に尚一層の理解が深まり¹⁷いては友好・親善の絆が固く結ばれるよう強く要望致すと共に一部朝総連や、その雇われ文化人に惑わされないよう重ねてお願い致します。⁽²⁷⁾

この文書は、前書き的な第1段落、「I. 韓国語と朝鮮語の問題に関して」、「II. 開設要望に関して」、後書き的な第4段落の4つの部分から構成されている。このうち、「II. 開設要望にかんして」は韓国・朝鮮語学習機会の必要性を在日韓国・朝鮮人、日本人、大学のそれぞれについて述べたものであり、「要望する会」の認識と根本的に食い違うものではないように見える。また第1段落と「I. 韓国語と朝鮮語の問題に関して」は、主に日本との国交をもっているのは韓国=大韓民国であるから韓国での用語法を尊重すべきであると言ういわば形式上な、いいかえれば内容には直接的影響が少ないと見られる「名称問題」である。

しかし、第4段落の「一部朝総連や、その雇われ文化人に惑わされないよう重ねてお願い致します」という部分は何を意味しているのだろうか。それがもし「要望する会」を指すならば、永井文相の「懇談会」の会長をつとめた桑原武夫を含めて「朝総連…の雇われ

文化人」にしてしまうことになり、やや唐突な印象を受ける。これまで、この「研究ノート」に記してきたように、高淳日の投書から始まる「要望する会」の署名運動までの“NHKに朝鮮語講座設置を求める”動きのなかには、北朝鮮＝朝鮮民主主義人民共和国や在日本朝鮮人総連合会（以下、「総連」とする）の宣伝をする強い意図はほとんど感じられない。しかも、署名運動提起の舞台となった『季刊三千里』を創刊した金達寿・朴慶植・李進熙らは、雑誌刊行以前に総連を脱退していたと言われている。また前述のように、「朝鮮語を学ぶために」で、大村益夫が「歴史的視野のもとに、一つの目でソウルを、もう一つの目でピョンヤンを見て、総合的に朝鮮観を完成していかねばならない」と述べていたように、韓国・北朝鮮の両方を相対化してとらえる必要が強調されていた。

こうした条件下で、桑原武夫らも含めて「朝総連や、その雇われ文化人」と指しているかのような言い方をする理由はどこにあったのだろうか。一つの可能性としては、韓国の現状を相対化する視点、いいかえると韓国民主化への注目の視点が問題とされたということとはなかっただろうか。

朴正熙大統領による1972年10月の国会解散、12月の維新憲法公布、そのなかでの73年金大中拉致事件、74年金芝河への死刑求刑など、1970年代の韓国の維新体制と民主化運動については世界中が注目していた。とくに日本が舞台となった金大中拉致事件には、日本の世論も強い関心をもった。

1972年11月からは、日本の代表的な総合雑誌『世界』が戒厳令下の「韓国からの通信」の連載をはじめた。それは、T.K生／『世界』編集部編の岩波新書『韓国からの通信』（1974年）『続 韓国からの通信』（1975年）として刊行され、77年4月の時点でもなお連載が続いていた。また、桑原武夫、中野好夫、久野収、都留重人、松田道雄、木下順二らは『世界』の発行元岩波書店とかかわりの深い、いわゆる「岩波文化人」であった。そうした日本の国内世論とくに若者たちの韓国の維新体制と民主化運動への関心が、1970年代前半にはじまる日本での韓国・朝鮮語学習熱の背景にあったと言われている。そしてこうした動きのなかから ①日本人の韓国・朝鮮語学習の歴史を含む日本と韓国・朝鮮との関係の見直し ②市民的レベルでの相互理解・友好・協力のための韓国・朝鮮語学習 ③韓国・朝鮮人の日常生活に根ざした韓国・朝鮮語学習という三つの視点が出てきた。

戒厳令を出していた当時の韓国政府と深い関係のある当時の民団にとっては、このうちの②の“市民的レベルでの相互理解・友好・協力のための韓国・朝鮮語学習”が、問題となったという可能性はないだろうか。つまり、「朝鮮語講座」の名称の下に、韓国社会に対する批判的視点がNHKの講座に含まれてくる可能性があったとすれば、それが問題視されていたと言うことではないだろうか。“韓国が日本と国交のある唯一の合法政府”だから「韓国語講座」にすべきだという論理で、その可能性＝危険性を予防する。これが、小池によって「番組内容の向上にまで手がまわらなかつたりするような事態が予想される」「こ

れ一つでももめるほどの裏にあるもの」と、述べられたことがらだったという可能性はないだろうか。

この問題は、現在NHK語学講座『やさしいビジネス英語』が市民社会の成熟の視点から、フェミニズムやマルチカルチャリズム、環境問題などを積極的に取りあげているような方向を、「ハングル講座」においてもどのような条件のもとでは導入できるかという、教材作成に直接かかわる今日の重要な問題である。それだけに、韓国で民主化が進み文民政府が成立し、この点を事実にもくして明らかにする条件が生まれてきている今日、より詳細な検討が求められていると思われる。

③「求める会」の署名運動の経過

民団の青年会や婦人会および韓日協力関係者が主体になって進められた「求める会」の署名運動は、10万人の署名を目標に、戸別訪問や街頭署名運動などを行った。1977年5月21日付『統一日報』によると、「求める会」の署名運動にたいする日本人の反応は様々であった。すなわち、「韓国が好きで何度か旅行しているうちに言葉を覚えた。いまでは近所の人たちを集めて教えている」⁽²⁸⁾「中国語が放送されているのに、隣国である韓国語講座がないのはおかしい」⁽²⁹⁾という人がいる反面、「朝鮮人は嫌い。われわれの税金でそんなことをする必要はない」⁽³⁰⁾という人もいる。そして、6月18日付同紙では、「韓国語がNHKの外国語講座にないのはおかしい。最も近い国だし、交流の深さからしても当然」だから「“韓国語”“朝鮮語”の名称にこだわることなく応じてくれた日本人もいた」⁽³¹⁾と報道されている。

約3カ月にわたって行った署名運動の結果、13万余名分が集まった。

④NHKにおける慎重な姿勢

1977年7月2日付『統一日報』によれば、6月30日、「求める会」の小島哲郎日本KBL（韓国放送公社の外国むけ番組を聞く人々の会）連盟会長ら7人がNHKを訪問。坂本朝一NHK会長に13万余人の署名簿とともに「伝達趣意書」を手渡し、「韓国語講座」開設を要請した。⁽³²⁾その内容は以下のとおりである。

「伝達趣意書

NHK

会 長 坂本朝一 殿

私達は、日本に於ける文化教育関係放送番組に深い関心を持ち、かねてよりNHKの外国語教育講座に注目しており、特に韓国語講座開設を求める会を作り、その実現のため尽力いたしております。

NHKにおかれましては、最も近い隣国であり、歴史的、文化的に深い関係をもつ日韓両国の理解増進と文化交流のみならず、約200万とみられる韓国語習得希望者のために、早急に韓国語講座を設けるべきであると考えます。

この度、本会は全国的に署名運動を展開し、下記の如く13万余名の賛同を得ましたの

でここに署名簿を提出し、これら多数の人達を代表して重ねて韓国語講座早期開設を強く要望いたします。

記

1. 署名者総数 162,240名
(日本人117,630名, 在日韓国人44,610名)
2. 職業別内訳

会社員	37,27%	学生	19,13%
主婦	11,69%	自営業	9,58%
無職	4,92%	土木建設	3,22%
飲食	1,93%	公務員	1,92%
団体役員	1,75%	製造	1,63%
運送	1,35%	教師	1,08%
農業	0,46%	理容	0,44%
医療	0,35%	その他	3,28%

1977年6月30日

東京都港区南麻布1-7-32

NHKに韓国語講座を求める会

藤島泰輔 (作家)

和田耕作 (衆議院議員)

木島則夫 (参議院議員)

大内啓伍 (衆議院議員)

受田新吉 (衆議院議員)⁽³³⁾

そして、署名伝達に同行した馬場嘉光日韓議員連盟事務総長は、「国交を結んで十数年になるのを無視するのは問題。昨年、大へんな評判だった韓国美術五千年展でも朝日新聞社は韓国の名称に決めている。この辺の事情を汲んで欲しい⁽³⁴⁾と申し入れた。小島KBL会長も「わたしの連盟では、KBS放送のリスナーは百万人を下らないと踏んでいる。プログラムに『やさしい韓国語』というのがあってなかなか人気を集めてもいる。こうした既成の事実を無視しないようお願いする⁽³⁵⁾と、講座名を「韓国語」にするよう求めた。

こうした民団や「求める会」の申し入れによって、NHKはきわめて慎重な姿勢をとることになった。すなわち、4月11日の民団の「韓国語講座開設に関する要望」の提出に対して、NHKの西山昭雄放送総局通信教育部長は、「民団の意見を考慮し、開設にあたってこれを尊重する⁽³⁶⁾と述べた。また、6月30日「求める会」の申し入れに坂本NHK会長は、

講座開設について「かなり前から積極的にやってきた。南と北の難しい問題があり、きょうまで実現されていない。もし講座を開設した場合、番組中、韓国や北の事情も紹介しなければならぬケースも招来することが予想されるだけに、余計、慎重にならざるを得ない」⁽⁸⁷⁾と述べた。

註

- (1) 大村益夫「朝鮮語を学ぶために／限られる入門書」『朝日新聞』1976年11月29日
- (2) 大村益夫「大学での朝鮮語講座」『季刊三千里』第6号 1976年5月 15-19ページ
- (3) 梶井陟「朝鮮語を考える」『季刊三千里』第8号 1976年11月 100-105ページ
- (4) 梶井陟「『ヨボ』は朝鮮語か——朝鮮語を考える その(2)」『季刊三千里』第9号1977年2月 94-103ページ
- (5) 「『要望する会』第一回文化講座のお知らせ」『要望する会ニュース』第3号1976年10月15日
- (6) 「文化講座」を知らせる時点では、「30年代の朝鮮文学」であった。(『要望する会ニュース』第3号)
- (7) 『要望する会ニュース』第4号 1976年11月15日
- (8) 前掲『要望する会ニュース』第3号
- (9) 『要望する会ニュース』第5号 1977年1月20日
- (10) 同上
- (11) 同上
- (12) 「朝鮮語を学ぶ文化講座」参加者を対象とする「要望する会」によるアンケート調査の資料による。
- (13) 同上
- (14) 『要望する会ニュース』第1号(1976,8,1), 第2号(1976,9,15), 第3-5号, 第6号(1977,4,25) および矢作勝美「NHKに朝鮮語講座を」『季刊三千里』第7号(1976,8), 第8号(1976,11), 第10号(1977,5)
- (15) 今田好彦「あらたな日朝文化交流」『季刊三千里』第10号 1977年5月 191ページ
- (16) 前掲「あらたな日朝文化交流」『季刊三千里』第10号 192ページ
- (17) 前掲「あらたな日朝文化交流」『季刊三千里』第10号 190ページ
- (18) 同上
- (19) 同上
- (20) 前掲「あらたな日朝文化交流」『季刊三千里』第10号 191ページ
- (21) 前掲「あらたな日朝文化交流」『季刊三千里』第10号 192ページ

- (22) 同上
 (23) 同上
 (24) 同上
 (25) 矢作勝美「NHKとの交渉を終えて」『季刊三千里』第10号 1977年5月188-189ページ
 (26) 「NHK『韓国語』開設への署名運動」『統一日報』1977年4月14日
 (27) 在日本大韓民国居留民団中央本部「韓国語講座開設に関する要望」
 韓居中文発第38-80号 1977年4月6日
 (28) 「NHK韓国語講座署名運動」『統一日報』1977年5月21日
 (29) 「青年会が街頭署名運動／NHKに韓国語講座を」『統一日報』1977年4月26日
 (30) 前掲「NHK韓国語講座署名運動」『統一日報』1977年5月21日
 (31) 「NHK韓国語講座署名／10万人を超える」『統一日報』1977年6月8日
 (32) 「NHK会長に『署名』伝達／韓国語講座求める会」『統一日報』1977年7月2日
 (33) 前掲「NHKに韓国語講座を求める会」『伝達趣意書』1977年6月30日
 (34) 前掲「NHK会長に『署名』伝達／韓国語講座求める会」『統一日報』
 (35) 同上
 (36) 「韓国語講座『早期開設に全力を』／民団中央、NHKに要望書」
 『統一日報』1977年4月13日
 (37) 前掲「NHK会長に『署名』伝達／韓国語講座求める会」『統一日報』

4. NHKにおける講座開設決定にいたる経過（その2）——1977～84年——

(1) 韓国・朝鮮語学習へのアプローチの見直しと

NHK文化センター主催の「日本語と朝鮮語」「朝鮮語の世界」講座

NHKに慎重姿勢をとらせた「求める会」の「韓国語講座」開設の申し入れ、とくに名称問題に対して、「要望する会」などからの反論が『毎日新聞』などに寄せられた。

すなわち、1977年9月1日付『毎日新聞』に梶井陟の「『朝鮮語講座』はなぜ必要か」が載った。そこで彼は、NHKによる「朝鮮語講座」開設は、公営の放送機関が日本人に必要な言語として韓国・朝鮮語を対等に学ぶことを認め、一般市民の間で行われている“朝鮮語学習熱”を結集し確かなものにするようになるとしながら、次のように主張した。

「『朝鮮語』というのは、日本では歴史的・文化的に定着した慣用化された名称なのである。隣国を知るための日本人むけの講座である以上、学問的に定着した名称を用い、教材の作成においてNHKの自主性を固持すべきはいうまでもない。」

また、「要望する会」の呼びかけ人の一人である旗田崑も、9月25日付『神奈川新聞』と10月5日付『京都新聞』に、「政治の次元を超えて実現を」を寄せた。そこで彼は、「要望する会」の運動の立場としては、「政治の次元をこえて、日本に一番関係の深い隣の民族の言

葉を学び、その民族への理解を深めるとのことだけを考えてきた」としながら、「朝鮮」という言葉は「南北の区別なく全体を包括する言葉である」とし、「朝鮮語講座」とすることを主張した。

名称問題についての議論はこれ以後も続き、即時開設の見通しはなくなったようである。しかし、この時期に開設にむけての努力はNHKの内外で続けられた。なかでも「要望する会」とNHKの双方で、韓国・朝鮮語学習の内容や方法についての認識の深まりがあったことは注目される。

①生活に密着したところからの韓国・朝鮮語学習の具体的視点

(a) 『季刊三千里』誌上における韓国・朝鮮語学習にかんする討論

「要望する会」は、1979年以降も毎年4月4日、NHKに働きかけを行い続け、⁽¹⁾それは『季刊三千里』誌上を通じて「要望する会」の事務局長・矢作勝美によって報告された。⁽²⁾また、関係者たちによって、日本人の韓国・朝鮮語視の捉え直しや大学における韓国・朝鮮語教育の現状とその必要性、日本人の韓国・朝鮮語学習の意味や方法にかんする討論などが、『季刊三千里』誌上で行われた。

すなわち、同誌は、第11号（1977年8月）に「日本人と朝鮮語」を特集した。そこには、次のものが収録された。

金 達寿「古代日本と朝鮮語」

梶村秀樹「朝鮮語で語られる世界」

李 進熙「雨森芳洲の朝鮮語」

梶井 陟「日本統治下の朝鮮語教育」

小沢有作／金達寿／久野収／旗田巍 <座談会> 「まず言葉から」

吉野広造／志村節／土器屋奈子／八巻さだえ／大津和子／藤本敏和

木下雅子／西岡健治「私にとっての朝鮮語」

また、梶井陟の「朝鮮語を考える」シリーズが、その後も継続された。

第 1回 朝鮮語を考える	第 8号 1976年11月
第 2回 『ヨボ』は朝鮮語か——朝鮮語を考える	第 9号 1977年 2月
第 3回 日本統治下の教育と朝鮮語	第10号 1977年 5月
第 4回 日本統治下の朝鮮語教育	第11号 1977年 8月
第 5回 朝鮮語奨励規定——朝鮮語を考える	第12号 1977年11月
第 6回 植民地の警察官と朝鮮語	第13号 1978年 2月
第 7回 警察官の朝鮮語学習	第14号 1978年 5月
第 8回 朝鮮人児童の日本語教科書	第15号 1978年 8月
第 9回 朝鮮語学習書の変遷	第16号 1978年11月
第10回 穂積重遠の「朝鮮遊記」	第17号 1979年 2月

第11回 ある朝鮮語観の軌跡

第18号 1979年 5月

第12回 安部能成における朝鮮

第19号 1979年 8月

そして、大村益夫「大学における朝鮮語講座」(第12号 1977年11月), 大沢真一郎「大学の朝鮮語講座を考える」(第14号 1978年5月), 玉城繁徳「大学に朝鮮語講座を」(第28号 1981年11月)を載せ、日本の大学における朝鮮語講座の充実の必要性を説いた。

(b) 久野の提起

この中で、第11号の座談会「まず言葉から」は、朝鮮語学習をより多数の人々のものにするために、学習の内容や方法に踏み込んだ点で注目される。すなわち、この座談会は、次の諸点が重要だと提起した。①日本語と朝鮮語との言語の共通性を重視すること、②「隣のおじさんにでも気楽に話しかけられるような感じ」の会話、③「朝鮮人の人生に対する姿勢…考え方の基本になっている小説や物語」を教材として採用すること、④日常生活に触れること、である。

座談会には、「要望する会」の呼びかけ人である久野収、金達寿、旗田巍の他、在日韓国・朝鮮人教育に詳しい小沢有作が参加した。

座談会ではまず、1965年「日韓会談」以来、歴史的問題の見直しから日本人の朝鮮語学習者が多くなり、「要望する会」の運動にも見られるように民衆側に朝鮮語学習者が増えたことに希望が持てることが語られた。

それを踏まえて久野は、「それでもまだまだ中国語にくらべると弱い」と、朝鮮語学習者が絶対的に少数であることを指摘しながら、朝鮮語をより多数のものにするために、「朝鮮語に対するアプローチの仕方を考え直し」、「もっとより生活に密着したところからのアプローチ」が必要であると、述べた。

久野 …ぼくはこれまでの朝鮮問題…朝鮮語に対するアプローチの仕方を考え直したいと思うんですよ。ぼくはいままでのアプローチの仕方だけではどうしても少数にならざるをえないと思うんです。過去の罪ほろぼしのために学ぶとか、これから手をつなぎ合うために学ぶといったようなこれまでのアプローチの仕方は、往々にして政治的な側面での方法ですからね。一般の人にそうした考えを求めるのはちょっと無理なんじゃないかな。だからぼくはもっとより生活に密着したところからのアプローチの仕方があるのではないかと考えるんです…。

(c) 韓国・朝鮮語を通して日本語を再発見する

この久野の提起を受けて参加者たちが語ったことのひとつは、朝鮮語を学ぶことを通じて、発音・文法・漢字などの点で日本語を再発見することであった。

久野 …考えれば考えるほど日本人の生活意識のなかには朝鮮に関する側面がほとんどありませんね。…これだけ近い国なんだから日本語のなかになんらかの形で入ってきていると思うのですが…。

金 日本語と朝鮮語は、系統的に同根だったと思うんです。現在の日本語の中にも朝鮮語から変形した言葉がたくさん残っていますし、また、歴史的仮名遣いの「てふてふ」、これをなぜ「ちょうちょう」と読むのか、あるいは「やう」と「よう」の区別なんかは、朝鮮語を知っていればかんたんに理解できますからね。

小沢 そうですね。ぼくらが日頃気づかないで話している日本語の微妙な発音の違いも、朝鮮語の発音に照らすとはっきり区別できるものがあるんです。…日本語の「を」と「お」の発音をむかしは区別していたのですが、いまは同じくOと発音しますね。しかし、朝鮮語では $\overline{A}O$ とOで区別して発音されますからね。…朝鮮語ほど日本語の見直しにすぐはねかえってくる外国語は、他にはないように感じられます。

金 日本語で「手がいたい」を朝鮮語では「ソンイ アブダ」と言うのですが、その「イ」は日本語の「…が」にあたるんです。この「イ」もかつて日本語にもあって、『万葉集』や『日本書紀』にも出てくるんです。たとえば、「枚方ゆ笛ふきのぼる近江のやけなの若子い笛ふきのぼる」などというのがあるわけですが、また、古代日本遣唐使を送るときは通訳をつけていましたが、朝鮮へのそれには通訳がついていないんですよ。

久野 そうすると、いまの日本語は朝鮮語からの自立過程で成立していったということですか。

金 そうだとぼくは思っています…。

………

…日本人が朝鮮語をやるときはいきなり音標文字からやるよりは、千字文からやるといいと思うんですよ。…漢語にてにをはをつけて、少しブロークンにやってみるとおもしろいと思いますね。日本語で夕行活用の音のものは、朝鮮語でもだいたい同じなんです。たとえば「天」という漢字は、日本語では「てん」、朝鮮語では「チョン」で同じ夕行なんです。ですから、漢字まじりの朝鮮語で書かれた社会科学関係の本など訳すのは割にかんたんですよ…。

(d) 隣のおじさんに気楽に話しかけるような会話

第二は、「朝鮮語的感觉でごくナチュラル」な、「隣のおじさんにでも気楽に話しかけられるような感じ」の会話を重視することであった。

編集部 さきほど金さんが、朝鮮語を一年やってもなかなか理解するのはむずかしいという主婦の話しを紹介されましたが、朝鮮語はそんなにむずかしいのでしょうか。

旗田 むずかしいですね。母音の数が多くて。耳で聞いただけでは区別が付きませんからね。

小沢 まず、最初の発音段階で半分くらい脱落してしまうんじゃないですか。
久野 だいたい日本の英語教育にもいえることですが、教え方に問題があるんじゃないですか。…教師自身が朝鮮語の感覚でごくナチュラルに教えられたらと思うんです。NHKで朝鮮語をやるようになったら、ぜひこうしたことを考慮してほしいですね。…これまでのような形式ばったものではない、よりフアミリアな感覚が必要なんじゃないかな。隣のおじさんにでも気楽に話しかけられるような感じになればと思うんですよ。そんな会話でのピチオンコーリアンみたいなものの上に正確な教科としてあると、かなり理想的なところまでいくと思うんですがね。

小沢 ぼくが習った朝鮮語も、またいま大学でやっている朝鮮語も、発音、そして文法からはいっていきわば正統派のおごそかに教える朝鮮語でしょう。やはり最初の発音のところでみんなつまづきますね。

(e) 生活姿勢・人生観の基本になっている物語や小説の重視

第三は、「朝鮮人の人生に対する姿勢とか考え方の基本になっている小説や物語などを読みやすくしてすすめる」ことであった。

久野 朝鮮語を学ぶにも、ただ会話だけでやるのではなくて、朝鮮人の人生に対する姿勢とか考え方の基本になっている小説や物語などを読みやすくしてすすめると、また一種の興味を持ちえていいんじゃないでしょうか。肩のこるものではなしに一般の家庭でも語りつがれてきたような、そんな物語が朝鮮にもあるでしょう、中国の『西遊記』みたいな。…作家の五木寛之君がいまのような小説家になった動機が『春香伝チュニヤンフン』にあったといいますからね。彼が子供のころ朝鮮の田舎道を歩いていたとき、おじいさんが『春香伝』をみんなに語りものとして語っていて、そこにいらした人たちが聞き惚れているのを見てひじょうに感激し、俺もこのように語る人になれたらというのが、そもそもの動機だったといいます。

金 『春香伝』はもともとが物語本なんです。だいたいわれわれが『春香伝』や『沈清伝チヨンフン』その他の物語を知ったのは、子供のころ朗読で聞いたのが大部分なんですよ。

旗田 数年前、江利チエミが『春香伝』をやって大喝采を博しましたね。また、戦前に築地小劇場でやったこともあります。これは劇としてじつに面白いし、心を打つものがありますね。

久野 そういったことを知るのも必要なんじゃないでしょうかね。たしかに文学書としての『春香伝』も大切でしょうが、より身近なものとして、こういうとき朝鮮人はこう考えるのか、こんなことをするのか、ここは日本人の感覚と同じだとか、そんなことを感じとることが望まれるんですよ…。

(f) 人間の生活にふれる

そしてこれらをふまえて、あらためて人間の生活にふれることの大切さが語られた。

久野 くり返し言うようですが、やはり専門的語学知識をよそいきとして身につけるのではなくて、日常生活のなかにじわじわと沁透してくるような方向で朝鮮語の勉強を考えられないかと思うんですがね。

旗田 そうですね。人間の生活に触れるのが大切なことですね。

久野 義務や責任でなくて自分の興味の持てるところから入っていくといいんですよ…。

以上のような、(a)日本語と韓国・朝鮮語との言語の共通性を重視する (b)隣のおじさんに気楽に話しかけるような会話 (c)生活姿勢・人生観の基本になっている物語や小説を教材にする (d)人間の生活にふれる、という四つの点は、久野が「相互理解のための提案」で述べた“日常生活感覚に根ざした朝鮮語学習”を、教育方法や内容に踏み込んで具体化しようとしたものであったと言える。つまり、「相互理解のための提案」で出されていた、(a)民衆同士の連帯のため (b)歴史認識を踏まえるに (c)日常生活感覚に根ざす、という韓国・朝鮮語学習のうち、とくに第三の視点についてより具体的に討論したのである。

②NHK文化センターにおける「日本語と朝鮮語」「朝鮮語の世界」講座開設

一方、NHK内部でも“名称問題”での合意形成のために努力をやり続けた。また、放送での講座開設には時間がかかるにしても、できるところから市民の要望に応え、その実績を放送の講座開設の基礎にしようと努力した。そして、暗に“名称問題”に含められていたと考えられる講座の内容にかんして、合意・妥協が可能となるような内容づくりの準備が続けられていたと見られる。その一つとして、1979年2月に南青山のNHK文化センターで開かれた、朝鮮語にかんする教養講座「日本語と朝鮮語」「朝鮮語の世界」をあげることができる。⁽³⁾

(a) 講座開設のねらい

講座開設の趣旨は、次のとおりであった。

「言葉は民族がはぐくんできた文化であり、生活の歴史そのものです。日本と朝鮮(韓国)は、文化的にも言語的にも多くの類似点をもっています。この講座では、日本語と朝鮮語を言語社会学的に比較して、<真の日本的文化とは何か>、<日本語の日本語らしさはどこにあるのか>を考えます。また近頃朝鮮語に対する関心が高まっていますが、朝鮮語を手がかりに、その背景にある風俗、習慣、人間観についても明らかにしたいと思います。」⁽⁴⁾

また、NHKから依頼されてこの講座を企画した、慶応義塾大学教授江坂輝彌も、「韓国の言葉に親しみ易いように、新しい企画で古代から現代までのその関連について『日本語

と朝鮮語—その文化的背景—という講座を先ず開設しました⁽⁶⁾と、述べている。「先ず」というのは、「これをワンステップとして文化センター、放送両者に朝鮮語講座ができるよう努力したい⁽⁶⁾という前提があったからである。

全24回にわたるこの講座を担当したのは、当時慶応大学講師であった渡辺吉鎔であった。江坂輝彌が「講師は私の弟子の一人である渡辺吉鎔さんをお願いしました⁽⁷⁾と当時述べているので、江坂の推薦によるものと考えられる。

渡辺吉鎔(旧姓:金吉鎔)は、1944年韓国ソウル生まれである。梨花女子大学校1年修了後来日。慶応大学およびカリフォルニア大学大学院卒業した。専攻は言語学・現代朝鮮語学。1974年、東京外語大AA研の朝鮮語研修のためのテキスト作成を梅田博之が行ったさい、共同研究員として練習問題を作成した経験をもっていた。⁽⁸⁾

(b) 教養講座「日本語と朝鮮語」「朝鮮語の世界」の内容

「これらの講座は、朝鮮語をまったく知らない人を対象にして、朝鮮語を言葉としてだけでなく、その背景にある民族や文化・伝統といった立場から多角的に紹介するとともに、現代日本語論の諸論点を朝鮮語と比較対照し、見直そうとするもの⁽⁹⁾だったと、この講座について、後に渡辺は述べている。

「NHK文化センターで二十四回にわたって行った『日本語と朝鮮語』、『朝鮮語の世界』という二つの教養講座の内容を骨子としている⁽¹⁰⁾『朝鮮語のすすめ』(渡辺吉鎔+鈴木孝夫 講談社新書 1981年)が後に出版されたので、そこから当時の内容を推測することができる。『朝鮮語のすすめ』の出版について、渡辺は本の「まえがき」で次のように述べている。

「講談社…から、講義内容を『朝鮮語のすすめ』という一冊の本にまとめてみないかといわれた時、私はためらった。

私はもちろん自分の愛する母国の言葉を日本の方々に紹介し、すすめたい気持ちは十分にあった。しかし、日本人がなぜ朝鮮語を学ぶべきか、あるいは、日本人がどのような姿勢で、朝鮮語という外国語に取りくむべきかという問題は、つきつめていけば、日本人自身の問題であり、私のような外国人が口をはさむべきことではないように思われたのである。⁽¹¹⁾

全5章から成り立つ『朝鮮語のすすめ』は、第1章を慶応義塾大学教授で言語学者鈴木孝夫が、第2章～第5章を渡辺がそれぞれ書いている。第1章は、「1.私と朝鮮語との出会い 2.日本人と朝鮮語 3.朝鮮語の面白さ」となっている。それは、「日本語の真の姿を知りたい人、日本人とは何かを深く考えたい人にとって、朝鮮語はまたとない魔法の鏡を提供する⁽¹²⁾ものであると、自らの韓国・朝鮮語学習の体験をふまえての韓国・朝鮮語学習の勧めである。

NHK文化センターでの講座がもとになったと考えられる内容は、次のとおりであった。

第二章 朝鮮語の発想・日本語の発想

1. 謙遜こそ美德 2. 数の世界 3. 愛のことば 4. 人称と場所 5. 漢語と発想

第三章 日本語の特色と朝鮮語

1. 助詞の省略 2. 主語なし文 3. いいきらない表現 4. 「こ」「そ」「あ」と朝鮮語

第四章 朝鮮語はどんな言語か

1. 日本語と朝鮮語は兄弟か 2. 朝鮮語の音 3. ハングル文字

第五章 韓国流コミュニケーション

1. 近くても異文化 2. あいさつは十人十色 3. お礼はほどほどに 4. 「和」と「道理」
5. 話題は人間がらみ 6. “親密さ”の距離 7. 売りことばに買いことば 8. 父母にも敬語 9. 自国語への誇り

このなかで、第二章と第三章が「日本語と朝鮮語」に、第四章と第五章が「朝鮮語の世界」に対応すると考えられる。それらの具体的な内容は、以下のとおりであった。

(イ) 「朝鮮語の発想・日本語の発想」と「日本語の特色と朝鮮語」の内容

(i) コトバに見られる日本人と韓国・朝鮮人の発想の共通性

「朝鮮語に親しみを覚えていただこうと、日本人と韓国人に共通してみられる表現と発想」について書いた⁽¹³⁾と、渡辺自身が述べている第二章には、次のようなものがある。

(1) 自己謙遜の文化：韓国人は謙遜の精神を美德としている。たとえば、客にもてなすさい、たくさんの料理を作りながらも、客に対しては次のように言う。

アムコット オプチマン マニ トウセヨ
아무것도 없지만 많이 드세요

(何もございませんが、たくさん召しあがってください)

ウムシク ソムシガ シントンチ アナ テエンビハムニダ
음식 솜씨가 신통치 않아 창피합니다

(お料理が下手ではずかしいです)

(2) 数の世界での共通性：慣用表現のなかで単数と複数の区別がないこと、助数詞の表し方、歌のなかでの音節の数字におけるの共通点。これらの起源は中国にあるが、同じ慣用句を使うことによって、日本人と韓国人が発想を共有している点に重要性があると述べている。

- ・価値のない安っぽい小説：三文小説^{サンモンソノル}
- ・あちらこちら：四方八方^{サバンバルバン}
- ・数度の失敗にも屈せず頑張る：七転八起^{チルジョンバルギ}

(3) 愛のことば：伝統的に直接的な愛の言葉はタブーとされている。また、「愛する」ことに「思う」という言葉をあてている点に、共通点があるとしている。たとえば、愛の言葉である사랑하^{サランハダ}の「사」は、「思う」という意味である。

(4) 人称と場所：日本語の人称代名詞のなかに、場所から転じた言葉が多いが、朝鮮語にも人を表す時、場所を表す言葉が用いられることがある。たとえば、「お前さん」「奥さん」

「お上さん」「お宅さん」のように、場所を表すものが人称代名詞になっているが、朝鮮語にも次のようなものがある。

거기는 왜 그렇게 찾아오세요

(そこは、なぜそんなに追ってくるのですか) (下線部一引用者)

(5) 漢語と発想：韓国には、中国製漢語と日本製漢語がある。日本製漢語は、日本統治下時代に、日本語強制によって韓国人の間に浸透してきたものであると、渡辺は述べている。日本語の教材からあつめた1,800余語の漢語を中国語と比較した研究があるが、そのなかには、中国語にないものが約510語であり、そのうち300語が日本製漢語である。

日本語：冷蔵庫 洋服 名作 便利 無事 就職

中国語：冰 箱 西装 有名的著作 方便 平安 就業

朝鮮語：冷蔵庫 洋服 名作 便利 無事 就職

また、日本語と違う漢語に、^{ヨンキ}年歳=年齢の敬語、^{クギヨン}求景=見物、^{ボクトクバン}福徳房=不動産屋、^{シツフ}食口=家族、^{ナムピョン}男便=夫、^{ピョンジ}便紙=手紙などがある。

(ii) 日本語の特色と朝鮮語の特色との共通性

第三章は、ヨーロッパ語との比較において日本語の特色とされているいくつかの点が、同時に朝鮮語の特色でもあることを示すことを通じて、「日本人にとってなぜ朝鮮語が必要なのか」に迫ろうとしている。

(1) 助詞の省略：日本語の助詞は朝鮮語の助詞と対応している。

日本人は 東洋の 中では 大変 変わった民族だということも よく 分かつ
일본인은 東洋의 가운데에서는 매우 이질적인 민족이라는 것도 잘 이해

てきた。

하게됐다 (下線部一引用者)

また、日本人特有の性格とされている助詞の省略は、朝鮮語にもある。

앞으로는요, 공짜를 철대로 바라지 않을 테니까요 이거를 어떻게 좀 파는데
협조를 좀 해 주십시오 (これからはね、ただものを絶対にのぞみませんから。これ

を何とか売るのに協力してください)

(2) 主語なし文：対話のさい、相手や自分をさす人称代名詞を使わない点での共通性。

갔었습니까? 네 갔었습니다

(行きましたか) (はい、行きました)

(3) いいきらない表現：話し手が語感のやわらかい言い方をしたい時に用いられる「いいきらない表現」の共通性。

지금 나가시고 안계신데요 좀 갈 곳이 있는데요 (下線部一引用者)

(今、出かけていらっしゃるんですが) (ちょっと行くところがありますが)

(4) 「こ」「そ」「あ」と朝鮮語：朝鮮語の指示詞「이」「그」「저」も日本語同様に、状

況や場面への依存度が高い点で共通している。

저 미스터 김 그후 그건 어떻게 됐습니까?

(あの、ミスター金、その後その件、どうなりましたか) (下線部一引用者)

(ロ)「朝鮮語はどんな言語か」と「韓国流コミュニケーション」の内容

(i) 日本語と異なる朝鮮語の特徴

第四章で、日本語と異なる朝鮮語の特徴について述べている。

(1) 日本語と朝鮮語は兄弟か：渡辺は、第二章、第三章を受けつつ、日本語と朝鮮語は語順や文法の点で類似していると述べている。たとえば、語と語の関係を示す日本語の「テニヲハ」が、朝鮮語にも同様に現れていることや、「語頭にrがたない」「母音調和の現象がみられる」「語頭に子音群がこない」「関係代名詞を用いない」などの共通点を指摘する。

次のものは語順対応の例文である。

日本語와 한국語에 대해 세계에서 제일 먼저 学問的 研究을 한 사람
日本語と 韓国語に ついて 世界で 一番 早く 学問的 研究を した 人
는 ASTON이란 英國의 外交官이다.
は ASTONという 英國の 外交官である。

また、朝鮮語から来ている日本語の単語の例をあげている。たとえば、祭でおみこしをかついで「ワッショイ、ワッショイ」という言葉は、朝鮮語の「왔소」と同じ言葉で「来ました」の意味である。日本語の「ハナから」のハナも、朝鮮語の「하나」=「一」の意味と同様。そして、「畑」を日本の古語では「pata」というが、朝鮮語では畑を「밭」=「pat」と読む。このように、日本語では意味が分からない言葉が、朝鮮語でその意味が分かるものがある。しかし、一致しないものもある。

(2) 朝鮮語の音：朝鮮語の母音体系と子音体系。朝鮮語には八母音もしくは九母音があり、日本語にはない「u」「o」「ε」「ə」音が認められる。子音の音は、無声音「p」「t」「k」「tʃ」がそれぞれ三つずつ、「s」が二種があり、日本語の子音の無声音「p」「t」「k」「tʃ」が二つ、「S」が一つしかない点で日本語と異なる。たとえば、月は「tal」、娘は「t'al」、お面は「t'al」と、それぞれ発音される。

(3) ハングル文字：ハングルは、子音字が発音器官の象形によって、母音字が易学で言う三才の原理に基づいて作られた。また、仮名文字が子音と母音の組み合わせからなる音節文字であるのに対して、ハングルは一文字が一単音を示す音素文字=アルファベット文字である。たとえば、김치의 김は、「k」と「i」と「m」に、치는「tʃ」と「i」にそれぞれ分けられる。また、日本語には、子音で終わる文字がないが、朝鮮語には音節末にくる子音が「p」「t」「k」「l」「m」「n」「ŋ」の七種類ある。たとえば、朝鮮語의 송각 「tʃongak」が日本では「チョンガー」となって、ㄱ=kが脱落する。朝鮮語의 비빔밥 「pibimp'ap」が日本では「ピビンパ」となり、ㅍ=pが脱落する。

(ii) 日本人と韓国人の発想の違い

第五章は、韓国は日本と同根の文化を持っているが、異なる価値観によって言語活動が日本人と異なる点について述べている。

(1) 近くても異文化：言語活動において韓国人は日本人と違って、次のような特徴をもっている。①ものことをはっきり言う ②老若男女をとわず個人としてもっている意見をはっきり言う ③自分をさらけ出すことによって相手とのコミュニケーションをはかる。

(2) あいさつは十人十色：韓国のあいさつ言葉は日本語と比べ決まり文句が少なく、日本人が決まったあいさつを使うところでも韓国人はそれを使わない。たとえば、朝起きて日本人はまず「おはようございます」と言うが、韓国人は「おはようございます」を一律に用いない。「よく寝られたか(잘 잤어?)」、「昨日は暑かったね(어제 밤은 무더웠지?)」、「二時頃すごい雨だったね(두시에 웬 비야?)」など、人によって相手に使うあいさつが異なる。また、会社に上司が出勤したとき、「今おいでですか(지금 나오십니까?)」という内容のあいさつをする。

(3) お礼はほどほどに：「東方礼儀之國」と称し、礼儀の国であることを誇りとしている韓国人であるが、相手に対する感謝の気持ちを心にとめておくことを大事にし、言葉で表すのは一回だけにとどめる。たとえば、ある仕事を頼み、それをやってもらった時、「감사합니다(ありがとうございました)」と、お礼を言うにとどまる。従って、「先ほどはどうも」「先日はどうもありがとうございました」という、後日におけるくりかえしのあいさつを韓国人はしない。

(4) 「和」と「道理」：「和」が日本人にとって個人の行動を決めるさいの判断基準の一つになっているのに対して、韓国人は儒教的要素の強い「道理」の価値観に基づいて自分のとるべき行動を決める。そして、「和」の価値観と「道理」の価値観のくい違いが、日本人と韓国人の間のコミュニケーションにも表れている。たとえば、日本的な断り方は、その理由を非常に短く抽象的に述べて相手を傷つけないように配慮する。しかし、韓国人は断るさい、くどいくらい言い訳をし、相手も納得するまで詳しい釈明を求める。

(5) 話題は人間がらみ：日本人が、自分の気持ちを自然に託して、終始一貫相互間の意志疎通をはかる習慣があるのに対して、韓国人は日常生活の話題においても人間がらみの話題が最優先される。

(6) “親密さ”の距離：日本人は個人間の距離が遠く、親や親友に対しても自分を「一般的な表現」の程度にしか表さないのに対して、韓国人は自分をさらけ出してつきあう。また、日本人は他人への身体接触があまりないのに比べ、韓国人は初対面や再開や別れの時握手をするなど、身体接触によって感情表現を行う習慣を持っている。

(7) 売りことばに買いことば：日本人は以心伝心や察しによるコミュニケーションを好むのに比べ、韓国人は言葉を最高のコミュニケーションとするため言葉の効力が強い。それ

は、買い物の場面においてよく表れる。たとえば、物の買い手は値切ろうとし、売り手は高い値段で売ろうと、互いに説得しあう。まず、商人が「잘 해 드릴게 (よくやって差し上げますよ)」と決まり文句を言い、それに対して買い手は「얼마까지 주시겠어요? (いくらまでにしてくれますか)」と交渉が始まる。「만원에 드리지, 만원이면 거저야 (一万で上げますよ。一万ならただであげるようなものだよ)」

(8) 父母にも敬語：日本人は身内を低く待遇することによって、相手に対する敬意を表すが、韓国人は自分の目上の人に対しては第三者の有無にかかわらずつねに敬語を用いる。それは、親に対しても同様である。

사장님께서는 오늘 귀사로 가신다고 말씀하셨습니다

(社長様は、きょう貴社の方へいらっしゃるとおっしゃいました)

(9) 自国語への誇り：日本人が外来語に寛大であるのに比べ、韓国人は外来語を認めることは民族のアイデンティティを失うことを意味すると同時に異文化、異民族への精神的屈服だと考えることが多い。自国語をどの言語よりも優れていると信じ、「純粋な」言葉を保つべきごとく、「国籍不明の言語濫用ははじめるべきこと」と考える人が多い。とくに、日本の植民地時代に入った日本語を、朝鮮語に変える作業が独立後行われた。たとえば、「すし→^{치요밥}초밥 (酢めし)」、^{테이غم}「てんぷら→^{튀김}튀김 (あげもの)」、^{생선묵}「かまぼこ→^{생선묵}생선묵 (魚のムック)」、^{큰뿌리}「たくあん→^{큰뿌리}큰뿌리 (甘大根漬)」など。

(c) 「日本語と朝鮮語」「朝鮮語の世界」に見られる学習内容上の視点

以上見たように、第二章「朝鮮語の発想・日本語の発想」、第三章「日本語の特色と朝鮮語」、第四章「朝鮮語はどんな言語か」、第五章「韓国流コミュニケーション」の内容は、韓国・朝鮮語や韓国人の言語生活を日本語と日本人の言語生活と比較しながら、次のような共通点を指摘している。すなわち、①基底をなす文化 ②数詞の使い方 ③単語の共通性 ④語順やテニヲハの類似性 ⑤助詞の省略や主語なし文 ⑥指示代名詞の場所への依存度 ⑦言いきれない表現などである。しかし、①文字や発音 ②自分の意志表明 ③あいさつの仕方 ④お礼の仕方 ⑤敬語の使い方 ⑥親密度による身体接触の度合いなどについては、日本人との違う言語生活を行っている」と説明している。

その中には、漢語の共通性の問題、助詞の省略問題、話題が人間がらみであることについて、もっと詳しい検討が必要と思われるものもある。とくに、漢語については、漢字文化を共有している日本・韓国(朝鮮)・中国の三国の漢語の比較検討が必要と思われる。それは、朝鮮時代末期の近代化する過程で朝鮮人自ら取り入れた漢語と、植民地時代日本語強制によって使われるようになった漢語には、大きな差異があると思われるからである。しかし、日本語との言語上の共通性や違いを指摘しながら、韓国人の言語生活とコミュニケーション様式に見られる韓国人の発想や表現について説明を行ったことによって、日本人への韓国・朝鮮語にたいする関心を日常生活レベルで呼び起こすことに成功していると

言える。

そしてこれが、NHK文化センターで行った講座「日本語と朝鮮語」「朝鮮語の世界」の内容と対応しているとすれば、この講座について次のように言える。すなわち、渡辺がここで行った方法は、日本語と韓国・朝鮮語との言語のつながりや韓国・朝鮮人の生活感覚、人生観などを重視している点で、客観的に見れば、久野たちが提起した「より生活に密着したところからのアプローチ」を具体化したものであった。とくに、久野らが提起した①日本語と朝鮮語との言語の共通性を重視すること ②「隣のおじさんにでも気楽に話しかけられるような感じ」の会話 ③「朝鮮人の人生に対する姿勢…考え方の基本になっている小説や物語」を教材として採用すること ④日常生活に触れることのうち、①②④に重点をおいて具体化していたと言える。

渡辺が久野らの座談会を意識していたかどうかは、わからない。また、この渡辺の方法が日本人の韓国・朝鮮語学習の歴史の中でどのような位置を占めるのか、今は判断できない。しかし、少なくとも久野の「アプローチを見直し」たい発言を考えると、1970年代前半の“朝鮮語学習熱”の始まりの時代には、あまり一般的な方法ではなかったと推測される。この渡辺の試みは、開設後の「ハングル講座」の内容にも通じるところがあるように思われるので、今後検討したい。そのさい、その後も「ハングル講座」として続けられているNHK文化センターでの講座が、1994年4月現在も1-7のレベルで開講されているので、入門から中級・上級にすすむさいに内容構成がどのように変化しているのかも検討したい。とくに、フェミニズム、環境問題など今日の韓国でも一定の方向が出つつある社会的な視野からの日常生活のとらえなおしが、どのように位置づいているのか、『やさしいビジネス英語』や『国連英検』などとの関係でも興味深い。

(2)「朝鮮語講座」名称での開設決定と

NHK社会教育部による韓国・朝鮮語講座に関する会合

このように、講座開設にむけて努力をかさねてきたNHKは、1981年7月1日、NHK放送センター716本会議室において、外部の専門家を招いて韓国・朝鮮語講座にかんする会合を開いた。

出席者の一人である大村益夫によれば、この韓国・朝鮮語講座に関する会合の目的は、NHKとしては講座名を「朝鮮語」として1982年度から開設することを内部決定したので、「実施する場合の配慮点など協力を求めた」⁽¹⁴⁾ものだったという。また、同じく出席者である梅田博之と大江孝男によれば、韓国・朝鮮語教育の代表的な人をNHK社会教育部が呼んで意見を聴取したものであった。

NHK側の出席者は、NHK社会教育部長石田岩夫、同担当部長水上毅・永沢義臣、次長沢田秀徳・上野重喜、チーフディレクター長谷川博之、デスク栗林勇二郎のほか実務担

当者。外部からは、東京外語大A A研の梅田博之と大江孝男、早稲田大学の太田益夫、富山大学の梶井陟、大阪外国語大学の塚本勲の5名であった。⁽¹⁵⁾その時点までの5名の主な経歴は、私の知っている範囲では、およそ次のとおりであった。

梅田博之は、1931年生。東京大学文学部言語学科卒業。同大学院で言語学専攻。1965年、東京外大A A研の講師となって以来、同研究所。大学在学中、「要望する会」の呼びかけ人に名を連ねていた河野六郎からはじめて朝鮮語を学んだ。梅田は、現代韓国・朝鮮語の方言研究や韓国の国字問題の研究にたずさわり、日本語と韓国・朝鮮語の比較研究を進めていた。また、『朝鮮語の基礎』(テック 1967年)、『カドリール式朝鮮語1600』(文林書院 1971年)、『韓国語例文活用基本単語集I II』(東京三中堂1976年)など朝鮮語(韓国語)テキストを多く執筆し、1974年の東京外語大A A研主催の市民むけ「言語研修(朝鮮語)」を主宰し、金吉鎔、金裕鴻、金東俊らの協力を得てテキスト『朝鮮語「基礎文型」1, 2』を作成していた。そして、1971年4月以後、NHK国際放送局朝鮮語班で朝鮮半島むけの日本語初級講座を担当し、韓国・朝鮮語を母語とする人のための『やさしい日本語(ドリル篇)』(日本放送協会、1974年)、『새로운日本語(新しい日本語)』(韓国・螢雪出版社、1977年)などのテキストも執筆していた。⁽¹⁶⁾

大江孝男は、1933年生。東京大学文学部言語学科卒業。同大学院で言語学専攻。1966年東京外大A A研の講師となって以来、同研究所。大学3年(1953年)の時、河野六郎からはじめて朝鮮語を学んだ。テキストは、ラムステッド『A Korean Grammar』。また、在日韓国人からソウル方言を学びながら研究し、金裕鴻からも朝鮮語を学んだ。そして、71-73年には韓国の東南部地方の方言研究のため訪韓した。1967年、同研究所の最初の語学研修事業(実験期間)の朝鮮語研修を担当した他、早稲田大学語学教育研究所、東京都立大学人文学部、東京大学文学部などでも、朝鮮語講義を行った。主要論文に、「On the Indicative Endings in Modern Korean」(『言語研究』第34号、1958年)、「大邱方言におけるアクセントの型と長母音」(『言語研究』第69号1976年)、「朝鮮語と日本語」(岩波講座『日本語第12巻 日本語の系統と歴史』岩波書店1978年)、などがあつた。⁽¹⁷⁾

太田益夫は、1933年生まれ。早稲田大学卒業。東京都立大学大学院修了。早稲田大学教授。朝鮮文学者。1978年より早稲田大学語学教育研究所で朝鮮語を担当した。1970年、同人とともに、『朝鮮文学——紹介と研究』を創刊。主要論文に、「第2次世界大戦下における朝鮮の文学状況」「日本留学時代の李光洙」「金鐘漢について」「金龍済の軌跡」などがあつた。⁽¹⁸⁾

梶井陟は、1927年東京生まれ。東京府立第一師範学校本科卒業。1950年4月から55年3月まで、東京都立朝鮮人中学校で勤務。そこではじめて在日朝鮮人と出会い、彼らから朝鮮語や在日朝鮮人の歴史などを学ぶ。自ら市民講座などで韓国・朝鮮語普及に努める一方、「朝鮮語を考える」を『季刊三千里』に12回にわたって乗せ、日本人の韓国・朝鮮語学習

の歪められた歴史を正した。1978年、富山大学での朝鮮語・朝鮮文学コース開設にさいしてその主任教授となった。著書として『朝鮮人学校の日本人教師』（日本朝鮮研究所 1966年）、『わかる朝鮮語』（三省堂 1971年）などがあった。⁽¹⁹⁾

塚本勲は1934年大阪生れ。京都大学言語学科卒業、同大学院修了。当時、大阪外国語大学朝鮮語学科助教授であった。「大学における研究成果の一般社会への還元と、朝鮮語の普及、そしてこれを基盤としての日朝友好運動の推進」を目的に開いた「猪飼野朝鮮図書資料室」（1977年12月、一般公開した）の代表を勤めていた。同資料室では、韓国・朝鮮語普及のために市民講座や電話講座を主催したほか、「大学における朝鮮語講座設置及び増設の要望書」を毎年多くの大学に出していた。訳書に『ユンボギの日記』などがあった。⁽²⁰⁾

この会合の内容については、現在、復元できないが、重要な会合と思われるので、今後の作業としたい。

（3）再燃した名称問題

しかし、この会合の3日後の7月4日にまた、名称問題がもちあがった。韓国の有力紙『朝鮮日報』東京特派員が、NHKの「朝鮮語」の名称による開設方針を韓国国内に伝えたことが直接の原因であった。すなわち、東京特派員・李度珩^{イ・ドヒョン}は、『韓国語강좌』를 『朝鮮語강좌』로（「韓国語講座」を「朝鮮語講座」に）と題して、「日本放送協会（NHK）が1982年4月1日から『朝鮮語講座』という名称で韓国語講座を開設する計画である」と報道した。また、彼はその報道の3日後の7日同紙に、「日 NHK의 講座호칭 不当性은 시정돼야 하다（日本NHKの講座名称の不当性は直さなければならない）」と題して、「韓国は政府や民間を問わずこの機会にNHK放送当局の『朝鮮語』講座名称の不当性を指摘、適切な措置を求める必要がある」と、韓国政府や国民に講座名称問題を訴えた。そして、翌8日には、『朝鮮日報』社説に、「排日感情의 自招——日 NHK의 講座호칭을 駁한다（排日感情の自招——日本NHKの講座名称に反駁する——）」が掲載された。⁽²¹⁾これを受けて、日本国内でも7日、民団も全国団長会議で「今後あらゆる手段をもって『韓国語』ないし『ハングル語』という名称で講座を開設するよう働きかけていく」⁽²²⁾と表明。9日には、駐日韓国大使館の金鐘禹^{キム・ジョンホ}公使と崔悦洵^{チェ・ヨクソン}文化院長がNHKを訪問して、「韓半島人口の3分の2が韓国語として定着している事実と、朝鮮語でない韓国語で講座を実施すべき」⁽²³⁾と申し入れを行った。

さらに21日には、韓国KBS（韓国放送公社）李元洪^{イ・ウォンホン}社長がNHK坂本会長を訪問。

「歴史的に韓国という用語は、大韓帝国の国号から由来しているもので、日本で朝鮮と呼ばれるようになったのは、日本が植民地統治の方便として、大韓帝国という国号を廃止し、使用したところから生まれた過去の不幸な歴史のなかに残っている用語」⁽²⁴⁾であることを強調。「講座名称を『朝鮮語講座』にしようとするのは、意図的に両国の関係を悪化させよ

うとするものだ」として、「講座名を『韓国語』とするよう」求めた。⁽²⁵⁾

この二つの申し入れによって、名称問題は日本国内での討論から外交問題になった。そして、大村によれば、7月1日の会合の前提になっていたとされる「朝鮮語」としての開講が、撤回された。⁽²⁶⁾『統一日報』の報道によれば、金公使の申し入れに対して田中武志放送総局長は、「まだはっきりと決まったわけではない。このプログラムが韓日両国の友好関係に傷がつかないように十二分に考慮し、慎重に進めたい」⁽²⁷⁾と述べた。また、李KBS会長に應對した坂本NHK会長は、「『外国語教育講座』の目的が国際親善にあるので、『朝鮮語講座』とはしないことを確約する」⁽²⁸⁾と答えた。

当時の古村文左チーフプロデューサーによれば、当時の状況から「そのままでは相互交流のためにならないと判断した」からだと言う。

(4) 「안녕하십니까? ~ハングル講座~」としての決定と開設準備

① 名称問題にかんするさまざまな提案

「朝鮮語」という名称が撤回されたという報道の後、名称問題をめぐって現実的な妥協案も含めて、再度討論がなされた。

韓国国内でも、ソウル大学言語学者・李炫縵のように、「朝鮮」という言葉に真意を示す意見も少数ながらあった。すなわち、李は、「朝鮮語」と「韓国語」の問題は、第一次的な原因が南北分断にあり、第二は「韓国」の解放後、「北韓」では「朝鮮」を固持したが、韓国では「朝鮮」という用語を禁忌語のように使わなくなったことにあるとしながら、今度のNHKのことをきっかけに『朝鮮』という言葉を取り戻す必要がある、⁽²⁹⁾と述べている。また、「名称いかにあれ、NHKの朝鮮語(韓国語)講座放送は、ぜひ実現してほしい」と、名称はともかく講座開設をはやく実現してほしいとの意見も出た。⁽³⁰⁾

しかし、1982年1月21日、NHK田中武志放送総局長が記者会見を行い、講座開設の見送りを正式に表明した。同総局長は記者会見で、「番組の名称について韓国と朝鮮民主主義人民共和国それぞれから強い要望があって一致点が見いだせない。より慎重に考えたい」ので、『朝鮮語講座』の開設は四月の番組改編で見送る」と述べた、と翌日の『朝日新聞』は伝えている。

そして、翌年1983年3月、『朝日新聞』「論壇」において、再び名称問題をめぐって論争が起きたが、ここでは、現実的な妥協案も含めて論議された。すなわち、徐龍達「『韓国・朝鮮語』を統一用語に」(3月15日)、大村益夫「呼称『朝鮮語』に正当性」(3月25日)、李度珩「『朝鮮』を拒否し『韓』を名乗る」(4月4日)、宇田川浩「『韓国・朝鮮語』で講座を」(4月8日)、李聖雄「『コリア語』を呼称に」(4月9日)、である。

そこで、徐は、「韓は民族の名称であり、朝鮮は国名である。いずれを欠いてもわが民族・国家は成り立たない」と、韓国の代表的な思想家の一人である咸錫憲(ハムソクヘン)の言葉を引用しながら

ら統一用語として「韓国・朝鮮語」を主張。これに対して大村は、「『朝鮮』という語は、歴史・文化的な総合的呼称」であるとし、韓国が「朝鮮」を使わなくなったのは、「南北の対立が決定的となった一九五〇年に、韓国国務院の告示によって『朝鮮』を『韓国』に改称した」ことによるものであり、「政治に押しつぶされた『韓国・朝鮮語』という呼び方は、日本での言語名としてはふさわしくない」と、反論した。この大村の意見に対して李度珩は、日本が「一九一〇年の併合にともなう勅令三一八号で『韓国の国号を改めて朝鮮と称す』ことにした」と述べながら、「日本に奪われた名を取り戻す」ために「韓」を主張すると、大村に対して反論した。そして、戦後10年間のソウル滞在の経験をもつ宇田川は、3人の論争をふまえ、「朝鮮語」を嫌う韓国人を理解し、韓国と朝鮮とを対等に扱う意味で暫定的に「韓国・朝鮮語」に賛成する、と述べた。さらに、これら4人の論争をふまえた李聖雄は、「両民族が漢字文化を共有していること」によって、「政治的偏見の入り込む余地も生じている」として、英語の表現である「コリア語」を提案した。

②学校教科書検討と「안녕하십니까?～ハングル講座～」としての開設決定

一方NHK内部では、内容上の共通点をどのように作れるかという視点からか、韓国の「国民学校」=小学校教科書と在日朝鮮人の民族学校教科書の比較を行い、南北での言葉のちがいについて検討した。その結果、「韓国では外来語を含む内容が多い反面、北朝鮮では政治的な内容が多く含まれていたが、基本的にはそれほど違わなかった」⁽³¹⁾と、当時の講座開設の準備にたずさわった古村文左チーフプロデューサーは後に述べている。また、在日韓国・朝鮮人の本音を聞くために、関西にも出かけ話を聞いたが、関西の在日韓国・朝鮮人の多くは、「講座開設には大きな意味がある。たいへん期待している」⁽³²⁾と理解を示していたと言う。そして、「講座」開設への希望者についてアンケート調査も行った⁽³³⁾が、希望者が多かったと、古村は言う。

このような経過のなかで、4月20日、NHKは1984年度に講座を開設することを明らかにした。すなわち、NHK川口幹夫放送総局長が記者会見を行い、「来年四月から開設する方針で、具体的な準備にかかる」と、翌日の『朝日新聞』が伝えた。そして、講座名については「韓国、朝鮮の名を使わず、別の名称を考えたい」とし、「『アンニョンハシムニカ』(こんにちはの意味)、あるいは『ハングル』『コリア語』などが候補に上がっている」と、同新聞は伝えている。

名称が決まったのは、それからさらに5ヶ月経った、9月21日であった。81年7月の会合から2年2ヶ月後のことである。21日、NHKは記者会見で、講座名を「안녕하십니까? (ハングル講座)」にすることを公表し、翌日の『朝日新聞』をはじめ各紙がこれを報道した。

③講師とゲスト選定

講座を直接担当するディレクターには、中野道夫・平松達一郎・永沢昭道の三人が決まった。そして、KBS=韓国放送公社と取材協力協定が結ばれた。3人のディレクターの相

談により、テレビの講師には梅田博之が決まり、梅田の推薦によりラジオの講師に大江孝男が決まった。

講師として梅田が決まった理由については、大きく言って二つの考え方がありうるだろう。ひとつは、梅田が「要望する会」「求める会」のいずれにも関係していなかったことを重視する考えである。この点については、平松も「梅田先生は政治的に関係していなかった」ことが講師として依頼する理由のひとつだったと述べている。もうひとつの考え方は、梅田の韓国・朝鮮語研究者・教育者としての業績によるものとする考え方である。平松と永沢も、「研究実績がある」「東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所の所長で朝鮮語研究の権威者」だと、それを理由として挙げている。梅田は講師に選定された時点まですでに、韓国・朝鮮語テキストを5冊執筆していた。また、韓国・朝鮮語を母語とする人たちのための日本語テキストも執筆していた。さらに、日本語と韓国・朝鮮語の比較研究をすすめる、83年に『韓国語의 音声学的研究—日本語와의 対照를 中心으로』(韓国・螢雪出版社)で啓明大学の博士号を取得した。

私には、この両方の点が、梅田が初代講師となった理由だと思われる。講師選定の問題はきわめてデリケートではあるが、「ハングル講座」の内容に直接かかわることなので、避けて通れない。今後、一人一人の研究者にそくして教育内容の視点から検討して行きたい。

ゲストはそれぞれの講師の意見により、金東俊・呉美善(テレビ)、金裕鴻・石花賢(ラジオ)が決まった。4人とも韓国出身で、「ソウル言葉」を話す人であった。これは、当時の古村チーフプロデューサーが言う、「ソウルで使われている言葉を基本にしながら、南北両方を入れていく」⁽³⁴⁾方針によるものであったと思われる。また、梅田講師や大江講師も「ソウル言葉を中心に考えたので、ゲストもソウル出身やソウルで育った人」⁽³⁵⁾を選んだと言っている。ゲストの経歴は、次のとおりであった。

金東俊は、1924年ソウル生まれ。1961年12月、韓国政府から東京韓国学校に教員として派遣され、「国語」と「国史」を4年間教えた。帰国後、再び来日して、66年駐日韓国公報館ではじめて開講された「韓国語講習会」で韓国・朝鮮語を教えた。そして、日韓親和会主催の「韓国語講習会」でも10年間教えた経験をもっていた。また、梅田博之の仕事上の協力者でもあった。1970年、早稲田大学大学院で日本文学を専攻。著書に『实用韓国語1』(社団法人 日韓親和会 1976年第3版)があった。⁽³⁶⁾

呉美善は、1955年ソウル生まれ。1977年、韓国外国語大学日本語科卒業後、お茶の水女子大学博士課程で日本語文法を勉強していた。⁽³⁷⁾

金裕鴻は、1933年ソウル生まれ。明治大学大学院修士課程で勉強した後、NHK国際局で「朝鮮語放送」を担当するほか、早稲田大学語学教育研究所で講師を努めていた。また、高淳日の「くじゃく亭」での「朝鮮語講習会」など多くの教室で講師を勤め、大江に韓国・朝鮮語を教えた人でもあった。⁽³⁸⁾

石花賢は、1953年、京畿道仁川生まれソウル育ち。梨花女子大学校を卒業後、韓国放送公社（KBS）アナウンサーの経験を経て、当時NHK国際局「朝鮮語放送」のアナウンサーであった。また、東洋文庫、朝日カルチャーセンター、慶応義塾大学付設外国語学校で韓国・朝鮮語を教えた経験ももっていた。⁽³⁹⁾

註

- (1)この時期、民団も「韓国語講座」の早期開設を求める「要望書」をNHKに3回送っている。すなわち、「韓国語講座早期開設に関する要望書」（1978年）、「韓国語講座の早期開設に関する再要望」（1980年7月22日）、「NHKに韓国語講座に関する支援要望書」（同年11月5日）である。
- (2)矢作勝美「NHKに朝鮮語講座を」『季刊三千里』第18号 1979年5月
同 「六年ごしの要望」『季刊三千里』第29号 1982年2月
- (3)この講座について、「要望する会」事務局長・矢作の「NHKに朝鮮語講座を」の中間報告によれば、1979年4月4日、NHKを訪れ開設の見通しについて会談を行ったさい、「NHK文化センターの『日本語と朝鮮語』講座のことがとりあげられた」と言う。そして矢作は、NHK側が「開設の時期については、NHKの自主的な判断にもとづき、決断したいと考えている」こととともに、この「日本語と朝鮮語」講座について「これも注目すべきことのひとつであった」と、積極的な評価を行っている。
- (4)矢作勝美「NHKに朝鮮語講座を」『季刊三千里』第18号 1979年5月 187ページ
- (5)『くじゃく亭通信』編集部『くじゃく亭通信』第21号 1979年3月1日 4ページ
- (6)前掲『くじゃく亭通信』編集部『くじゃく亭通信』第21号 5ページ
- (7)前掲『くじゃく亭通信』編集部『くじゃく亭通信』第21号 4ページ
- (8)東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所『朝鮮語「基本文型1」』『朝鮮語「基本文型2」』1974年。このテキスト作成に当たっては、金裕鴻・金東俊両氏も草稿を読み、内容の検討や改善の作業に参加している。
- (9)渡辺吉鎔+鈴木孝夫『朝鮮語のすすめ』講談社現代新書 1981年 3ページ
- (10)同上
- (11)同上
- (12)前掲 渡辺吉鎔+鈴木孝夫『朝鮮語のすすめ』35ページ
- (13)前掲 渡辺吉鎔+鈴木孝夫『朝鮮語のすすめ』78ページ
- (14)大村益夫「NHKへの手紙」『ぱらむ (바람)』第94号 1984年1月 3ページ
- (15)大村益夫「NHK『ハングル講座』が始まるまで」『早稲田大学語学教育研究所三十周年記念論文集』1992年 298ページ
- (16)東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所創立30周年記念号『梅田博之教授一

年譜と著作目録』1994年および梅田博之氏からの聞き取りによる。

- (17) 大江孝男氏からの聞き取りによる。
- (18) 大村益夫訳注『韓国語対訳叢書 1 童話篇 火の犬』高麗書林 (1992年) の奥付による。
- (19) 梶井陟『朝鮮人学校の日本人教師』日本朝鮮研究所 (1966年) の奥付および富山大学人文学部朝鮮語・朝鮮文学コース編『富山大学附属図書館蔵梶井文庫目録』(1994年) 中表紙による。
- (20) 玉城繁徳「朝鮮語電話講座について」『季刊三千里』第15号 (1978年8月) 102-105ページおよび塚本勲・金静子『旅行者のため朝鮮語会話』創元社 (1988年) の中表紙、塚本勲・北嶋静江『速成朝鮮語会話』金星堂 (1990年) の奥付による。
- (21) 韓国では、『朝鮮日報』のほかに『東亜日報』『中央日報』『韓国日報』『京郷新聞』『ソウル新聞』でも「講座」名称を「韓国語」にすべきだと反発した。これらの報道は、日本の新聞『朝日新聞』(7月7日)、『読売新聞』(7月7日、7月10日)によって日本に伝わった。
- (22) 「民団全国団長会議開く NHK講座あくまで『韓国語』で」『統一日報』
1981年7月8日
- (23) 「日 NHK 프로 韓国語 강좌 명칭 “韓日友好” 참작 결정」
『朝鮮日報』1981年7月10日
- (24) 「講座名称『朝鮮語』でなく」『統一日報』1981年7月24日
- (25) 同上
- (26) 前掲 大村益夫「NHK『ハングル講座』が始まるまで」303ページ
- (27) 前掲「日 NHK 프로 韓国語 강좌 명칭 “韓日友好” 참작 결정」
- (28) 前掲「講座名称『朝鮮語』でなく」
- (29) 李炫縵「한국어와 조선어의 서글픈 싸움」『한글 새소식』한글학회
1981年9月5日 2-3ページ
- (30) 佐久間英明「NHKの朝鮮語講座放送の中止について」『むくげ通信』第71号
1982年3月
- (31) 古村文左氏からの聞き取りによる。
- (32) 同上
- (33) このアンケート調査結果は、NHK放送文化研究所篇『日本人の学習—成人の学習ニーズをさぐる—』第一法規 (1990年) に載っている。
- (34) 古村文左氏からの聞き取りによる。
- (35) 梅田博之・大江孝男両氏からの聞き取りによる。
- (36) 金東俊氏からの聞き取りによる。

- (37) NHK『ハングル講座』テレビテキスト1984年度4,5月号 5ページ
 (38) 金裕鴻氏からの聞き取りによる。
 (39) 石花賢氏からの聞き取りによる。

5. 「안녕하십니까? ~ハングル講座~」出発—内容と反響

(1) 第一年度の内容

「안녕하십니까? 『お元気でいらっしゃいますか』ながらくお待ちいただいた『アンニョンハシムニカ~ハングル講座~』が開設のはこびとなりました。

人と人のコミュニケーションは言葉からはじまります。お互い理解し合うにはまず、相手の話す言葉を理解することが先決です。この講座は1年間でハングルを読み、書き、話せるようにすることをめざしてカリキュラムが組まれています。⁽¹⁾

このあいさつをかかげた『NHKテレビ안녕하십니까?—ハングル講座—』『NHKラジオ안녕하십니까?~ハングル講座~』テキストが、1984年4月1日付けで発行され、NHKの韓国・朝鮮語講座がスタートした。

NHK内部での最初の構想から20年、高淳日の投書から10年、「要望する会」の署名運動から8年の歳月がたっていた。また、朝鮮で日本語が「公用語」とされた1907年から77年後、「国語」とされた1911年から73年後、朝鮮が独立し朝鮮語がふたたび国語となった1945年から39年後のことであった。

放送時間は、テレビが日曜日午前7:30~8:00⁽²⁾の30分間（再放送/木曜日午後6:30~7:00）、ラジオが月—土曜日の毎日午前8:00~8:20の20分間（再放送/同日の午後11:00~11:20）であった。

① テレビ講座・ラジオ講座の位置づけと内容の概要

一年間の学習の目標は、テレビ・ラジオともに、「発音・文字の学習からはじめて、最終的に初級文法と日常会話の習得をめざします」⁽³⁾とされていた。しかし、テレビのテキストには「初心者」むけであることが示されていたのに対して、ラジオ用のテキストにはそのようなことは述べられていなかった。ラジオ講座を担当した大江によれば、「他のNHKの語学講座と同様に、ラジオでは実用的な初級の中級のレベルを考えた」とのことである。テレビ=初心者、ラジオ=初級の中級という守備範囲のちがいは、次のような1984年度の放送内容予定表にも表れていた。⁽⁴⁾

〈テレビ〉

4月：初心者が学ぶべき母音と子音の発音・文字と各種のあいさつ表現の練習。

また、子音同化・リエゾン・反切表の学習。

5月：発音・文字。名詞文の勉強。たとえば、「これは何々です」「これは何々ではありません」の言い方。

6月：名詞文のいろいろな表現を学習。「ある、ない、いる、いない」などの存在をあらわす表現。

7月前半：存在詞文のほか形容詞文、うちとけた親しみある表現。

7月後半－8月：年度初めに放送した文字と発音シリーズの再放送。

9－10月：動詞文の学習。文の構造を中心に解説。

11－12月：いろいろな種類の動詞文とそれを展開したさまざまな表現を学習。

1－3月：12月までの学習を発展させ、応用会話を重ね、基礎を充実させる。

〈ラジオ〉

4月：母音・子音の発音の徹底的な練習。単語・対話練習を取り入れるほか、あいさつの言葉によって、目と口を慣らしていく。

5月：より複雑な内容。「ここ、そこ、あそこ、どこ、があります、がありません」などの構文。

6月：動詞の使い方の学習。

7月：動詞の基本的な活用。

8月：再放送。

9月：動詞の複雑な使い方と民話などの講読および辞書の使い方の指導。

10月：動詞の活用形と、形式的・補助的名詞のつながり。

11－12月：動詞の連体形と補助的名詞のつながり。

1－3月：これまでの学習の整理と復習および実践的な練習を重ねる。

テレビでは、前半には、「初心者」むけの「発音・文字」や「あいさつ表現」「名詞文」「存在詞文」に重点がおかれ、後半にさしかかる9－10月になって「動詞文の学習」がはじめて導入され、1-3月で「基礎の充実」がうたわれている。これに対して、ラジオでは、「ここ、そこ、あそこ、どこ、……があります、……がありません」などの構文は5月で終了し、「動詞の使い方」(6月)、「動詞の基本的な活用」(7月)、「動詞の複雑な使い方」(9月)が重視されている。同時に、9月から「民話などの講読」「辞書の使い方」が配当されて、1-3月では「実践的な練習を重ね」ることに中心がおかれていた。

②テキストの具体的な内容

(a) 文字と発音および漢字の読み方

(イ) 発音表示の順次性

文法や語彙の面では共通点の多い日本語と韓国・朝鮮語の間でもっとも大きなちがいは、文字である。文字については、テレビが一文字ずつ丁寧に説明されているのに対して、ラジオは「ガガ表」(反切表)で一括した説明となっている。これは、テレビが画面を通じての学習であるのに対して、ラジオは耳を通じてしか学習できない点によると思われる。

〈①ハングル+カタカナ+発音記号 ②ハングル+発音記号 ③ハングルのみ〉とい

う発音表示の扱いの順次性は、テレビ・ラジオでほぼ共通しているが、多少のちがいが見られる。本文は次のようになっている。

(i) ハングル+カタカナ+発音記号

第一段階は、ハングル文字の上にカタカナをふり、その下に発音記号を表記する方法。

ミアンナムニダ クエンチヤナムニダ
미안합니다. 괜찮습니다.

[mianhamnida] [kwentʃ'ans'umnida]

テレビは4-8月、ラジオは4-7月と、ラジオが1カ月早く終了している。

(ii) ハングル+発音記号

第二段階は、ハングルの下に発音記号のみをふる方法。

매운 것도 좋아 하세요? 네 좋아 합니다.

[meungot'o tʃo:wa hasejo] [ne: tʃo:wa hamnida]

テレビは9-3月、ラジオは8-10月。ラジオは、テレビより5カ月早く終了している。

(iii) ハングルのみ

第三段階はハングルのみである。これはテレビにはなく、ラジオのみ11月から採用されている。

어서 오세요. 타나카 씨, 잘 오셨읍니다. 오래간만입니다.

しかし、「練習問題」(テレビ)や「復習と練習」(ラジオ)は、本文とは少し異なる。すなわち、テレビの「練習問題」では、4月から新出単語をのぞいてほとんどハングルのみとなっている。ラジオの「復習と練習」では、4-10月までハングル+発音記号、11-3月までハングルのみとなっている。とくに、ラジオでは、「単語による発音練習」欄に多くの単語を取り入れ、発音練習を細かく行っている。

以上のことから、ラジオでは11-3月の5カ月間で、ハングルの読み方の基本ができることを期待していたと推測される。また、テレビでは、本文にはハングルのみはないが、4月から練習問題にハングルのみの単語や文章を載せており、最初から読み方の学習もできるように工夫されている。

(ロ) 漢字の読み方の比較

テレビでもラジオでも、漢字表示が可能な韓国・朝鮮語の単語には、漢字表示が付けられているものが多かった。

안녕히 [annjɔŋ(h)i] <お元気〔安寧〕に>/ 덕분에 [tɔkp'une] <お蔭〔徳分〕で>
감사 <感謝>/ 사실 <事実>/ 태도 <態度>

매화 [mɛ:hwa] <うめ〔梅花〕>/ 백합 [pɛk'ap] <ゆり〔百合〕>

こうした表示によって、安=an, 寧=jɔŋ, 徳=tɔk, 感=kam, 謝=sa, 事=sa, 実=sil, 態=te, 梅=mɛ, 花=hwaなど、日本でも使われている漢字を韓国・朝鮮語読みにも親しむことができた。韓国・朝鮮語においては、一部の例外をのぞくと一つの漢字には一

とおりの読み方しかない。したがって、単語の漢字表記によって漢字の韓国・朝鮮語読み慣れる機会を作ったことは、発音習得を助ける意味をもったと思われる。

(b) 文体

テキストは全体が会話で構成されているので、文章体ではなく文体も会話体になっている。ただ会話の相手によって使う文体がちがうので、かしまった丁寧な言い方、親しみのある丁寧な言い方、子どもに対する言い方を扱っている。しかし、テレビとラジオを比べると、次のようないくらか違いが見られる。

(イ)－습니다 (－スムニダ) 体

かしまった丁寧な言い方である「－습니다」体が、第一段階。

진달래입니다 (チンダルレです), 물리학입니다 (物理学です)

テレビでは4-5月は、ほとんどがこの文体であり、ラジオもこの文体を基本にしている。

(ロ)－어요 (オヨ) 体

うちとけた丁寧な言い方である“어요 (オヨ)”体が、第二段階。

우표있어요? (切手ありますか。)

어디 갔다 오셨어요? (どこに行ってきましたか)

テレビでは、6月から“있어요 (イッソヨ)”“없어요 (オッソヨ)”が登場しはじめ、8月からは“오세요 (オセヨ)”“해요 (ヘヨ)”“좋은데요 (ジョウンデヨ)”などうちとけた表現が多くなる。ラジオでは5月から使われているが、10月の朴家の一日の生活ぶりや近所のおばさんとの会話を設定したなかで多く取り上げられている。

(ハ)－어 (－オ) 体

目上の人子どもに対して使う“어 (－オ)”体が第三段階である。テレビにはないが、10月からラジオで取り入れられ、“오너라(オノラ)”“먹어라(モコラ)”“보아라(ボアラ)”などが出てくる。

(c) 日本語と韓国・朝鮮語の文法構造の共通性

テレビ4.5月号の「はじめに」には、韓国・朝鮮語と日本語は文法構造が似ていることについて、次のように説明されている。

「皆さんがこれからこの講座で学ばれる言葉は日本語に非常によく似ています。世界にはいろいろな言語がありますが、文法構造という点からすると、これほど類似した言語も他にないだろうと思います。」⁽⁵⁾

そして、次の例文をあげている。

「목욕물이 미지근하니까 불을 더 때세요.

オフロノ湯ガ ヌルイカラ 火ヲ モット タイテ下サイ⁽⁶⁾」

また、「文をつくっている構成成分の構造も日本語によく似て」いるし、「『体言』にテニヲハをつけて他の語との関係を表し、『用言』の構造も日本語とほぼ同様⁽⁷⁾」であることが、

説明されている。この文法構造の共通性は、本文で、文章を作っていく中でも同様に説明されている。たとえば、「『N1はN2です』(N=名詞)にあたる文型は『N1은 N2입니다』です」である。

ラジオテキストでは、文法の共通性について説明はしていないが、「練習文例」に次のようなものがある。

「나는 학생입니다. <私は学生です>」

「나는 김인수입니다. <僕はキム・インスです>」

「우리들은 일본사람입니다. <我々(私たち)は日本人です>」

(d) 共通の語彙に対する留意

(イ) 漢字熟語

韓国・朝鮮語で使われている単語のうち約7割が漢字語だと言われている。そこで、多くの漢字語を使う日本語を第1言語とする学習者にとっては、共通の漢字語を学ぶことは語彙をふやすうえで一つの有効な方法であると言える。「ハングル講座」テキストでは、先に述べたように、漢字での表記可能な単語については漢字表記を紹介していた。その中には、日本語の漢語と一致するものと一致しないものがあった。

まず、日本語と一致するものには、次のようなものがある。

テレビ:

(学問) 古代, 古典, 小説, 国文学, 単語, 発音, 文法, 基本, 水準, 理由, 手段, 順序, 心理, 普通

(教育) 専攻, 入学, 中学生, 先生, 授業, 講義, 質問, 試験, 成績, 教授室, 奨学金

(文化) 新聞, 映画, 写真, 国立博物館, 会館, 公園, 出版者, 原稿

(交通・通信) 車, 横断歩道, 電鉄, 地下鉄, 特急, 飛行機, 到着, 葉書, 電話

(ビジネス) 用件, 予約, 窓口, 身分証, 提示, 会社, 職場, 従業員, 事務員, 課長, 部長, 社長, 会議, 出張, 月給

(建設・商業) 道具, 技術, 工事, 建物, 市場, 百貨店, 茶房

(衣) 帽子, 衣服, 洋服, 雨傘, 運動靴

(食) 菓子, 紅茶, 麦酒, 食事, 定食, 洋食

(健康) 散策, 薬屋, 医師

(社会生活) 結婚, 家族, 安否, 親切, 相談, 経済, 政治家, 制度, 有名

(時間) 食後, 午後, 豊年, 年末, 将来

ラジオ:

(学問) 歴史, 小説, 心理, 推理, 現代科学, 数学, 事実, 内容, 理解, 原因, 疑問, 結果, 状態, 準備, 手段, 意義, 連続, 普通, 理想, 区別, 若干, 速度, 弾力

(教育) 専攻, 入学, 学生, 大学生, 指導教授, 教室, 教科書, 参考書, 宿題, 発音, 学

力, 卒業式, 学年末, 留学, 教育功労者

(文化) 伝統, 新聞, 放送, 記者, 写真, 印刷, 打字機, 閲覧室, 博物館, 動物園, 博覧会, 展示会, 音楽会, 歌手, 雑誌, 週刊誌, 試合, 応援歌

(交通・通信) 自転車, 汽車, 電鉄, 駅, 郊外線, 急行, 交通信号, 飛行機, 空港, 巡行, 運送, 葉書, 封筒, 小包, 速達, 祝電, 至急電報, 船便, 飛行便, 国際電報, 電話, 通話, 中継放送

(ビジネス) 会社, 会社員, 労働者, 係長, 官吏, 事務室, 業務, 会議, 出席, 出勤, 勤務, 出張, 就職, 給料, 書類, 手帳, 広告, 手続, 取扱, 機会, 有利, 利益, 過労, 通訳

(建設・商業) 堤防, 工場, 石油, 機械, 品物, 作業, 最新型, 金銀, 現金, 送金, 銀行, 銀行員, 看板, 包装, 価額票, 保証書

(衣) 外套, 帽子, 運動靴, 日用品, 繊維, 染料, 象牙

(食) 冷麺, 麦茶, 菓子, 料理, 飲食店, 食堂, 洋食, 食事

(住) 食卓, 椅子

(健康) 空気, 気分, 安心, 不快, 憂慮, 食欲, 消化, 微熱, 危険, 薬局, 病院, 診療, 診察, 治療, 精密検査, 肺炎, 盲腸炎, 打撲傷, 糖尿病, 手術, 回復, 退院, 運動

(社会生活) 女性, 夫婦, 家族, 恩師, 役割, 立場, 独立, 安否, 関心, 好意, 紹介, 談話, 注意, 感謝, 表彰, 祝賀, 謝罪, 覚悟, 用事, 連絡, 行事, 事業, 協力, 能力, 努力, 活力, 迫力, 胆力, 活躍, 希望, 約束, 協約, 義務, 勧告, 合意, 決議, 物価, 税金, 納入窓口, 法案, 権力, 圧力

(時間) 時計, 午後, 後半, 新年, 春分, 来年, 未来, 元来, 例年, 毎日, 予定, 到着

(空間) 農村, 都会地, 海岸, 山岳, 市内, 市外, 野外, 外部, 故郷, 住所, 入口, 階段, 座席, 指定, 外国, 田園風景, 背景

また, 日本語と一致しないものには, 次のようなものがあつた。

テレビ:

(教育) 工夫 (勉強)

(文化) 馬 (将棋の駒)

(交通・通信) 便紙 (手紙), 郵票 (切手)

(建設・商業) 冊房 (書店), 物件 (品物)

(衣) 掌甲 (手袋)

(健康) 安寧 (元気), 歯菜 (歯みがき粉), 無故 (無事), 身数 (運勢), 看護員 (看護婦)

(社会生活) 宅内 (ご家族), 親旧 (友人), 約婚 (婚約), 人事 (あいさつ), 歳拝 (新年のあいさつ), 徳分 (おかげで), 付託 (頼み), 相議 (相談), 複雑 (混雑)

(時間) 年歳 (おとし), 再修 (浪人), 于先 (先ず), 作定 (つもり)

(空間) 近処 (近所), 景致 (景色)

ラジオ:

(交通・通信) 売票所 (切符売場), 予売票 (前売り券), 表示版 (標識版), 標示 (標識),
複雑 (混雑)

(食) 葉茶 (麦茶), 菜蔬 (野菜)

(健康) 安寧 (元氣), 病患 (病氣), 痛症 (痛み), 毒感 (流感), 問病 (病氣見舞い), 完快 (全快)

(社会生活) 参席 (出席), 相議 (相談), 問議 (問い合わせ), 弄談 (冗談), 不便 (不自由), 念慮 (心配), 祖上 (先祖)

(時間) 年歳 (年齢), 還甲 (還暦), 秋収 (秋の収穫)

(空間) 和暢 (のどかな)

韓国・朝鮮語の漢字熟語で日本語の漢字熟語と一致しないものには、「冊房」「景致」「便紙」のように、中国起源の熟語で韓国・朝鮮では定着したが、日本では定着しなかったものがある。また、「工夫」「人事」のように同じ単語でありながら意味が異なるものがある。そして、一致するものには、「学生」「駅」「象牙」のように中国起源で日本でも韓国・朝鮮でも定着したものや、「百貨店」「心理」「地下鉄」「新聞」「通訳」のように日本から韓国・朝鮮に入った日本製漢字熟語、「冷麺」のような韓国・朝鮮製漢字熟語で日本に入ったものがあった。

(ロ) 漢字熟語以外の共通語彙

日本語と韓国・朝鮮語との間には、漢字熟語以外にも共通語彙がある。「김치=キムチ」「갈비=カルビ」「찌개=チゲ」「비빔밥=ピビンパ」「총각=チョンガー=独身男性」などのように韓国・朝鮮語が日本で定着したものや、「우동=うどん」「오뎅=おでん」のように日本語が韓国に定着したものもある。テキストには、「김치=キムチ」「갈비=カルビ」「찌개=チゲ」「비빔밥=ピビンパ」などが登場する。

(e) 場面設定をふくむ本文の内容と特徴

<テレビ>

場面設定は、日本人と韓国・朝鮮人との交流を基本としている。とくに日本人が韓国・朝鮮人の知り合いを通じて韓国・朝鮮の生活文化やことばを学ぶという場面が多い。また、買い物、病院での診察、道を尋ねる、家族関係、会社の出勤などもある。

日本人として、「前田」「山田」「上田」が、韓国・朝鮮人として、「김대식 (金大植)」「김철수 (金哲洙)」「박정수 (朴正洙)」「정 (鄭)」が登場している。

(イ) 4/5月: 朴順伊, 金大植, 前田, 山田など韓国 (朝鮮) 人と日本人が登場。

*あいさつ: 会った時と別れる時

안녕하십니까? (こんにちは)

안녕히 계십시오. (さようなら—その場にとどまる人に対して)

안녕히 가십시오. (さようなら—その場を立ち去る人に対して)

* 自己紹介:

저는 야마다입니다. (わたしは山田です。教育大学の学生です)

나는 외국어대학 김대식입니다. (わたしは外国語大学の金大植です)

(ロ) 6/7月:

* 家族関係の説明:

이산이 우리 어머니이시고 이 분은 우리 형님입니다.

(これが母でこれが兄です)

* 切手・電話・数詞・天気・辞書:

야마다 씨, 우표있어요. (山田さん, 切手ありますか)

김선생님, 전화입니다. (金先生, 電話です)

* 会社への出勤:

매일 회사에 나가십니까? (毎日会社へお出かけですか)

(ハ) 8/9月 (8月は復習):

* 道を訪ねる:

실례합니다. 말씀 좀 묻겠어요. (失礼します。ちょっとおたずね致します)

* 家族について聞く:

댁엔 식구가 몇분이십니까? (お宅はご家族が何人ですか)

* 電話のかけ方:

여보세요, 문화출판사입니까? (もしもし, 文化出版社ですか)

* 食堂での対話:

여기 메뉴가 있군요. (メニューをどうぞ。何になさいますか)

* 文化交流史:

야마다씨, 이 불상은 삼국시대 것입니다.

(山田さん, この仏像は三国時代のものです)

이건 서울의 국립박물관에 있는 것인데 7세기 초 것입니다.

(これはソウルの博物館にあるものですが, 7世紀初めのものです)

쿄토 것도 아스카 (飛鳥) 시대 후기 것이니까 역시 7세기 것이 됩니다.

(京都のも, 飛鳥時代後期のものですから, やはり7世紀のものになります)

이것만으로도 옛날에, 문화나 기술이 그 쪽에서 일본으로 들어왔다는 것을 알

수 있군요. (このことだけでもむかし文化や技術がこちらから日本に入って来たという

ことがわかりますね)

(ニ) 10/11月：

* 山田さんが朴さんにハングルを教わる場面：

이번에는 이 단어 발음 좀 가르쳐 주세요.

(今度はこの単語の発音をちょっと教えてください)

* 朴さんと山田さんとの交流の中に、朝鮮の古典小説にかんする会話：

춘향전은 유명한 고대 소설의 하나예요. (春香伝は有名な古代小説のひとつです)

저도 한번 읽어 보고 싶은데요. (私も一度読んで見たいです)

도서관에는 그밖에도 심청전, 흥길동전 등 재미있는 옛날 소설책이 많이 있어요.

(図書館にはそのほかにも沈清伝, 洪吉童伝などおもしろい昔の小説がたくさんあります)

* 買い物・喫茶店：

치약도 사고 싶은데 어디 있죠. (歯磨も買いたいんですがどこにありますか)

차라도 한 잔 할까요? 그럼 다방으로 들어가죠.

(お茶でも一杯飲みましょうか。ではこの喫茶店に入りましょう)

(ホ) 12/1月：

* お正月の挨拶と遊ぶもの、伝統衣装：

새 해 복 많이 받으세요. (新年おめでとございます)

정월에는 무슨 놀이를 하십니까? (お正月にはどんな遊びをしますか)

여러가지 있지만 윷놀이가 제일 재미있어요.

(いろいろありますが、ユツ遊びがいちばんおもしろいです)

정월이라서 치마 저고리를 입으셨군요.

(お正月でチマ・チョゴリをお召しになったんですね)

* なお、中国語を勉強している朴さんに山田が“私もいっしょに勉強したいですわ”という内容があり、国名やその国の人の説明が出ているが、“일본・일본사람(日本・日本人)” “중국・중국사람(中国・中国人)” “독일・독일사람(ドイツ・ドイツ人)”は出ても“한국・한국사람(韓国・韓国人)” “조선・조선사람(朝鮮・朝鮮人)”は出てこない。

(ヘ) 2/3月：

* 旧正月十五日の行事：

대보름 전날 저녁에 오곡밥을 지어 먹죠.

(テボルムの前日の夕食に五穀飯をたいてたべます)

보름날 아침엔 호두나 밤 같은 껍질이 단단한 과일을 깨물어서 문 밖으로 버립니다.

이렇게 하면 그 해 일 년 내내 부스럼이 안 난답니다.

(15日の朝はくるみや栗など皮が固い木の身を噛んで戸外にすてます。こうすればその

年一年間ずっとできものができないんだそうです)

* 朴先生が山田さんに手紙の書き方や辞書の引き方を教える：

박정수 씨, 편지 쓰는 법 좀 가르쳐 주세요.

(朴正洙さん, 手紙の書き方を教えて下さい)

첫 머리에 “김 대식 선생님께” 라고 쓰세요. 그리고 계절 인사를 하고 상대방과 그 가족의 안부를 물으세요.

(冒頭に「金大植先生님께」と書いて下さい。そして季節のあいさつをして相手とその家族の安否を尋ねて下さい)

예를들면 “물” 이라는 말은 어떻게 찾죠?

(たとえば물という単語はどのように引きますか)

우선 자모 순서에 따라 “ㄹ” 를 찾고, 그 다음에 “ㄷ” 가 붙은 “무” 를 찾죠. (まず字も母の順序に従ってㄹを探し, その次にㄷが付いた무を探します)

또 받침도 자음 순서에 따라 “무” ㄴ 찾으면 “문” 이 나옵니다 (また音節末子音も子音の順序に従ってㄴを探せば문が出て来ます)

〈ラジオ〉

全体的内容は、4-8月が旅行用会話、9-3月が日常生活の会話である。ラジオもテレビと同様に日本人と韓国・朝鮮人との交流という場面設定が基本だが、朴家の夫婦や親子、兄弟間での会話、すなわち韓国・朝鮮人同士の会話が含まれている点が異なる。これは、親が子どもに対して言う文体をだすための設定でもあったと思われる。

登場人物は、日本人として「山田太郎」「田中」、韓国・朝鮮人として「김인수 (金仁寿)」「김영희 (金英姬)」「박대철 (朴大哲)」「송덕진 (宋徳鎭)」「홍기영 (洪起榮)」「조명기 (趙明基)」「유 (兪)」「서 (徐)」であった。

㉔ 旅行用会話 (4-8月)

(イ)4月：日本に住んでいる유さんが、韓国だと思われるところに来て、韓国人の金さんと会う場面や、食事、ホテルでの場面。

지금 어디 사십니까? (今どちらにお住まいですか)

일본에 살고 있습니다. (日本に住んでいます)

練習問題にある“지금 어디 사십니까? (どこに住んでいらっしゃいますか)”の質問に対して、“서울 (ソウル)”や、“평양 (平壤)”の単語が出ている。

(ロ)5月：日本人の山田さんが、地名は出てこないが全体の流れから韓国と推測される土地へ旅行する場面。

* 韓国人との交流：

처음 뵈겠습니다. 저는 야마다 타로오라고 합니다. 잘 부탁드립니다.

(はじめてお目にかかります。私は山田太郎といいます。よろしくお願いたします)

*銀行での換金：

여기서 환금할 수 있습니까? (ここで換金できますか)

달랍니까? 일본돈입니까? (ドルですか。日本円ですか)

여권 좀 보여 주세요. (旅券をちょっとお見せください)

(ハ) 6月：

*家族関係の語彙：“아버지(お父さん)”“어머니(お母さん)”“오빠(兄)”“언니(姉)”
など。

*韓国・朝鮮の風俗：

단오절은 뭘하는 날입니까? (端午の節句は何をする日ですか)

씨름도 하고 그네도 뛴니다. (相撲をとったり, ブランコに乗ったりします)

(ニ) 7月：道を訪ねる表現のほか、時刻・時間数・曜日・月数・日数など。

여보세요, 말씀 좀 여쭙어 보겠는데요.

(ごめんください。ちょっとお伺いしたいのですが)

지금 몇 시예요? (今何時ですか) 두 시 이십분입니다. (2時20分です)

(ホ) 8月：4-7月までの内容の復習

⑥ 日常生活の会話 (9-3月)

(イ) 9月：

*秋の季節の風俗, お盆について：

음력 8월 15일이 추석인데 조상의 산소에 가서 성묘하는 날입니다.

(旧暦の8月15日がチユソクですが、先祖の墓所に行ってお墓参りをする日です)

*事務所を訪ねた山田さんと朴大哲さんの飲食店で食事する内容：

매운것도 좋아하세요? (辛いものも好きですか)

네, 좋아 합니다. 김치도 잘 먹어요. (ええ, 好きです。キムチもよく食べますよ)

(ロ) 10月：朴家の一日の過ごし方のなかで、夫婦・親子の会話。

*進学の問題：

진학 지도 때문에 오늘 학교에 갔다 왔어요. (進学指導のために学校に行ってきたのですよ) という母。서두르지 말고 꾸준히 복습해라. (あせらずにまじめに復習しなさい) と息子に言う父。

(ハ) 11月：田中さんが朴家を訪問、冬を迎えた韓国・朝鮮人おばさん同士の会話。

*家族についての会話：

타나카씨 덕은 별일 없으십니까? (田中さんのお宅ではお変わりありませんか)

큰 딸이 올 봄에 취직했어요. (上の娘が今年の春就職しました)

*大量のキムチ漬け, オンドルの手入れ, 練炭の買い入れなど冬を迎えるための準備：

김장감을 많이도 마련하셨네요. 이 걸 다 담그세요?

(キムチの材料をずいぶん用意なさったのですね。これみんな漬けるのですか)

봄까지 먹으려고요 (春まで食べようと思ひましてね)

(二) 12月:

*冬至, 크리스마스, 正月などの風俗について:

일본에서는 호박을 먹는 풍습이 있는데 여기서는 어떻습니까?

(日本ではカボチャを食べる風習がありますが、ここではどうですか)

그래요? 저희는 팔죽을 쑤어 먹어요.

(そうですか。私たちはあずきかゆを炊いて食べます)

(ホ) 1月:

*親戚關係を示す単語: “할아버지 (おじいさん)” “할머니 (おばあさん)” “삼촌 (おじさん)” “고모 (おばさん)” “외삼촌 (母親の兄弟)” “이모 (母親の姉)” “이모부 (母の姉妹の夫)” など。

*理髮店, 美容院での会話:

너무 짧게 하지 마시고, 보통으로 깎아 주십시오.

(あまり短くしないで, 普通に刈ってください)

앞머리를 내리고, 파마는 굵게 해 주세요.

(前髪は垂らして, パーマは太めにかけてください)

(ヘ) 2月:

*郵便局・電報局での表現:

등기로 해 주세요. (書留にしてください)

5번 창구로 가서 우표 사 오세요. (5番窓口で切手を買ってください)

미국으로 국제 전보를 치고 싶은데요. (アメリカに国際電報を打ちたいのですが)

*旧正月:

음력 설을 쇠는 사람이 많은가 보지요.

(旧曆の正月を祝う家がまだ多いらしいですね)

네, 쉬는 날이 아닌데도 음력 설을 찾는 사람이 있어요.

(ええ, 休みの日ではないのに, 旧曆の正月を大事にする人がいるのです)

(ト) 3月: 山田さんと金英姬さんが春を迎えてピクニックに行く。

개나리 진달래가 피어야 정말 봄이 온 느낌입니다.

(つばきの木は南の島だけで見ることができます)

등백나무는 남쪽 섬에서만 볼 수가 있습니다.

(れんぎょうやチングルレ咲けばそれこそほんどうに春が来た感じです)

◎ 読み物教材としての昔話

9月からの毎週土曜日、「文章表現に少しずつなれる」ための読み物教材として、昔話『거울 (かがみ)』『삼년고개 (三年峠)』が取り入れられた。

昔話であるため「갓 (笠)」「망건 (髪の乱れをふせぐ帯状の頭巾)」「원님 (李朝時代、郡などを治めていた地方長官)」など、今はあまり使われない単語もあるが、全体的にやさしい語彙が用いられている。また、文も単文が多く、読みやすい。両方とも、韓国・朝鮮人の間で親しまれている昔話で、韓国・朝鮮人の好むユーモアがよく表れている。

『かがみ』：山奥に住む農民の家庭に、ソウルに行った夫が市場で買った鏡を持ち込むが、家族はそれがわからずにトラブルが起きる。そして、その解決を土地の「ウオンニム」に求めたが、彼も鏡を知らなかったので、鏡に映った自分を見て新しい「ウオンニム」が来たと思って、その座を下りた。地方長官がしょっちゅう変わる朝鮮時代の風刺とも言える。

『三年峠』：あるおじいさんが、そこで転んだ人はその時から三年しか生きられないと言われている「三年峠」で転んで悩んでいた。そのおじいさんに、「三年峠というのは転ぶ回数三倍の歳月を生きられるからだ」と、ある少年が言い聞かす。それを信じたおじいさんは、「三年峠」で何回も転んだという。誰にでもある長生きへの願いを面白く描いたものである。

㉔ 歌・ことわざ・慣用句・擬態語・なぞなぞ・ハングルの歴史など

テキストの巻末にはさまざまな副教材が付けられていた。

(イ) 歌

テレビの「今月の歌」には、「도라지 (トラジ)」「풍년가 (豊年歌)」「내고향 (わか故郷)」「새타령 (烏打鈴)」「아리랑 (アリラン)」「떡풍년노래 (お餅の豊年の唄)」「젊은연인들 (若い恋人たち)」の7曲。ほとんど民謡であるが、「わか故郷」「若い恋人たち」のような講座番組のためのオリジナル曲もある。また、2月から「この国に伝わる代表的な古典弦楽器で、日本にも新羅琴として伝わり、正倉院にも三面保存されている伽耶琴 (가야금) 演奏も組み込まれていた。曲目は「沈香舞」「絹の道」「散調・金竹坡流」であった。

(ロ) ことわざ・慣用句

「長い間、庶民の知恵として言い伝えられてきたこれらのことわざを通して、日本と私たちの庶民同志の考え方の共通性や違いを認識し、お互いの理解を深めあう」⁽⁸⁾のために、ことわざがテレビでは14個、ラジオでは77個が載った。たとえば、「소 귀에 경 읽기 (牛の耳にお経読み→馬の耳に念仏)」「첫술에 배 부르라 (千里の道も一歩より始まる→あせらず順序正しく事をなせ)」「발 없는 말이 천리간다 (うわさ千里を走る→言葉を慎むように) (テレビ)」「금강산도 식후경 (金剛山も食後の現物→花より団子)」「낯놓고 ㄱ 자도 모른다 (鎌を置いてㄱの字も知らない→文字を知ることの大事さ)」「돈벌어 자식 줄 생각 말고 자식에게 글을 가르쳐라 (お金を集めて与えること考えず、子どもに文

を教えよ)」「안방에 가면 시어머니 말이 옳고, 부엌에 가면 며느리 말이 옳다(居間に行けば姑の言葉が正しく、台所に行けば嫁の言葉が正しい→両方の主張が対立してどちらの側にもそれなりの正当な理由がある)」「(ラジオ)が載っている。

慣用句には、日本語と韓国・朝鮮語両言語の「発想が全く同じもの、類似しているもの、まったく違うもの」⁽⁹⁾があり、それらを通じて両言語の発想の共通性と違いを知るために、テレビ8,9月号に50個が載っている。

共通のものには、「손을 떼다(手を切る)」「눈에서 불이 난다(目から火が出る)」「입이 가볍다(口が軽い)」など。類似のものには、「발이 넓다<足が広い>顔が広い」「새 발에 피다<鳥の足の血だ>すずめのなみだ」「손윗 사람<手上の人>目上の人」「눈에 들다<目にはいる>気に入る」「눈에 나다<目から出る>見離す」など。全く違うものには、「손바닥 만하다<てのひら位だ>猫の額」「생각이 굴뚝같다<考えが煙突のようだ>喉から手が出る」「누워서 떡 먹기다<寝ころんで餅を食べることだ>朝めし前だ」など。

(ハ) 擬声語・擬態語, なぞなぞ, 年中行事など

そのほか次のようなものがあった。

擬声語・擬態語については、「母音調和の法則がかなり強く残っていて…日本語同様非常に多く使われています。臨場感があってコミュニケーションに欠かせない効果的なもの」⁽¹⁰⁾として、テレビ(10,11月号)に51個取り上げられていた。「고양이가 야옹하고 운다(猫がニャオーとなく)」「개구리 소리가 개굴개굴 하고 돌린다(かえるの音がケロケロと聞こえる)」「매미가 맴맴하고 운다(せみの鳴き声がミンミンと聞こえてくる)」など。なぞなぞは、「伝承的言語文化の中で、なぞなぞほど短くて興味と英知に富むものはありません…時代の推移と共にその時代の社会相のようなものを取り入れて新しく作ったものもかなりあります」⁽¹¹⁾と、59個が乗っている。たとえば、「가까운데 있으면서도 보이지 않는 것은? (近くにあっても見えないものは)」「콩은 콩인데 못먹는 콩은? (大豆は大豆でも食べられない大豆は)」である。年中行事は、1月から12月までのものについて説明。身体・住居・家族と親戚の名称・伝統衣服・お正月の遊び・図解基本単語集である。

(ニ) ハングル文字の歴史や辞書の使い方

テレビ, ラジオそれぞれに, 『訓民正音』について「文字について」を載せ, ハングル文字の歴史や名称の変化, 韓国と北朝鮮それぞれの正書法の違いについて解説されている。

すなわち, テレビ4,5月号では, ハングル文字は, 「自分たちのことばを書き表すために自らのことばを分析して, その音韻を正確に表すように作った独創的で科学的な文字です。」また, 制定された1443年には『訓民正音』と名付けられたが, その後, 「諺文」「国文」の名を経て今日の呼び方「ハングル」となったこと。そして, 「『ハン』(한)は『大きな』, 『クル』(글)は『字』, つまり『大いなる文字』と解するのが一般的です。」と, 解説され

ている。

ラジオ4月号では、ハングルの制定と名称の他に、韓国と北朝鮮との正書法の違いについて次のような説明がある。韓国では「語頭のㄹ (r), ㄴ (n) にかわる」「語頭のㄴ (n) (したがってㄹ (r) も) は、母音 i, および半母音 y [j] の前では発音されず、表記しない」のに対して、北朝鮮では、「語頭のㄹ (r) は、ㄹ で表記し、語頭のㄴ (n) は母音 i および半母音の前でも表記し、表記したとおりに発音する。」

また、辞書の使い方や出版されている辞書の紹介、「標準語と“査定”」「ハングル“풀어쓰기”(ばらし下書き)運動」「ハングルのローマ字表記について」の説明がある。

(ホ) 昔話

ラジオでは、9月から土曜日用の教材として昔話が取り扱われたが、「初心者」むけであるテレビには、最後になる2/3月号の巻末に『두더지 결혼 (もぐらの結婚)』が載せられていた。内容は、結婚適齢期となった地下に住むもぐらが、地上にいる空、太陽、月、雲、風、石仏に結婚を申し込んだが、次々断られ最後には同じもぐらと結婚するという内容。これは、“分不相応なことを望むとか、とてつもない欲を出す人”に対して「もぐらの結婚だ」というように、現実性のない考え方を直すような教訓話である。

③テキストの特徴と名称問題からくる制約

(a) テレビ・ラジオの分担と文字・文体・文法修得の順次性

テキストは、「初心者」「初級の中級」というテレビとラジオの分担や、文字の読み方や文体修得、存在詞や動詞の使い方の段階のふみ方など、ていねいな作り方がなされている。とくに、テレビでは、画面の効果を利用してハングル文字の習得、ラジオでは聴覚のみの学習や月曜日から土曜日までの学習時間が多いことを利用して発音の練習、という役割分担による内容となっていることが注目される。また、文字の読み方については、カタカナと発音記号の併用によって、カタカナでは発音できない母音や終声(パッチム)を発音記号で学べるように工夫されている。

文体は、かしこまった丁寧な言い方から親しみのある丁寧な言い方、子どもとも話してできるような文体まで学習できるようになっている。また、文法は、日本語と語順や助詞の使い方の共通点を活用し、基本文型から学習できるようになっている。そして、テキストの後ろには「単語リスト」(テレビ)、「単語一覧表」(ラジオ)が載っており、語彙力をつけるための学習にも工夫がなされていたことにも特徴がある。

(b) 漢字熟語の紹介による漢字の韓国・朝鮮語読みと共通語彙の考慮

漢字熟語は、日本と韓国で共通で使用されている漢字を紹介し、漢字の読み方を学ぶことによって語彙の学習への考慮が見られる。また、日本語と一致しない漢字熟語を、表記したことによる意味を把握することへの配慮があった。

(c) 実用的なものをふまえた文化とくに生活文化理解の重視

また、場面設定などでも工夫がなされていた。前半では、テレビ・ラジオともに、実用的な会話に時間を多くさいていた。あいさつ、自己紹介、電話のかけ方、手紙のだし方、食事の時のあいさつ、両替の仕方、道のたずね方、家族を説明するのに必要な名詞、言葉や手紙の書き方と辞書のひき方の教わり方などである。前半の終わりごろからは、韓国・朝鮮の生活や文化の比重が大きくなった。朝鮮の三国時代の文化と日本の飛鳥の文化とのつながりについて語り合う場面があり、古代史の再評価にかかわる提起がなされている。またし、『春香伝』などの古典小説や昔話も登場する。秋に先祖の墓参りをする「추석(チュソク)」や冬至や正月などの年中行事、キムチ漬けなどの冬支度なども登場する。そして、子どもの進学問題や美容院の場面など、現代社会における家族などの生活も描かれている。

このような生活や文化の重視は、このテキストの大きな特徴であると言ってよいと思う。大江講師が、「文化的な背景といってもいろいろなものがあり、人によって興味の対象はちがうでしょうが、この講座では生活文化というようなものを考えながら会話の勉強をして」⁽¹²⁾きたと言っているように、ことわざ、慣用句、歌、謎謎、年中行事などの「生活文化」が本文のみならず、付録などで多く紹介されている。このなかには、「端午の節句」、秋の墓参、冬支度の漬物、クリスマスの贈り物やカード、春の花見など、日本と共通のものも多い。また、秋の墓参の時の食べ物や漬物の種類のちがい、冬至の食べ物、花見の時の花の種類のちがいなど、似ていながらかなりちがうものもある。それらの理解をとおして、韓国・朝鮮あるいは韓国・朝鮮人への親しみ、日本や日本人との関係についての理解が、日常的な生活感覚のレベルで深まる効果が期待できるものとなっていたと思われる。

(d) 名称問題からくる制約

しかし、名称問題から来る制約も少なくなかったように見える。

(イ) 地名・国名などにかんする制約

その一つは、地名・氏名・国名などにかんする制約である。

具体的な地名は、ラジオの4月号で「서울(ソウル)」「평양(平壤)」が出てくるだけで、「부산(釜山)」「대구(大邱)」「인천(仁川)」「개성(開城)」「원산(元山)」などの大都市の名や京畿道・平安道などの道の名は登場しない。また、椿が咲くのは「南の島」として説明されるにとどまり「済州島」などの固有名詞は出てこない。そして、その済州島の「漢拏山」をはじめ白頭山・金剛山・雪岳山・智異山などの有名な山の名も出てこなかった。このように、日本人が韓国と思われる地域を旅行するという場面を設定をしながら、具体的な地名がほとんど出てこないのは不自然であり、臨場感が弱くなっているのは否定できない。

姓名にかんして、김=金=キムさんや박=朴=パクさんは登場したが、キムに次いで多い名字である「李」さんは、登場していない。それは、北では「리(リー)」南では「이(イー)」と表記が南北で異なるためであると考えられる。さらに肝心の「한국=韓国」「조

선=朝鮮」も、「한국사람=韓国人」「조선사람=朝鮮人」も、「한국어=韓国語」「조선어=朝鮮語」という語も用語も登場しない。韓国・朝鮮は「かの国」、韓国・朝鮮語は「この言語」、韓国・朝鮮人は「話し相手になる現地の人たち」などと表現されていた。

(ロ) 物語や歌に現れた制約

生活文化を重視しつつも、南北共通の内容に限定したためであろう。読み物や歌なども、民話・昔話・古典小説や民謡がほとんどを占め、現代のものは、番組のために新しく作った歌「わが故郷」と「若い恋人たち」のみである。

(ハ) 歴史的関係や現代生活にかんする制約

歴史的な関係や現代生活のあつかいも、きわめて限定されたものとなった。歴史的関係については三国文化と飛鳥文化などのかかわりのみであったし、現代生活を素材にしたものも、進学問題に限定されていた。日本との関係にかんして言えば、深刻な植民地時代の問題や柳宗悦などの制約された中での朝鮮人との協力の経験なども、評価のちがいがあってか扱われることはなく、金芝河や日本を舞台に起きた金大中拉致事件など韓国の民主化にかかわることも、多くの人の関心があることではあったが、論点としても扱われなかった。

南北分断、日本と韓国・朝鮮との外交関係、韓国が^{チヨンドファン}全斗煥の強権政治のもとにあったなどを考えると、以上のような制約も、NHKの講座としてはやむをえなかったというべきかも知れない。しかし、これらの制約が、ていねいに作られたテキストのリアリティーを弱める結果となったことは否定できない。梅田講師や当時のディレクターの話によると、テキストに広告や写真を乗せることもできなかったと言う。

(ニ) 制約条件にかんする批評

こうした制約された条件のもとに出発した「ハングル講座」の状況を、当時の『日本経済新聞』は、次のように批評していた。

「“アンニョンハシムニカ（こんにちは）ハングル講座”で呼称は“逃げた”ものの、テキスト中には韓国、朝鮮という言葉はもちろん、地名もほとんど出てこない。

また登場人物に金さんはいても、李さんは顔を出さない。ともに代表的な姓だが、李の発音が南と北で違うからだ。

『楽しく学べるように歌を』の要望も強い。これも頭痛のタネ。『釜山港に帰れ』など親しまれている歌は大半が南のもので、共通に使える歌は少ないという。政治的配慮はわかるが、制約が多すぎて、これでは興味が半減しないか？」⁽¹³⁾

この記事はつづけて、川口放送総局長が「たしかに不自然だが、ここから出発しないと」と述べていることを伝えながら「川口放送総局長の言葉にはNHKの苦渋がにじんでいるようだ」と述べていた。

(2) 社会的反響と視聴者たちの声

①大きな社会的反響

「4月から、やっと待ちに待った朝鮮語の講座がはじまり大喜びしている者です。政治的に色々とむづかしく、やりにくい面も多いと思いますが、それを乗り越える日本と朝鮮半島の友好の基礎をすえ広く日本社会の中に育てていく意味からも、この講座の持つ意味は大きいと、思います。」(84年NHKに直接寄せられた葉書)

このような声によって迎えられた「ハングル講座」に対する市民の反響は、NHK関係者の予想をはるかに上回るものであった。テレビ8万部(4/5月号)、ラジオ7万部(4月号)の計15万部印刷された放送用テキストは、すぐ売り切れたため、テレビ・ラジオそれぞれ5万部ずつ増刷、結果的には25万部の発行となった。当時の中国語講座テキスト販売数は9万部だった。⁽¹⁴⁾

②利用者の分布と利用頻度

(a) 視聴者たちの分布

テキストを買い、「ハングル講座」で学んだ人は、どんな人々だったのだろうか。

NHK放送文化調査研究所は、講座開設から2カ月ほどたった1984年6月号(テレビは、6.7月号)のテキストにアンケート用はがきを折込み、7月31日締めきりで、利用者へのアンケート調査を行った。その結果、テレビ4,218名、ラジオ4,928名の回答を回収し、それを分析した。⁽¹⁵⁾

それによれば、利用者の性別、年齢、職業、目的、目標、地域などは、次のとおりであった。

利用者の男女の内訳は、テレビは[男75.3%、女24.6%]、ラジオは[男74.7%、女25.3%]とほとんど同じであり、男3に対して女1で圧倒的に男が多かった。

年齢別構成は、19才以下8.15%、20代18.0%、30代19.6%、40代19.0%、50代18.3%、60代10.8%、70才以上3.7%であった。20代から50代までが同じ20%弱で10代にも広がりが見られる。視聴者は、年齢的にはまんべんなく広がっており、「要望する会」が想定していたよりも幅広い層に広がっていたと思われる。そして、この時点の日本では学校で韓国・朝鮮語を学ぶ機会がきわめて限られていたことを考えると、「ハングル講座」が幅広い年齢層の人々に貴重な学習機会を提供していたことがうかがえる。

職業別では、会社員29.5%、学生14.7%、公務員9.7%、無職9.3%、教師8.5%で、会社員の比重が3割を占めている。

番組利用の目的(複数回答)は、「隣国を理解するため」63.3%、「趣味・教養のため」62.9%で、「旅行・観光のため」26.7%、「職業・仕事に役立てるため」18.9%、「その他」17.4%、「学校の勉強の補助」2.7%であった。「隣国理解」と「趣味・教養」が6割強で圧倒的であるが、「旅行・観光」「職業・仕事」の2-3割もけっして小さくはない。「学校の

勉強の補助」は、民族学校に通う在日韓国・朝鮮人の児童生徒の回答も含まれていると見てよいだろう。「その他」17.4%の内訳の順位は、テレビが、①「友人と会話したい」②「母国語を習得するため」③「ハングル文字に興味」④「朝鮮半島に在住したことがある」⑤「生まれ育った国の言葉なので」。ラジオが ①「母国語習得」②「友人と話したい」③「放送受信」④「ハングルに興味」⑤「老化防止」であった。いずれも「友人と会話したい」「母国語を習得するため」が上位二つを占めており、在日韓国・朝鮮人の母国語学習や、朝鮮半島（韓半島）に友人のいる人による実践利用もある程度あったことがうかがえる。

利用目的を職業別に見ると（複数回答）、「趣味・教養のため」については、学生71.6%、無職66.6%、公務員65.0%、会社員62.6%である（全体平均62.9%）。「隣国を理解するため」については、教師69.9%、自由業66.1%、公務員65.9%、無職64.9%、主婦64.2%、会社員63.2%（全体平均63.3%）。「旅行・観光のため」については、商工・サービス業36.1%、自由業31.9%、会社員28.7%（全体の平均は26.7%）。「職業・仕事に役立てるため」については、会社員29.3%、教師25.3%、商工・サービス業21.2%、自由業19.9%、公務員19.7%（全体平均18.9%）であった。

目標とする語学力は、「ハングル文字が読め、あいさつができる」（初級）、「新聞が読め、日常会話ができる」（中級）、「手紙が書け、会話がほぼ自由にできる」（上級）のうち、初級31.0%、中級45.2%、上級23.2%で、中級を目指す人が約5割を占めていた。これを職業別に見ると、初級では、無職42.6%、主婦42.1%が一番高い。中級では、会社員50.7%、学生49.2%、公務員48.7%、教師47.6%のである。上級では、商工・サービス業33.6%、自由業28.7%、主婦26.1%、学生25.3%である。

利用者の在住地域は、関東甲信越22.4%、近畿21.7%、東京都21.6%、東海北陸11.8%が上位を占めている。これは、当時の在日韓国・朝鮮人の地域分布の上位4地域（近畿48.4%、東海北陸14.1%、東京都11.4%、関東甲信越10.7%）と重なっている。これに、当時の日本の総人口に近畿地方在住人口が占める割合16.7%（1980年国勢調査）を重ねてみた場合、在日韓国・朝鮮人の多住地域であることが「ハングル講座の利用者が近畿地方に多い理由のひとつかもしれない」と、「調査結果」は述べている。しかし、東京都の人口が総人口に占める割合が10%程度であったことを考えると、必ずしもそうとは言いきれないかも知れない。

（b）利用頻度

同じアンケートの利用頻度調査の結果によれば、「ほとんど毎回利用」77.7%、「半数ぐらい利用」14.3%、「数回利用」5.3%、「ほとんど利用しない」1.9%であった。回答をした人は熱心な人だと考えられるが、4月から7月までの熱心な利用者は、そのほぼ約8割が毎日「ハングル講座」を利用していたと言える。また、講座の有効性については、「非常に役に立つ」と答えた人が61.2%。以下、「やや役に立つ」24.4%、「どちらともいえない」10.0%、

「あまり役に立たない」2.0%、「まったく役に立たない」0.4%であった。“役に立つ”としている人が、回答者のおよそ9割を占めていた。反響の大きさは利用頻度の点からもうかがうことができる。

③視聴者たちの声

テキスト第一年度目にNHKに寄せられた手紙・ハガキや、翌85年度からはテキスト巻末に設けられた「마당 (ひろば)」に載った視聴者の声、⁽¹⁶⁾そして『季刊三千里』の投書欄「おんどるばん」に載った声には、次のようなものがあった。

(a) となりの国の言葉を学ぶことが楽しい

となりの国の言葉や文化を知るのは楽しいという率直な感想は多く見られた。

「未知の世界を知ることとはとても楽しいことです。…隣国の歴史を知り、音楽に親しんでみようと思えば果てしなく広がります (広島・御澤和子, 66才)」(ラジオ6月号)
また、隣国についての勉強をふかめるために学んでいるという声もあった。

「近年、私は一番近い隣国について知りたい、学びたいと切に思うようになり、文化・歴史・生活など自分なりに読書を通じて学んで参りましたが、やはり言葉を知らなければと思いました。…言葉を学び始めましてからは、隣国に関する読書量も増し、関心も一層深まりました。また、日本を別の視点で見つめさせられました。

私のライフワークとして、両国の親善のためにいつの日か暮らしの片隅でお役に立つ日がありますように、と願って勉強を続けて参りたいと思っております。(所沢市・渡辺)」(ラジオ1月号)

(b) 韓国旅行、韓国人との文通・対話

韓国旅行の時に多くの人と話したい、韓国人と平等に話したいという人も多かった。

「(ハングル講座)放送が終わってラジオの周波数ダイヤルを回すと、韓国のラジオ放送が鮮明に聞こえてきます…。今は文通友達もできました。…いつかソウルへ行くのが僕の夢です。(釧路・樋口)」(ラジオ12月号)

「今、ハングルに夢中です。このままずっと勉強して、韓国人と対等に話せたらと夢を見えています。(千葉県・相川)」(同上)

(c) となりの国の言葉に興味をもつ中高校生

隣国の言葉を楽しく学んでいるという人々の中には中学生、高校生など、若い人たちもいた。

「ぼくは…中学1年の男子です。学校を休んで寝ていたときに『ハングル講座』を初めて聞きました…。韓国と日本は近いので、もし行ける機会があれば、言ってハングル講座でならった言葉を使ってみたいです。(匿名希望)」(ラジオ1月号)

「僕は高校2年生の男子です。中学生のことからハングルに興味があり、少し勉強していました…。隣国の言語を学ぶことによって、日本語を異なる角度からとらえることがで

きるのではないかと期待しています（札幌市・大久保）」（ラジオ7月）

「私は高3の女の子です。…何ととっても日本語とすごくよく似ているから、楽しくてもう、とりこになっています…。この言葉を独学で学んで、いつかソウルに行ってオリンピックを見るのが夢です。バレエと新体操を見たいと思っています。（秋田県・樋口）」（ラジオ8月号）

(d) 在日韓国・朝鮮人

在日韓国・朝鮮人の視聴者の声も届いていた。

「私は在日朝鮮人3世ですが、우리말（私たちの言葉一引用者）（我語）をあまりしませんでした。昨年5月号を読んでいるうちに、こんなに簡単だったのかと感じてしまい…。」（ラジオ2月号）

(e) 期待、はげましと注文

講座に対する期待や講師・番組スタッフへはげましや注文の声もあった

「口の動きをアップでとらえたり、寸劇・アニメなどを生かしたユニークな内容となっています…大江先生は南北の発音・表記の違いにふれていますが、意識的に北と南のバランスをとろうとする、公平な姿勢には共感をおぼえます（習志野市・村山）」（『季刊三千里』第38号）

「韓国（朝鮮）語を母国語とするゲストの方がいらっしゃるのだから、復習の日にだけでもいいから、2人もしくは3人で会話をしてほしい…。2国との文化の相違、日常のことなんでもいいから私たちに紹介してほしい。」（84年NHKに直接送られた葉書）

「もっと朝鮮文化・生活を紹介しながら…もっと感覚的にうたえるものたとえば童謡とか民謡とか（フランス語参照）をふんだんに取入れて…下さい。」（同上）

また、日本人の韓国・朝鮮語学習、在日韓国・朝鮮人の母国語学習という二つの面をもつ「講座」によって、「日本人の歪められた朝鮮観を変えていくこと」が、在日韓国・朝鮮人にとっての母国語が日本社会で尊重されることになるので、そのような質をもった「講座」になることが期待されるというものもあった。

「NHKでの朝鮮語講座があくまでも日本人のため…である…が、…私のような在日朝鮮人二世が朝鮮語学を習得する好機となることも事実なのである。それほどまでに、在日朝鮮人二世・三世の多くは放置されてきた。…NHKの朝鮮語講座で、多くの日本人が朝鮮語を通して、歪められた朝鮮観を変えていくことが期待される。その時、在日朝鮮人にとって母国語のもつ意味がどんなものであるか、さらにはっきりしてくる。（会社員・朴哲洙）」

そして、「それにしても、朝鮮・韓国という表現を全く使わずにどこまで出来るのか」（習志野市・村山）」（『季刊三千里』第38号）ということが、あらためて指摘されていた。

註

- (1) 『ハングル講座』1984年度テキスト テレビ(4.5月号)・ラジオ(4月号)3ページ
- (2) 7月1日からは午前7:40-8:10
- (3) 前掲『ハングル講座』1984年度テキスト 6ページ
- (4) 前掲『ハングル講座』1984年度テキスト 6-7ページ
- (5) 前掲『ハングル講座』1984年度テキスト テレビ(4.5月号)4ページ
- (6) 同上
- (7) 同上
- (8) 『ハングル講座』1984年度ラジオテキスト3月号 57ページ
- (9) 『ハングル講座』1984年度テレビテキスト8,9月号 62ページ
- (10) 『ハングル講座』1984年度テレビテキスト10,11月号 54ページ
- (11) 『ハングル講座』1984年度テレビテキスト12,1月号 64ページ
- (12) 『ハングル講座』1984年度ラジオテキスト3月号 2ページ
- (13) 「制約が多過ぎる『ハングル講座』」『日本経済新聞』1984年5月7日
- (14) 「『アンニョンハシムニカ』ハングル講座テキスト飛ぶ売れ行き」『報知新聞』(東京)1984年4月9日
- (15) 宇佐美昇三「『アンニョンハシムニカ』の反響」『文研月報』1985年2月号48-54ページ
- (16) 84年度に視聴している人の声のみである。

6. NHK「ハングル講座」開設の歴史的立場づけについて

(1) 三つの先行研究における歴史的立場づけについての二つの論点

三つの先行研究における「ハングル講座」開設の歴史的立場づけは、一連の経過から当然、単純なものではない。ここであらためて、先行研究における「ハングル講座」開設の歴史的立場づけを見ておきたい。

矢作勝美論文は、1981年にNHKが「朝鮮語」の名称で講座開設を内部決定しながら、「韓国語」にせよという圧力の前に、何も説明なく「朝鮮語講座」から「안녕하십니까 ~ハングル講座~」に変更したことは「公共放送としての自らの使命を放棄し、言論の自由をふみにじるもの」と批判。そして、それは「番組を維持するうえでも同じである」(83ページ)と述べている。ここから、開設された「ハングル講座」にはNHKの主体性がつらぬかれていないというのが、矢作論文における評価と見てよいだろう。

大村益夫論文は、開設された「ハングル講座」に対する明確な評価を行っていない。しかし、論文の「付記」を次のように結んでいる。

「確かに、NHKに講座ができようが在日する彼らの『日々の泥濘』にも『韓国の民衆

にも何ら関係がない』であろうし、『誤った認識を自ら問いただす』ために『まず言葉から』という『要望する会』の論理は楽天的にすぎるかもしれない。しかしながら、目に見えぬほど微々たる歩みではあっても、朝鮮語学習が日本の変革にかすかにでも連なりうるのではないかという期待に私は賭けたいと思う。」(307-308ページ)

「NHKがまず自己の立場を明確にした上で講座をスタートさせるべきであり「これをしてしないで講座を始めることに私は反対」と、84年に大村は述べていたので、「付記」で言う「朝鮮語学習」に「ハングル講座」が含まれるのかどうかは不明である。しかし、「かすかにでも連なりうるのではないかという期待に私は賭けたいと思う」という現在形の結び方の中には、「ハングル講座」開設について「かすかにでも」肯定的に評価することが含まれているように感じられる。

これに対して、大野力論文は「講座」開設自体については、「画期的なこと」だとし、きわめて肯定的な評価をしている。

「かつて禁圧をはかったその隣国の言葉を、今度は日本の公共放送機関であるNHKが、日本人に向けて普及しようというのである。これは日本とその隣国の関係史において、画期的なことと言うべきだろう。」(71ページ)

しかし、そのような「『ハングル講座』の画期的開講」もそれに至る経過から「現状の『ハングル講座』は「問題状況」を「抱え」ることになったと、大野論文は言う。そして、その経過にかんする「事実を知る」ことを通して「現状の『ハングル講座』がかかえている問題状況を知る」ことが、「せっかく始まった『ハングル講座』を日本人視聴者の意思によって支え成功させる」ための「開設運動に続く講座活用運動の視点」につながると言う。

以上のような評価において、少なくとも次の二点が共通の論点となっていることは確かであろう。①「ハングル講座」の開設を、日本における韓国・朝鮮語学習の歴史における一つの画期とみなすのかどうか。②現実の「ハングル講座」が抱えている問題は、どのようにしたら改善されるのか。

(2) 第三の論点としての「歴史の転換」の局面の変化

この二つの論点のうち、①については、「『ハングル講座』の画期的開講」と言いきっている大野論文はもちろん、矢作論文や大村論文も「画期」をなすことは否定していない。しかし②については、大野論文が「講座活用運動」を提唱するのに対して、矢作論文・大村論文はとくに何らの提案をしてはいないという点で、見解には大きなズレがあるように見える。大野論文が楽天的に見ようとしているのに対して、矢作論文・大村論文は悲観的とは言わないまでも、少なくとも楽観的ではない。

また、「歴史の転換」としての「公共放送における日本人の朝鮮・韓国語修得の営みの、

いまがその第一歩であることを、心に銘じておきたい」と、「講座活用運動の視点があり得るはずである」と強調する大野論文も、具体的にはどんなことが「講座活用運動の視点」なのかについては、述べていない。

私は、「講座」開設の歴史的な位置づけについて、基本的に大野論文に賛成ではあるが、大野論文では「視点」が言葉にとどまっていることが気になる。そしてこれを深めるためには、「ハングル講座」開設によって、大野論文が言う「歴史の転換」の局面自体が変化したという認識が、まず必要ではないかと思う。「ハングル講座」開設以前、日本における韓国・朝鮮語学習をめぐる主な矛盾は、韓国・朝鮮語を禁止・抑圧したり、奨励したりといういわば言葉の外部の問題にあった。しかし、「ハングル講座」の開設によって少なくとも形式的には、禁止・抑圧から自由・普及の方向へと大きく局面が変化した。これによって、韓国・朝鮮語の学習機会がたいへん身近なものになった。また、韓国・朝鮮語学習への要求や必要性から大学や公民館などでも講座が増えた。もちろん、抑圧や軽視がまったくなくなったわけではない。しかし、外的な矛盾をなお引きずりながらも同時に、どのような学習内容の編成を行うのか、という言葉の内部の矛盾をもかかえる局面へと移行したということである。以下、それを述べてみたい。

(a) 1907-45年の時期の日本における韓国・朝鮮語学習には、〈①朝鮮人に対する日本語強制 ②一般の日本人による朝鮮語無視・蔑視 ③警察官・看守・教員などによる支配のための朝鮮語学習〉という三位一体構造が存在した。

しかし、市民運動や永井文相の努力、またNHK内部の努力などによって実現した「ハングル講座」開設によって、この構造は基本的に解消した。変わって〈①朝鮮半島および日本における韓国・朝鮮語学習の自由 ②一般の日本人の間での韓国・朝鮮語学習のひろがり ③相互理解・協力のための学習の展開〉という構造が、基本的に形成された。これをもって、日本における韓国・朝鮮語学習にかんする一つの画期とすることができる。【第一の論点にかんする「歴史の転換」】

(b) 「ハングル講座」は、日本人民衆が韓国・朝鮮語を学ぶノウハウが天理大学などごく一部をのぞいて80年近くも切断にちかい状態にあった後に、それを再建・創造する課題を背負わされて出発することになった。そして、広範な人々への韓国・朝鮮語理解をより深いところで実現するために、「より生活に密着した」方法、「生活文化」の重視という積極的な要素を具体的な教材編成の点で定着させた。また、そこには市民を対象とする韓国・朝鮮語教育のノウハウや韓国・朝鮮語学者たちの研究成果も生まれた。

しかし、名称問題による難産の末に生まれた現実の「ハングル講座」においては、大きな制約の下にあった。それは、地名・姓名・言語名などの分断国家・南北対立にかかわることがらや、日本と韓国・朝鮮で評価が異なる歴史的な関係にかかわることがら、韓国の民主化や現代生活上の諸問題にかかわることなどを扱うことは、きわめて困難であるとい

う制約であった。そしてそれは「生活文化」の扱いについても、教材としての歌や物語の選択にさいしての制約条件となった。その結果、学習におけるリアリティの弱さがもたらされたことは否定できない。また、本来文字を表すはずの「ハングル」が音声言語をも含むものと誤解され“ハングル語”“ハングルでしゃべる”などの言い方を生みだし、その限りで韓国・朝鮮文化についての誤解を招く結果にもなった。

ここにおいて、日本人の韓国・朝鮮語学習の矛盾は、制度・学習機会などの言葉の外側の問題も抱えつつ、「生活文化」を重視しながらどのようにしたら相互理解・協力のための学習内容編成や方法が可能になるか、という問題をもあわせて追求する局面へと変化した。

【「ハングル講座」成立による問題局面の変化】

(3) 『「ハングル講座」の10年——問題局面解決にむけた歩みの検討』の課題

このような「『ハングル講座』成立による問題局面の変化」という認識を第一の論点と第二の論点をつなぐ第三の論点として設定すると、大野論文が言う「講座活用運動の視点」がより具体的になるのではないと思われる。つまり、こう考えたとき、大野の言う「視点」は、新たに登場した学習内容・方法上の問題局面の解決のための具体的な提案を、学習者側から積極的に行うことを意味する、ということになる。

しかし、いうまでもなくこの問題局面を積極的に解決してゆくのは視聴者だけではなく、テキストを作成する講師・スタッフたちでもある。したがって、視聴者と講師・スタッフとの緊張感のある働きかけあい・協力とによって、学習内容・方法を改善していく、ということになる。

こうしたことは、その後の10年間におよぶ「ハングル講座」において、どのように行われてきたのだろうか。この点について、中級・上級への対応をも意図する1993年発足の「『ハングル』能力検定」をも含めて検討することが、「講座」開設の歴史的な位置づけをより明確にすることにつながるであろう。また、「講座」の成立と展開とが、大学や公民館などでの韓国・朝鮮語学習機会の増加などの制度・機会の充実や、学習内容の改善に、どのような積極的影響を与えたのかどうか。この点もあわせて検討される必要がある。【第二の論点の具体化としての、「ハングル講座」の10年における問題局面解決に向けた歩みの検討】

これらの点については、多くの方々からのご批判、ご指導をいただきながら、私自身の今後の研究課題としたい。